

大宰府条坊跡 25

—第230次調査—

平成16年

太宰府市教育委員会

序

本書は、平成15年度に行った共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財調査記録に関する報告書です。

今回報告しております調査は、太宰府市の市街地を広く取り込む大宰府条坊跡の一角に所在し、大宰府官制成立から廃絶時期に位置づけられる奈良時代から平安時代にかけての人々の生活の跡を記録することができました。特に遺跡名称になっている街割りの跡としての道路、いわば条坊痕跡が確認され、加えて土地整備行為としての整地層および整地事業時の建物と考えられる遺構が検出されるなど、条坊施工の時代背景を考える上で貴重な成果を得ることができました。

本書が文化財保護として実施された記録としてはもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財保護行政に対してご理解いただきました地権者の皆様をはじめ、関係されました諸機関の皆様方に心からお礼申し上げます。

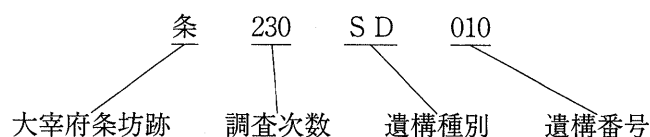
平成16年3月

太宰府市教育委員会

教育長 關 敏治

例 言

1. 本書は、大宰府条坊跡第230次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査地点は大宰府市通古賀4丁目67番に所在し、調査対象面積は487.48m²、調査面積は207.50m²である。調査は平成15年10月7日から12月15日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、大宰府市教育委員会の指導のもとに、(株)玉川文化財研究所(所長 戸田哲也)が行った。
4. 遺構の実測図作成および写真撮影は、北平朗久・香川達郎が行い、調査地の空中写真は(有)空中写真企画が行った。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって報告書に示す方位はすべて座標北(G. N)を指している。なお、現地周辺の磁北は座標北から6°30″西偏する。
6. 本書に掲載した遺構番号は、以下の要領で理解される。なお、本書中では遺構略称の「条」を基本的に省略している。



7. 報告書作成業務は、(株)玉川文化財研究所において行った。
8. 本書の執筆は、戸田哲也・河合英夫の指導のもとに北平朗久が行ったが、溝(230SD025)出土の金属製品と土坑(230SK040)出土の有機化合物の分析については大宰府市教育委員会の下川可容子が担当し、その報告を付編として掲載した。
9. 写真図版(カラー)については付属のCD-ROMに収容している。詳細はCD-ROM内のテキストデータ「はじめにお読み下さい」を参照のこと。
10. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、大宰府市教育委員会が保管し、公開・活用していく予定である。
11. 本報告書で用いた土器・陶磁器・瓦・硯の分類基準は以下の文献による。
大宰府市教育委員会 1983『大宰府条坊跡Ⅱ』
大宰府市教育委員会 1992『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡篇－』
大宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ』
石松好雄・高橋 章 1978「大宰府出土の瓦について(二)」『九州歴史資料館 研究論集4』
横田賢次郎 1983「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一試案－」『九州歴史資料館 研究論集9』
12. 本報告書で記載する時期区分については、下記の文献による。
山本信夫 1992「大宰府」『第1回古代土器研究会資料』

目 次

I. 位置と環境	1
II. 調査組織	2
III. 調査経緯	4
IV. 調査方法	4
V. 層 位	7
VI. 調査の概要	9
1. 遺 構	9
1) 道 路	9
2) 溝	10
3) 掘立柱建物	12
4) 柵 列	15
5) 井 戸	15
6) 土 坑	17
7) その他の遺構	19
2. 遺 物	22
1) 溝出土遺物	22
2) 掘立柱建物出土遺物	25
3) 井戸出土遺物	27
4) 土坑出土遺物	32
5) その他の遺構出土遺物	38
6) 調査区内出土遺物	47
VII. 小 結	50
付編 大宰府条坊跡230次調査出土遺物の蛍光X線分析	52
遺構番号台帳	59
出土遺物一覧表	62
遺物計測表	67
報告書抄録	巻末

I. 位置と環境

太宰府市は福岡平野の南東部に位置し、北から東にかけては三郡山系の四王寺山、愛獄山、宝満山などの山々が連なり、西には牛頸山、矢岳、城山などの牛頸低山地から続く背振山系が控える。その両山系に囲まれ袋状の小平野を形成し、盆地的な様相を呈している。

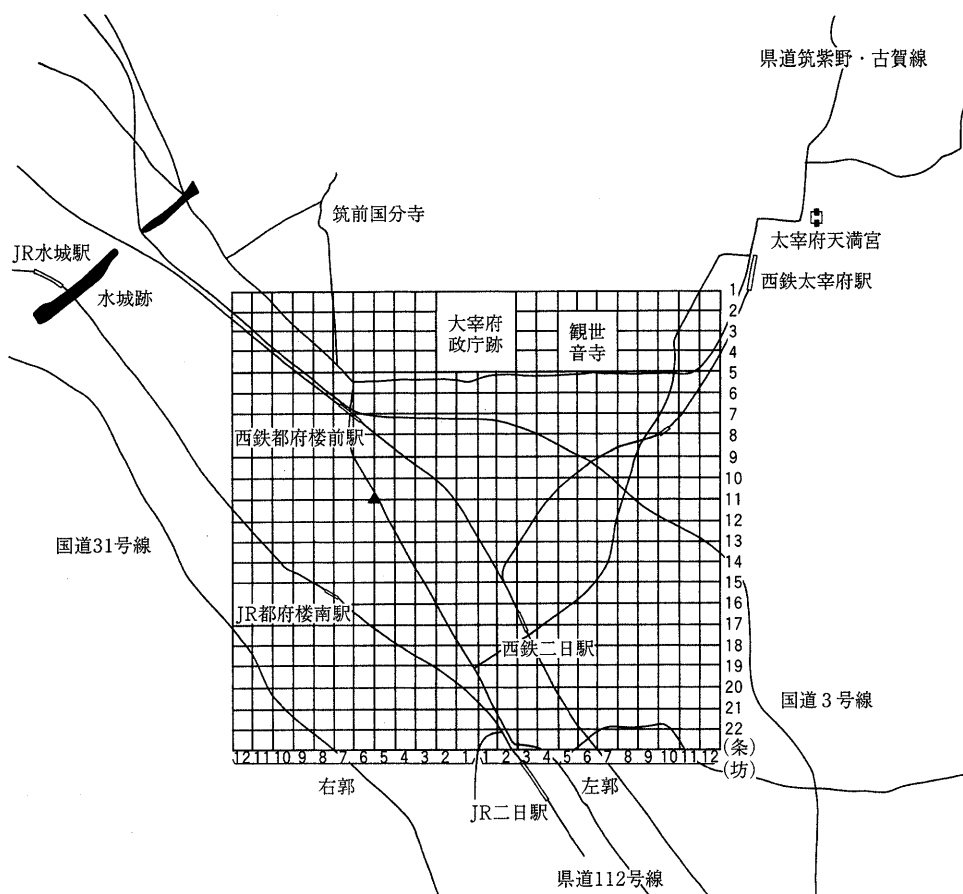
市内には大佐野川、鷺田川、御笠川が流れ、通古賀付近で合流して御笠川となり、牛頸川などの幾つかの河川と合流しながら福岡平野を北流し、博多湾へと注ぐ。

今回報告する大宰府条坊跡第230次調査は、鷺田川と御笠川に挟まれた鷺田川右岸の氾濫低地に立地し、標高は現地表面で約29.3mを測る。

大宰府条坊跡は、鏡山猛氏の『大宰府都城の研究』（1968）によって存在が指摘され、条坊復元案の提示により世に知られることとなった。その規模は南北二十二条（約2.4km）、東西十二坊（約2.6km）におよび、現在の太宰府市と筑紫野市にまたがっている。

大宰府条坊跡の発掘調査による確認作業は、昭和43（1968）年の大宰府史跡の調査以降、福岡県教育委員会、九州歴史資料館、太宰府市教育委員会、筑紫野市教育委員会によって長年にわたって行われ、数多くの所見が得られたが、問題点も多く提起されてきた。今回の調査で230次を数える。

今回の調査地は右郭十一條五坊（以下、条坊の位置については、特記しない限り鏡山案を用いる）にあたると推定され、事前に太宰府市教育委員会による確認調査が実施された。その結果、平安時代の土坑などが検出されたが、当該地周辺は鷺田川の氾濫域と推測され、隣接地の調査（大宰府条坊跡第98次）



第1図 調査地点概念図 (1/40,000 ▲調査地)

と同様に遺構の密度は薄いと考えられた。しかし予想に反し、奈良時代前半の掘立柱建物や整地層、平安時代の条路側溝、坊路側溝、掘立柱建物、井戸、土坑など多くの遺構が検出された。これらの遺構は、比較的良好な遺存状態で発見され、今回の調査によって大宰府条坊の復元にあたって新たな資料が追加されたことは大きな成果と考える。

Ⅱ．調査組織

調査・整理を実施した平成15年度の調査組織は以下のとおりである。

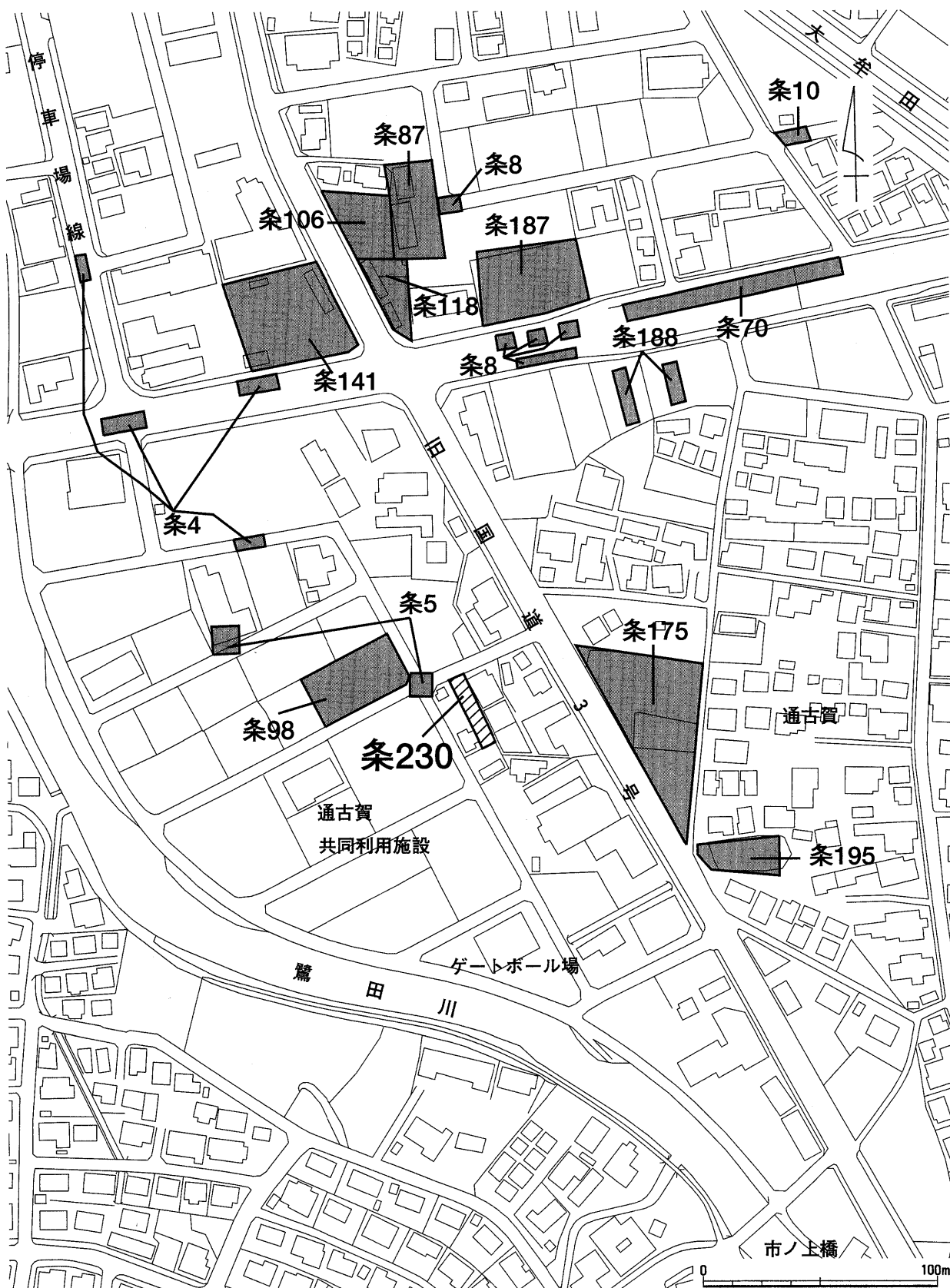
太宰府市教育委員会調査組織

(平成15/2003年度)

総括	教 育 長	關 敏 治
庶務	教 育 部 長	白 石 純 一
	文 化 財 課 長	木 村 和 美
	文化財保護係長	和 田 敏 信 (～15年 6 月30日)
	(保護活用係)	久保山 元 信 (15年 7 月 1 日～)
	文化財調査係長	神 原 稔 (～15年 9 月30日)
	(調 査 係)	永 尾 彰 朗 (15年10月 1 日～)
	事 務 主 査	藤 井 泰 人
	主 任 主 事	大 石 敬 介
調査	主 任 主 査	城 戸 康 利
	技 術 主 査	山 村 信 榮
		中 島 恒次郎 (確認および本調査・整理担当)
	主 任 技 師	井 上 信 正
		高 橋 学
		宮 崎 亮 一
	技 師 (嘱 託)	下 川 可容子
		森 田 レイ子
		柳 智 子
		渡 邊 仁

(株) 玉川文化財研究所太宰府調査組織

所 長	戸 田 哲 也
調査研究部長	河 合 英 夫
主任研究員	中 山 豊
主任研究員	香 川 達 郎 (調査担当)
研 究 員	北 平 朗 久 (調査・整理担当)
研 究 員	佐々木 竜 郎
研 究 員	前 川 昭 彦
調 査 員	伊 東 甚 吉



第2図 大宰府条坊跡第230次調査地点位置図 (1/2,500)

Ⅲ．調査経緯

今回の調査は、太宰府市通古賀4丁目67番に計画された共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。当該地は大宰府条坊跡内に所在することから太宰府市教育委員会が確認調査を実施し、平安時代の遺構が検出されたことから、大宰府条坊跡第230次調査として本格調査が行われる運びとなった。

調査対象面積は487.48㎡、調査実施面積は207.50㎡であり、現地での調査期間は平成15年10月7日から12月15日までの約2ヵ月間である。

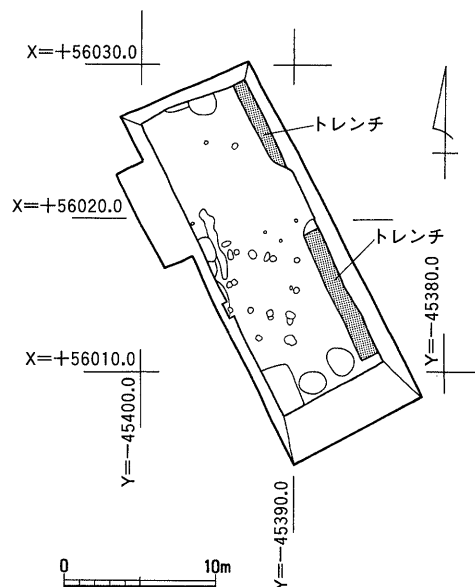
Ⅳ．調査方法

今回の調査地点の北西側と南西側には道路が走り、北東側には住宅および工場が近接していることから安全面を考慮し、セットバックを充分にとり、壁面の崩落防止などを考えて調査区の壁は傾斜をつけて掘削した。したがって、遺構調査面積は最終的に207.50㎡である。

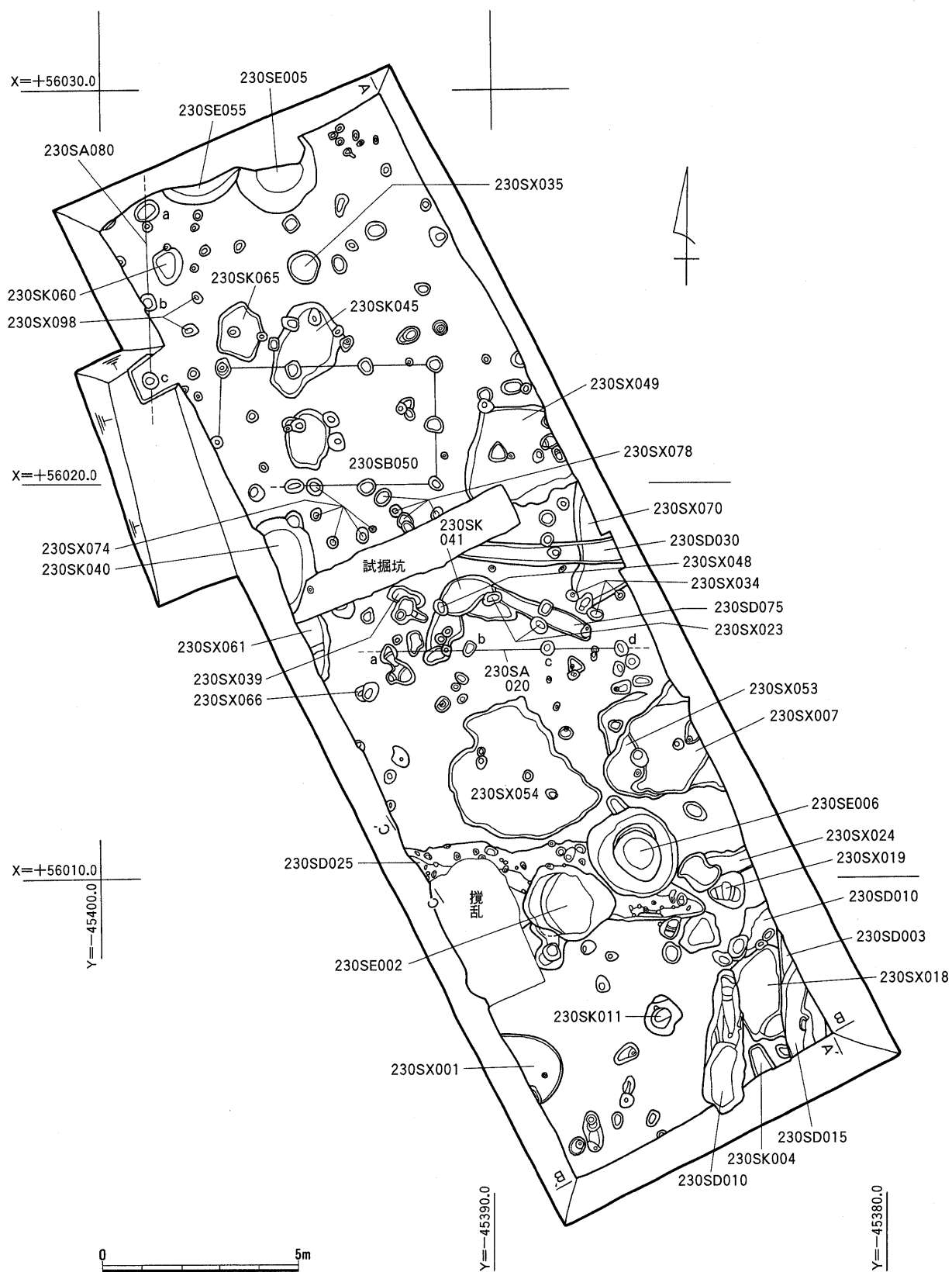
平成15年10月16日に重機を搬入、翌17日から重機による表土剥ぎから開始し、作業の効率化を図るため遺構確認面（地表下1.5～1.8m）まで重機を用いることとした。表土掘削中に調査区の北東壁から南東壁にかけて南北方向に構築された区画調整前の地境と推定されるコンクリート擁壁が残存していたため、遺構に配慮しながら重機によって取り壊しを行った。また、事業区域が狭く、土砂置き場の確保が困難であったことから、発生した土砂は搬出した。重機での作業が終了した時点で、調査区内に3m方眼を基本とするグリッドの設定と遺構の検出作業を行い、その後縮尺1/100の略測図を作成し、記載済みの遺構から順次、掘削作業を開始した。遺物は土層ごとに取り上げを行い、遺構の完掘後に写真撮影と縮尺1/20の遺構全体図を作成した。遺構の状況によって適宜縮尺1/20と1/10の個別図も作成し、11月18日には空中からの全体写真撮影を実施している。

また、遺構調査中に整地層が確認され、上面（第Ⅰ面）の調査が終了した11月26日に再び重機を搬入して整地層の掘削を開始した。発生した土砂は搬出が不可能なことから場内処理とし、調査区の南東側に集積した。下面（第Ⅱ面）も上面（第Ⅰ面）と同様に略測図・遺構全体図・個別図の作成と写真撮影を行い、その後、基盤層の砂層までのトレンチ調査を実施した。12月9日にはトレンチ調査が終了し、翌日より搬出した土砂により埋め戻し作業を開始し、12月15日の重機搬出をもって現地におけるすべての作業を完了している。

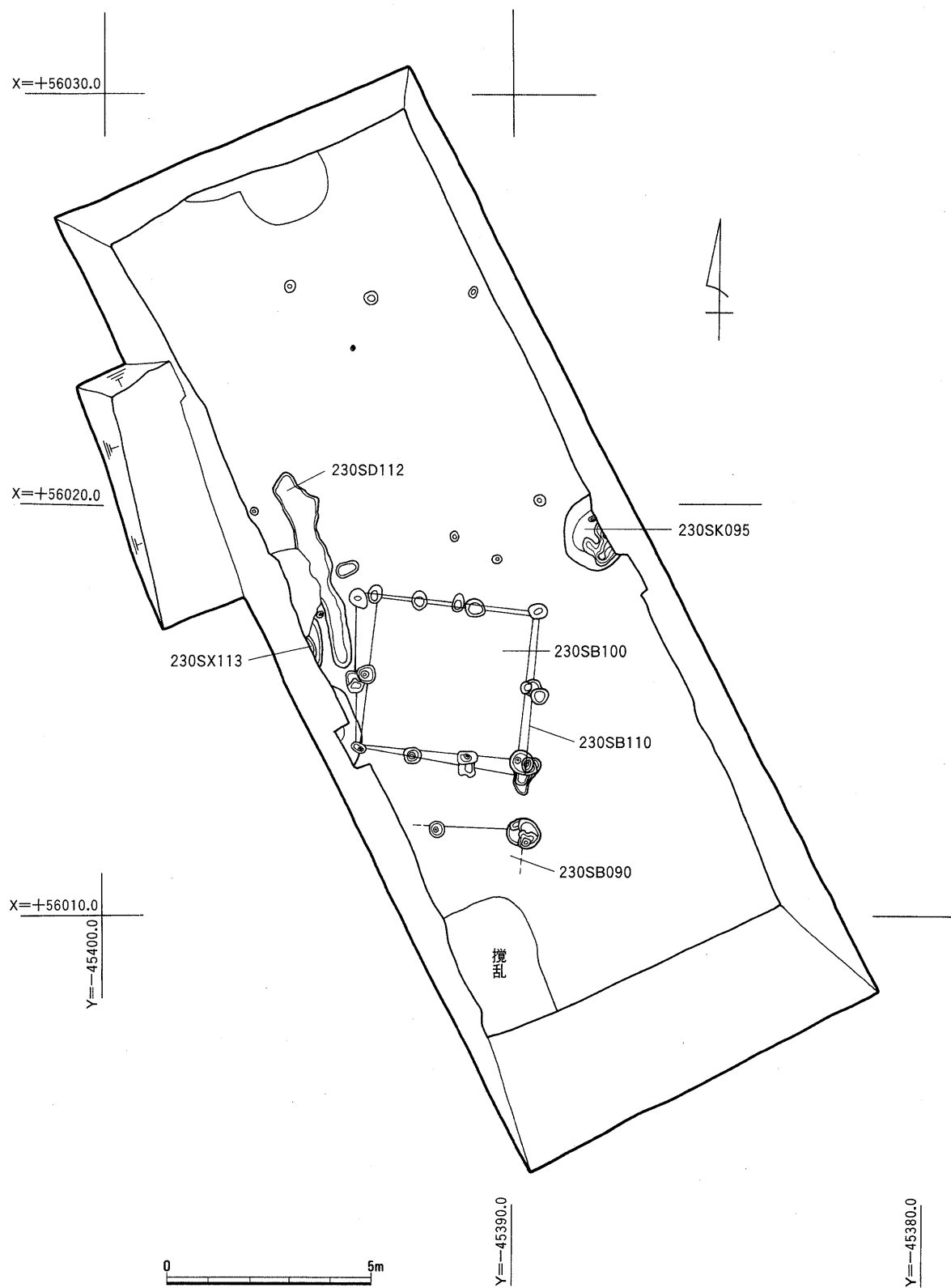
発見された主な遺構は、第Ⅰ面では奈良時代後期～平安時代の道路側溝、掘立柱建物、柵列、井戸、土坑、たまり状遺構、小穴群、第Ⅱ面では古墳時代後期～奈良時代前半の掘立柱建物、土坑、小穴群である。



第3図 条230次トレンチ配置図（1/500）



第4図 条230次遺構配置図(第I面、1/150)

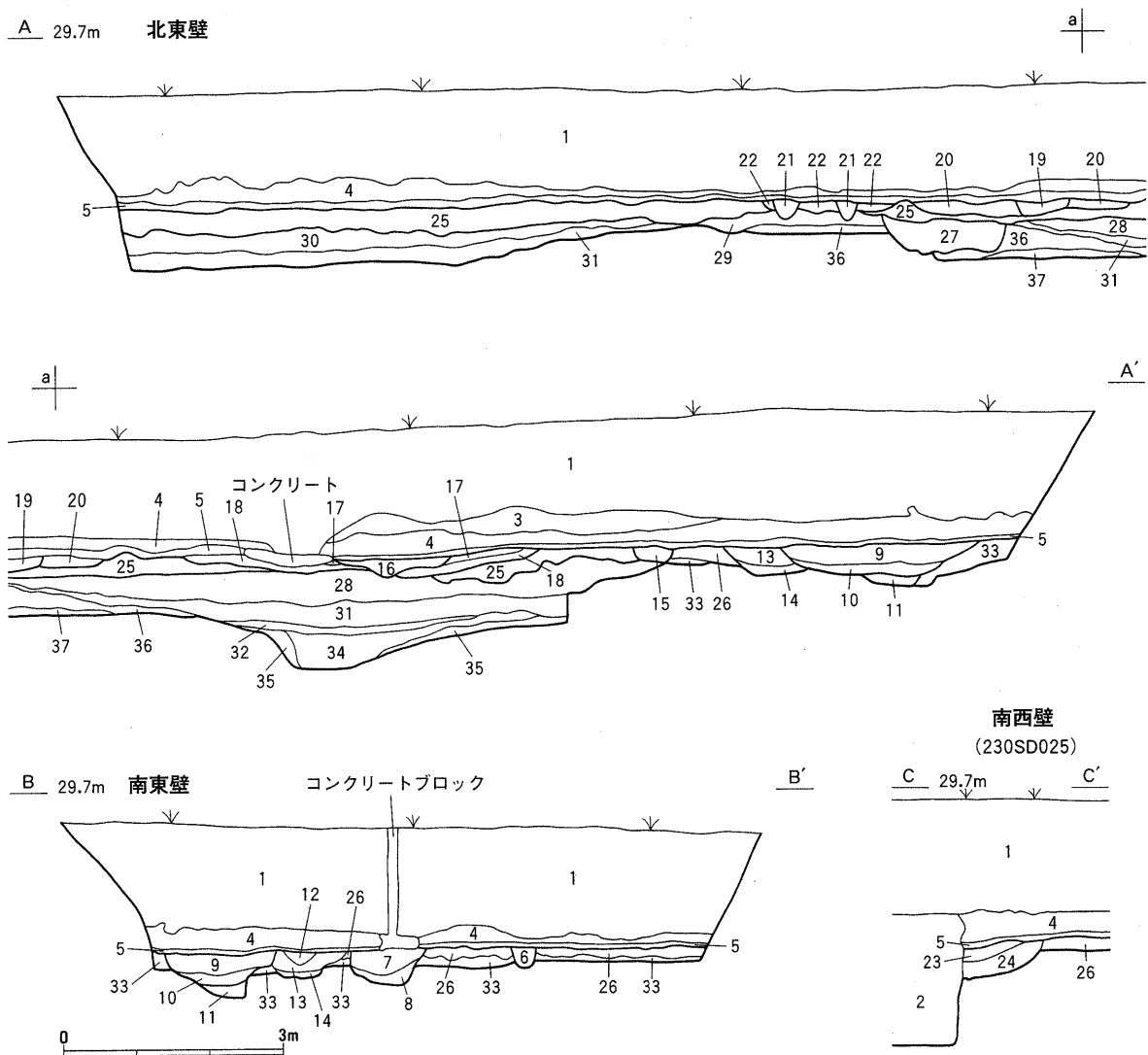


第5図 条230次遺構配置図 (第Ⅱ面、1/150)

V. 層 位

今回の調査区は鷺田川右岸の氾濫低地に立地するが、現在では盛土されて平坦にならされている。盛土は黄褐色土（1層）で、層厚は1.1～1.5mを測る。それを除去すると昭和の後半まで耕作が行われていたと考えられる水田層の青灰色土（3層）・灰色土（4層）・赤褐色土（5層）が現れ、層厚は10～60cmを測る。その下面には褐色土（25層）の整地層が調査区の大半で観察され、この面が遺構検出面の第Ⅰ面である。さらに整地層を剥がすと鷺田川の氾濫に起因すると推定される灰褐色土（28層）・暗灰色土（30層）・黒色土（31層）・褐色土が観察され、中央部には黄褐色砂（36層）が堆積する。この面が遺構検出面の第Ⅱ面である。

さらに砂層の状態を調べるために調査区の北東壁でトレンチ調査を実施した。調査区の中央部では黄褐色砂が自然堤防状に盛り上がり、北側は緩やかな傾斜を持つ。南側は急傾斜で落ち込み、河道の様相を呈していることが判明した。



第6図 条230次基本土層実測図 (1/100)

基本土層土層説明 (第6図)

1層	黄褐色土	表土。(盛土層)
2層	灰白色土	攪乱。(コンクリートブロック主体)
3層	青灰色土	耕作土。
4層	灰色土	耕作土。(3・4層 水田層)
5層	赤褐色土	耕作土。(水田田床)
6層	明灰色土	焼土および炭化物粒子を少量、黄褐色土を塊状に微量含む。(230SX008)
7層	暗灰色土	焼土粒子を微量、炭化物粒子を少量、褐色土を斑紋状に含む。
8層	灰褐色土	炭化物粒子を微量含む。(7・8層 230SD010)
9層	明灰色土	炭化物粒子を微量含む。
10層	明褐色土	焼土および炭化物粒子を微量含む。(9・10層 230SD003)
11層	灰褐色土	焼土および炭化物粒子を少量含む、層全体に酸化鉄が斑紋状に広がる。(230SD015)
12層	明灰色土	炭化物粒子を微量含む。
13層	暗灰色土	焼土および炭化物粒子を微量含む。
14層	褐色土	褐色土を塊状に多量含む。(12～14層 230SK004)
15層	暗灰色土	焼土および炭化物粒子と褐色土を斑紋状に含む。(230SX024)
16層	赤褐色土	焼土および遺物を多量含む。(230SX007)
17層	暗灰色土	焼土粒子を少量含む。
18層	黒灰色土	黄灰色砂を斑紋状に微量含む。(17・18層 230SX053)
19層	暗灰色土	焼土および炭化物粒子と灰褐色土を斑紋状に少量含む。(230SD030)
20層	暗灰褐色土	焼土・炭化物粒子を含む。(230SX070)
21層	暗灰褐色土	灰褐色土を塊状・斑紋状に含む。(230SX052)
22層	暗灰褐色土	炭化物粒子を微量、灰褐色土を斑紋状に含む。(230SX049)
23層	暗灰色土	炭化物粒子を微量、褐色土を斑紋状に少量含む。
24層	暗灰色土	炭化物粒子を少量、褐色土を斑紋状に微量含む、色調暗い。(23・24層 230SD025)
25層	褐色土	小礫を含み、酸化鉄が斑紋状に広がる。(整地層)
26層	明灰色土	酸化鉄を斑紋状に含む。
27層	灰白色土	小礫を少量、灰色土および酸化鉄を斑紋状に含む。(230SK095)
28層	灰褐色土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。
29層	灰白色土	灰褐色土を斑紋状に含む。
30層	暗灰色土	下位に灰白色細砂が薄層を形成する。
31層	黒色土	下位に灰褐色砂を少量含む。
32層	黒灰色土	小礫および炭化物粒子を少量含む。
33層	褐色土	酸化鉄を斑紋状に含む。
34層	青灰色土	酸化鉄が斑紋状に広がる。
35層	灰褐色土	酸化鉄が斑紋状に広がる。
36層	黄褐色砂	酸化気味で、粘性を欠く。
37層	黄褐色砂	36層に比べ、粒子が粗い。

VI. 調査の概要

1. 遺 構

今回の調査では2面の生活面が確認され、第Ⅰ面からは溝6条、掘立柱建物1棟、柵列2列、井戸4基、土坑7基、集石状の遺構1基、たまり状遺構、小穴群、第Ⅱ面からは溝1条、掘立柱建物3棟、土坑1基、小穴群が検出されている。調査区の南側は攪乱によって遺構が壊された部分もあり、少なからず調査に影響を与えている。

1) 道 路

調査区の中央から南側にかけて第Ⅰ面では溝6条を検出し、その中で4条はその配置から大宰府条坊の東西路（条路）の南側側溝（230SD025）と北側側溝（230SD030）および南北路（坊路）の西側側溝（230SD003・015）にあたるものと推定された。条路の両側側溝間について硬化面などの路面に関連する施設を想定して精査を行ったが、遺構間の重複および後世の削平などの影響によって失われたものと考えられる。両側側溝の心々間の距離は8.4～8.7mを測る。

230SD025（第7図、図版3）

調査区の南側に位置し、D2からC4区にかけて東西に走る。東側は途切れ、西側は調査区外に展開する。東側と中央部は井戸（230SE002・006）との重複により壊され、西側の一部は攪乱の影響により消失している。最終的に検出された範囲は、長さ7.75m、最大幅185cm、深さ5～45cmを測り、走向は中軸線でN-83°-Wを指針する。溝の中軸線と政庁の南門中心点との距離は698.68～699.38m〔平均値699.03m・2355小尺（1小尺≒0.297mで計算）〕を測る。底面（中軸線上）の標高は東端で27.37m、中央部で27.25m、西端では27.14mを測り、西側に傾斜している。覆土は暗灰色土が2層に区分されたが層相の変化に乏しく、出土した遺物は平安前期末から中期初頭（大宰府Ⅷ期）を主体とする。

230SD030（第7図、図版4）

調査区のほぼ中央に位置し、F4からE5区にかけて東西に走る。東側は調査区外に展開し、西側は消失している。最終的に検出された範囲は、長さ3.8m、幅45～60cm、深さ5～16cmを測り、走向は中軸線でN-91°-Eを指針する。溝の中軸線と政庁の南門中心点との距離は690.03m（2324小尺）を測る。底面（中軸線上）の標高は東端で27.54m、中央部で27.59m、西端では27.64mを測り、わずかに東側に傾斜している。覆土は暗灰色土の単層で、出土した遺物は平安前期末から中期初頭（大宰府Ⅷ期）を主体とする。

230SD003（第7図）

調査区南東端のD1区を中心に位置し、南北に走る。両端は調査区外に展開している。最終的に検出された範囲は、長さ3.3m、幅100cm、深さ35～45cmを測り、走向は中軸線でN-3°-Wを指針する。溝の中軸線と政庁中軸線からの距離は561.77～561.87m（平均値561.82m・1890小尺）を測る。底面（中軸線上）の標高は北端で27.12m、南端では27.08mを測り、わずかに南側に傾斜している。覆土は明灰色土（上層）と明褐色土（下層）で構成され、遺物は平安中期から後期の土器が出土している。

230SD015 (第7図)

調査区南東端のD1区を中心に位置する。南北に走り、両端は調査区外に展開している。上述の溝230SD003と重なり検出され、同一遺構の可能性も考えられるが、覆土に明瞭な差異が認められることから、ここでは別の遺構として扱っている。最終的に検出された範囲は、長さ2.5m、幅55～72cm、深さ12～27cmを測り、走向は中軸線でN-2°-Eを指針する。溝の中軸線と政庁中軸線からの距離は561.67～561.87m(平均値561.77m・1890小尺)を測る。底面(中軸線上)の標高は北端で27.01m、南端では26.98mを測り、わずかに南側が低い。覆土は灰褐色土で構成されるが、遺物は出土していない。

2) 溝

第I面では調査区の中央から南側にかけて溝6条を検出し、その中で4条はその配置から大宰府条坊の東西路(条路)と南北路(坊路)の側溝にあたると推定した。ここでは残り2条(230SD010・075)と第II面で検出された1条(230SD112)の溝について報告する。

230SD010 (第7図)

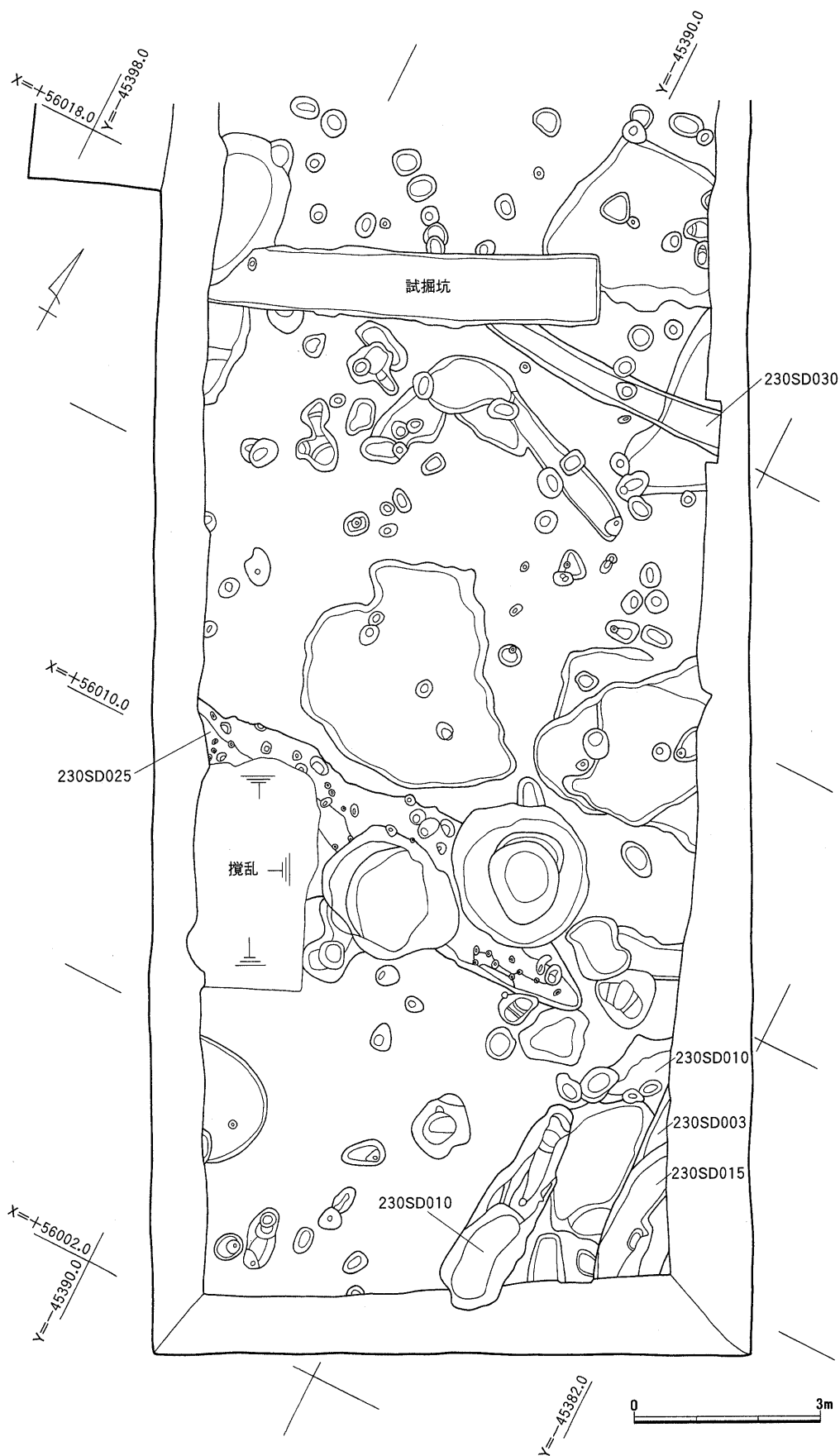
調査区の南東端に位置し、C1からD2区にかけておおむね南北に走るが、D1区で途切れる。南側と北側に分かれ、北側の溝は東側に「く」の字状に折れる。北端は調査区外に展開し、南端は調査区の壁際で立ち上がる。最終的に検出された範囲は、北側の溝で長さ1.45m、最大幅135cm、深さは20cmほどを測り、走向は中軸線でN-41°-Eを指針する。底面(中軸線上)の標高は北端で27.12m、南端では27.10mを測り、わずかに南側が低い。南側の溝は長さ3.6m、幅40～100cm、深さ26～52cmを測り、走向は中軸線でN-4°-Eを指針する。底面(中軸線上)の標高は北端で27.18m、南端では27.21mを測り、凹凸が認められる。断面はおおむね逆台形を呈する。覆土は暗灰色土と灰褐色土に区分され、出土遺物は平安時代前期を主体にしている。また、本遺構の南側の溝は前述の溝(230SD003・015)とほぼ平行関係にあることから道路側溝の可能性も考える必要がある。

230SD075 (第4図)

調査区のはほぼ中央に位置し、E4・5区で検出され、基本的には東西に走る。東側は途切れ、西側は土坑(230SK041)により壊されている。また部分的に小穴群とも重複し、残存状態は良好ではない。最終的に検出された範囲は、長さ2.8m、幅35～50cm、深さは10cmほどを測り、走向は中軸線でN-65°-Wを指針する。底面(中軸線上)の標高は東端で27.38m、西端では27.45mを測り、わずかに東側に傾斜している。断面は逆台形を呈する。覆土は明灰色土で構成され、出土した遺物は平安前期(大宰府VIb期)を主体とする。

230SD112 (第5図)

第II面から検出された唯一の溝である。調査区中央の西側に位置し、D6からE7区にかけておおむね南北方向に走る。両端は途切れ、一部は第I面の土坑(230SK040)に壊されている。規模は長さ4.85m、幅40～85cm、深さは5～12cmを測り、走向は中軸線でN-18°-Wを指針する。底面(中軸線上)の標高は北端で27.18m、南端では27.12mを測り、わずかに南側に傾斜している。断面は逆台形を呈する。覆土は灰褐色土(砂質)で構成され、遺物は土師器の小破片が出土したのみである。



第7図 230SD003・010・015・025・030実測図 (1/100)

3) 掘立柱建物

今回の調査で検出された掘立柱建物は4棟で、第Ⅰ面から1棟(230SB050)、第Ⅱ面からは3棟(230SB090・100・110)が発見されている。第Ⅱ面の230SB100とSB110は軸線がほぼ同じで、重複する柱穴も認められることから建て替えが行われた可能性が考えられる。また、230SB090は柱穴2本の検出であるが、柱穴内から根固め石と考えられる礫が出土しており、230SB100とSB110との配置関係から掘立柱建物と推定している。

230SB050 (第8図、図版4)

調査区の北西側に位置し、F6～8区を中心に検出された。多くの遺構と重複するが、直接的な重複関係にあるのは土坑(230SK045)のみであり、本遺構が古い。調査区の制約から南西隅の柱穴は検出されていないが、梁行2間×桁行3間の東西棟の側柱建物と推定される。柱心々間の桁行総長は5.4m、梁行総長は3.0mを測る。桁行の柱間はすべて1.8m(6小尺)等間で収まり、東側梁行は1.5m(5小尺)等間、西側梁行のh～i間は1.8m(6小尺)である。主軸方位は桁行(柱穴e～h間)を基準とするとN-89°-Eを指針する。柱穴の掘り方は楕円形を呈し、規模は長径で32～50cm、深さは23～36cmを測る。覆土は暗灰色土と明灰色土で構成されている。

230SB090 (第9図、図版4・5)

調査区中央のやや南に位置し、D4区を中心に検出された。調査区の制約と攪乱の影響により検出し得た柱穴は2本であるが、柱穴aからは根固め石と考えられる礫が出土し、北側に展開する掘立柱建物(230SB100・110)と軸線がほぼ一致することから、ここでは掘立柱建物として扱っている。形態および規模は不明であるが、柱穴間(a～b)の距離は心々で2.1m(7小尺)を測る。主軸方位は柱穴a～bを基準とするとN-85°-Wを指針する。柱穴の掘り方は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で38cmと83cm、深さは30cmほどを測る。覆土は灰褐色土と灰黄褐色土で構成されている。

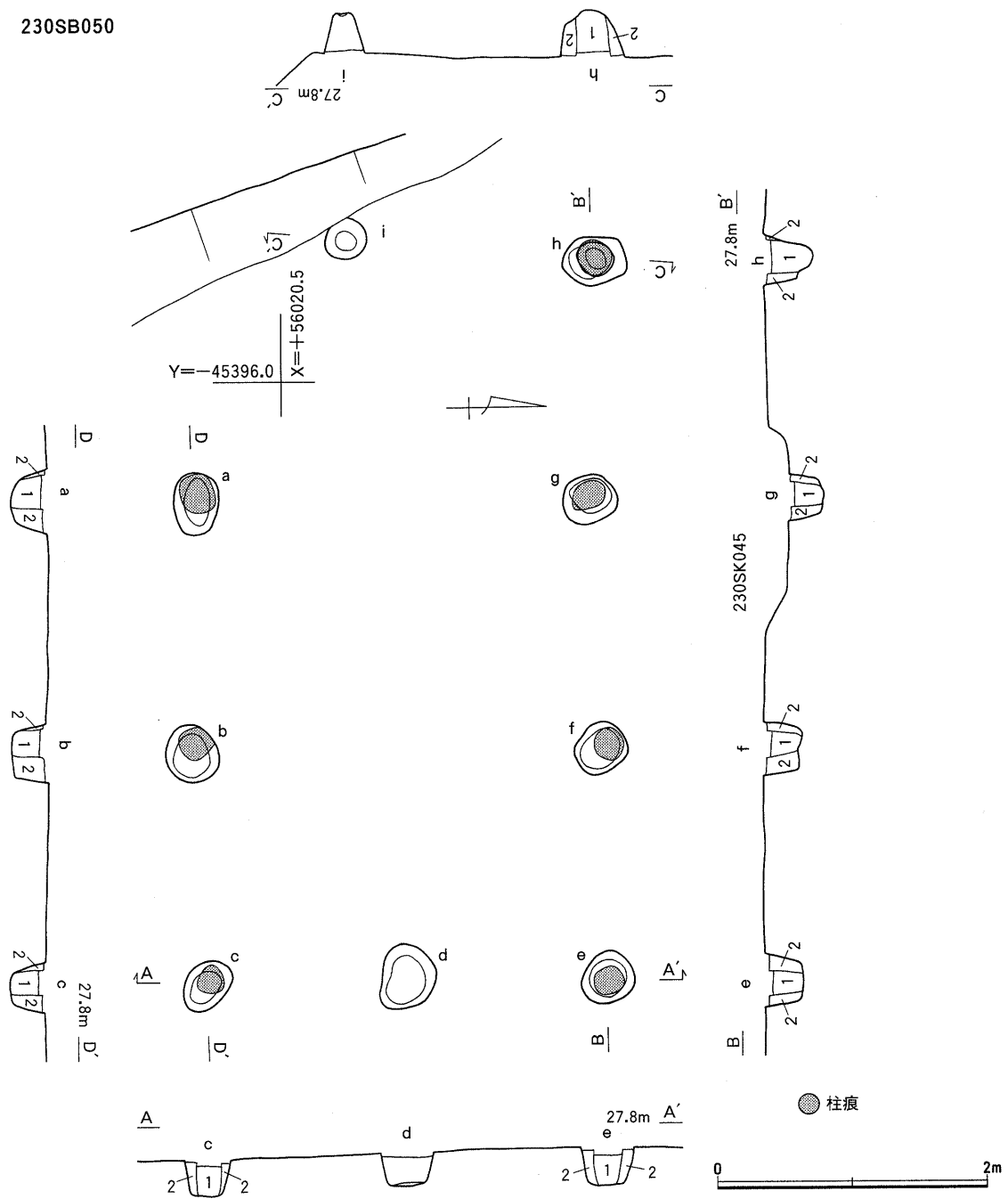
230SB100 (第9図、図版5)

調査区のほぼ中央に位置し、D・E4～6区から検出された。掘立柱建物(230SB110)の一部を壊して構築されている。梁行2間×桁行3間の東西棟の側柱建物で、桁行総長は3.9m、梁行総長は3.6mを測る。北側桁行では柱穴h～i間が1.05m(3.5小尺)、i～j間が1.35m(4.5小尺)、j～a間が1.5m(5小尺)、南側桁行ではc～dおよびd～e間が1.35m(4.5小尺)等間、e～f間が1.2m(4小尺)となり、梁行はすべて1.8m(6小尺)等間に収まる。主軸方位は桁行(柱穴c～f)を基準とするとN-86°-Wを指針する。柱穴の掘り方は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で30～70cm、深さは17～32cmを測る。覆土は灰褐色土と灰黄褐色土で構成されている。

230SB110 (第9図、図版5)

調査区のほぼ中央に位置し、D・E4～6区から検出された。掘立柱建物(230SB100)と重複関係にあり、本遺構が古く、確認された柱穴は6本である。梁行2間×桁行3の側柱建物と考えられ、桁行総長は4.2m、梁行総長は3.6mほどと推定される。遺構間の重複により柱穴間の距離は不明な部分が多く、西側梁行の柱穴d～e間が判明した程度で、長さは2.1m(7小尺)を測る。主軸方位は桁行(柱穴e～f)を基準とするとN-86°-Wを指針し、柱穴の深さは10～25cmを測る。覆土は灰褐色土と灰黄褐色土で構成されている。

230SB050

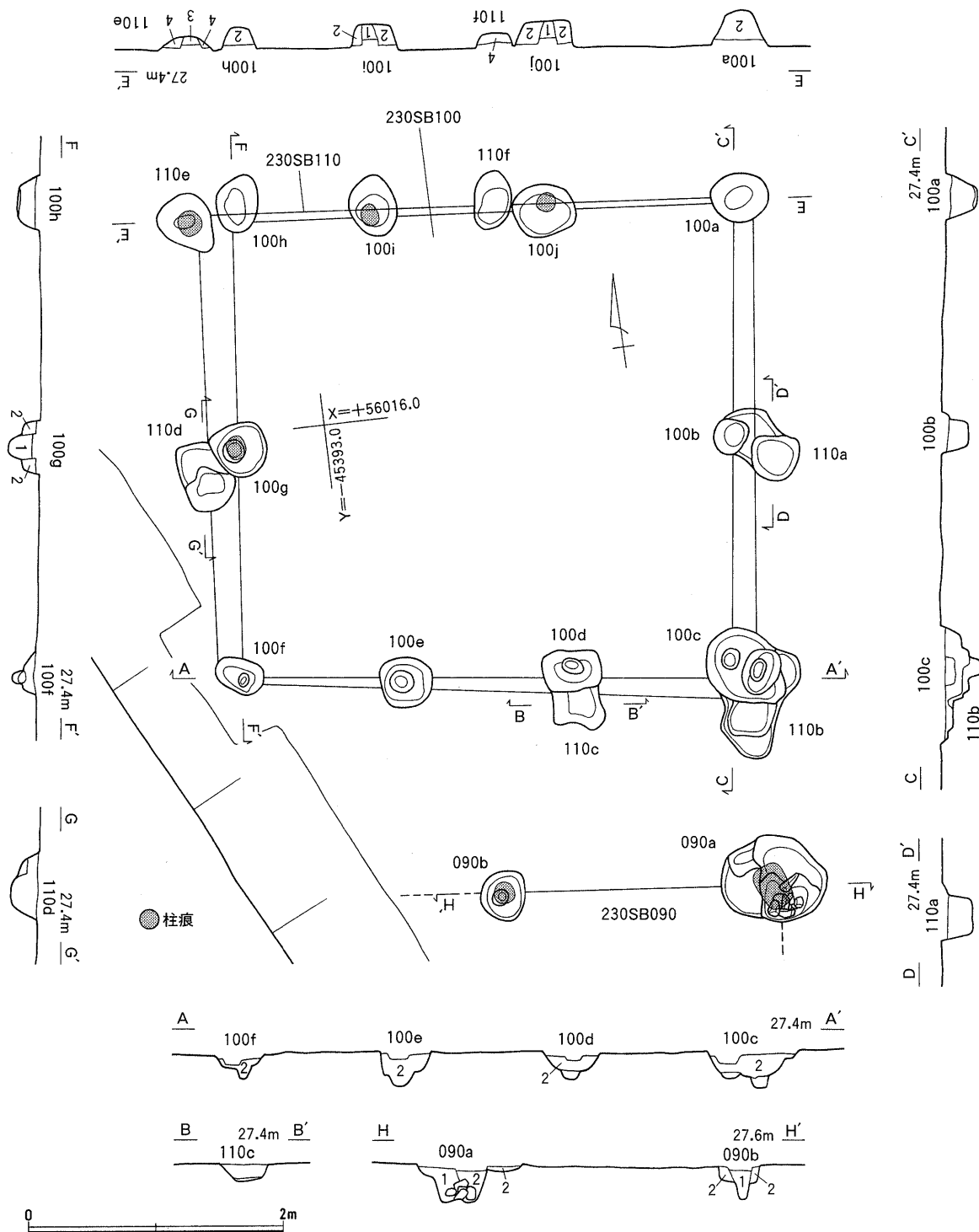


230SB050土層説明

- 1層 暗灰色土 小礫、明灰色土を斑紋状に含む。(柱痕)
- 2層 明灰色土 暗灰色土を斑紋状に少量、小礫を含む。

第8図 230SB050実測図 (1/50)

230SB090・100・110



第9図 230SB090・100・110実測図 (1/50)

4) 柵 列

今回の調査で発見された柵列は2条で、調査区の中央に1条(230SA020)、調査区の北西端に1条(230SA080)が位置する。2条とも調査区の制約から全容は捉えられておらず、北西端の230SA080は掘立柱建物の可能性が考えられる。

230SA020 (第4図)

調査区のほぼ中央に位置し、E4からD5区にかけて3間が検出された。東西方向に延び、両端は調査区外に展開すると考えられる。検出された長さは5.7mを測り、柱穴間の距離は西からa～b間とb～c間が1.95(6.5小尺)等間、c～d間は1.8m(6小尺)である。主軸方位はN-89°-Wを指針する。柱穴の掘り方は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で37～50cm、深さは6～24cmを測る。覆土は暗灰色土と明灰色土で構成されている。

230SA080 (第4図)

調査区の北西端に位置し、E8からG9区にかけて2間が検出された。南北方向に延び、両端は調査区外に展開すると考えられる。検出された長さは4.2mを測り、柱穴間の距離は北からa～b間は2.25m(7.5小尺)、b～c間は1.95m(6.5小尺)である。主軸方位はN-1°-Wを指針する。柱穴の掘り方は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で40～62cm、深さは17～26cmを測る。覆土は暗灰色土で構成されている。

5) 井 戸

今回の調査で検出された井戸は4基である。調査区の南東側に2基(230SE002・006)、北西端に2基(230SE005・055)が分布する。北西端の2基は調査区の制約から全容は捉えきれていない。

230SE002 (第10図)

調査区南東側のC・D3区から検出され、溝(230SD025)と小穴(230SX085)を切って構築されている。掘り方の平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径(東西)2.35m、短径(南北)1.9m、深さは1.1mを測る。井戸枠内の覆土は上層より褐灰色土、暗灰色土、黒褐色粘土の順で堆積しているが、枠材は遺存していない。出土遺物は平安中期(大宰府Ⅸ期)の遺物が主体である。

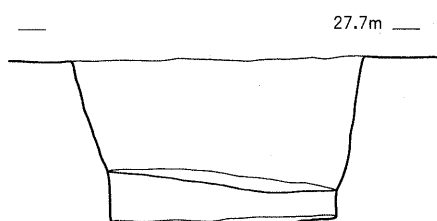
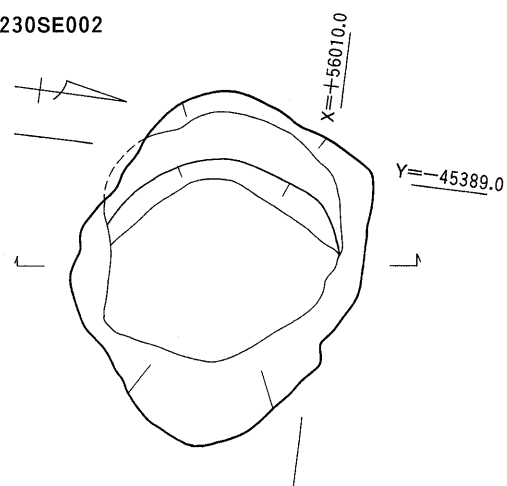
230SE005 (第10図、図版6)

調査区の北西端に位置し、G・H8区から検出された。井戸(230SE055)を切って構築されているが、北側は調査区外に展開する。掘り方の平面形は略円形と推定され、規模は東西2.0m、深さは1.43mを測る。井戸枠内の覆土は上層より暗灰色土、黒褐色土、褐灰色土の順で堆積し、井戸の中層まで掘り下げると明確に方形の井戸枠痕が確認されたが、枠材は遺存していなかった。出土遺物は平安中期から後期のものが混在するが、後期の遺物は上位から混入したと考えられる。

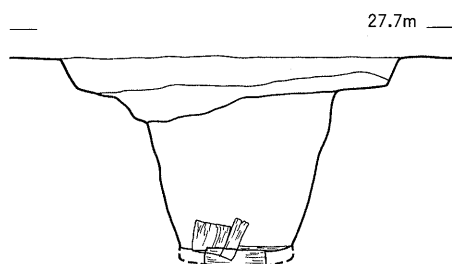
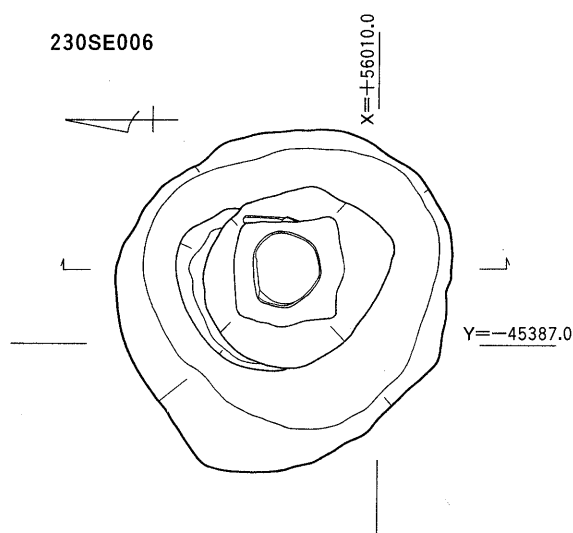
230SE006 (第10図、図版6)

調査区南東側のD2・3区から検出され、溝(230SD025)と小穴(230SX058)を切って構築されている。掘り方の平面形は径2.2mほどの略円形を呈し、深さは1.35mを測る。覆土は上層より暗灰色土、黒灰色土、黒色粘土および裏込めの暗灰褐色土が堆積しており、これらを除去すると方形の井戸枠が確

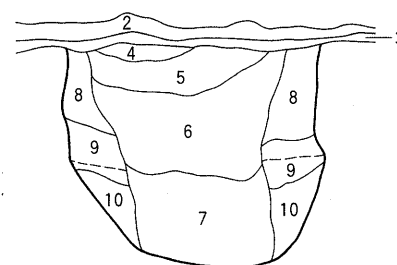
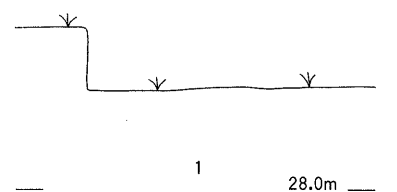
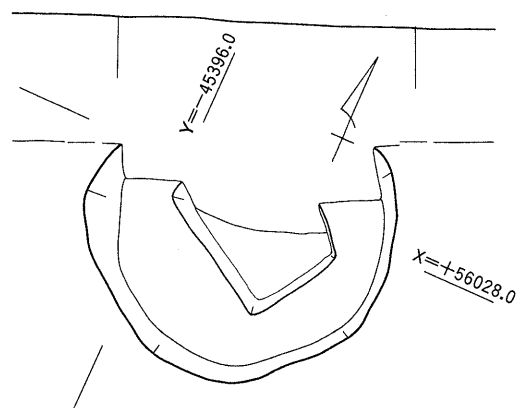
230SE002



230SE006



230SE005



230SE005土層説明

- | | | |
|-----|-------|-----------------------------|
| 1層 | 黄褐色土 | 表土。(盛土層) |
| 2層 | 灰色土 | 耕作土。(水田層) |
| 3層 | 赤褐色土 | 耕作土。(水田田床) |
| 4層 | 暗灰色土 | 焼土および炭化物粒子を少量含む。 |
| 5層 | 黒褐色土 | 焼土を塊状に多量、炭化物粒子を微量含む。 |
| 6層 | 褐灰色土 | 焼土および炭化物粒子を少量、褐色粘土を塊状に微量含む。 |
| 7層 | 褐灰色土 | 6層に類似。色調が暗化する。 |
| 8層 | 暗灰色土 | 焼土および炭化物粒子を微量含む。 |
| 9層 | 灰褐色粘土 | 灰褐色および褐色粘土を多く含み、部分的に砂が混入する。 |
| 10層 | 灰褐色粘土 | 粘土塊を主体とする。(8～10層 裏込め) |

〔井戸枠模式図〕



0 2m

第10図 230SE002・005・006実測図 (1/50)

認められた。井戸枠は暗灰黄砂を用い板材を立て構築されていたが、東側に2枚が遺存するのみであった。井戸底面には径48cmほどの曲物を利用して水澄しが設置されていた。板材および曲物は遺存状態が悪く、取り上げ時に損なわれた。遺物は平安中期から後期のものが混在するが、平安中期（大宰府Ⅸ～Ⅹ期）ものが主体で、平安後期のものは上位からの混入と考えられる。

230SE055（第4図）

調査区の北西端に位置し、G 8・9区から検出された。東側は井戸（230SE005）によって切られ、北側の大半が調査区外に展開している。調査区壁際からの検出であったことから底面までの調査はできなかった。平面形は円形を基本形とすると推定され、覆土は暗灰色土で構成されている。出土遺物は平安中期が主体である。

6) 土 坑

今回の調査で発見された土坑は8基である。第Ⅰ面からは7基（230SK004・011・040・041・045・060・065）が検出され、調査区のほぼ全体に分布する。第Ⅱ面からは1基（230SK095）が確認され、調査区の北東壁際に位置している。

230SK004（第4図）

調査区の南東端に位置し、C 1区から検出された。南側は調査区外に展開し、全容は捉えきれていない。平面形は楕円形または細長い溝状を呈すると考えられる。規模は短径で53cm、深さは35cmを測る。覆土は上層より明灰色土、暗灰色土、褐色土の順に堆積している。出土遺物は平安前期が主体である。

230SK011（第4図）

調査区の南東側に位置し、C 2区から検出された。平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸90cm、短軸80cm、深さは35cmほどを測る。覆土は明灰色土で構成され、出土遺物は奈良後期が主体である。

230SK040（第4図、図版6）

調査区の西端に位置し、E 6・7区を中心に検出されている。西側は調査区外に展開し、全容は捉えきれていない。平面形は楕円形を呈すると考えられ、規模は南北方向で長さ245cm、深さは49cmを測る。覆土は上層より暗灰色土、黒灰色土、暗灰色土の順に堆積し、出土遺物は平安前期末から中期初頭（大宰府Ⅷ期）が主体である。

230SK041（第4図）

調査区のほぼ中央に位置し、E 5区から検出された。溝（230SD075）、小穴（230SX048）、たまり状遺構（230SX062・063）を切って構築されているが、東側の一部を小穴群（230SX023）に壊されている。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径155cm、短径90cm、深さは12cmほどを測る。覆土は明灰色土で構成され、出土遺物は平安前期末から中期初頭（大宰府Ⅷ期）が主体である。

230SK045（第4図）

調査区北西側のF・G 7区から検出された。掘立柱建物（230SB050）、小穴群（230SX073）、小穴（230SX088）の一部を切って構築されている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径245cm、短径155

cm、深さは25cmほどを測る。覆土は暗灰色土で構成され、出土遺物は平安前期末から中期初頭（大宰府Ⅷ期）が主体である。

230SK060（第4図）

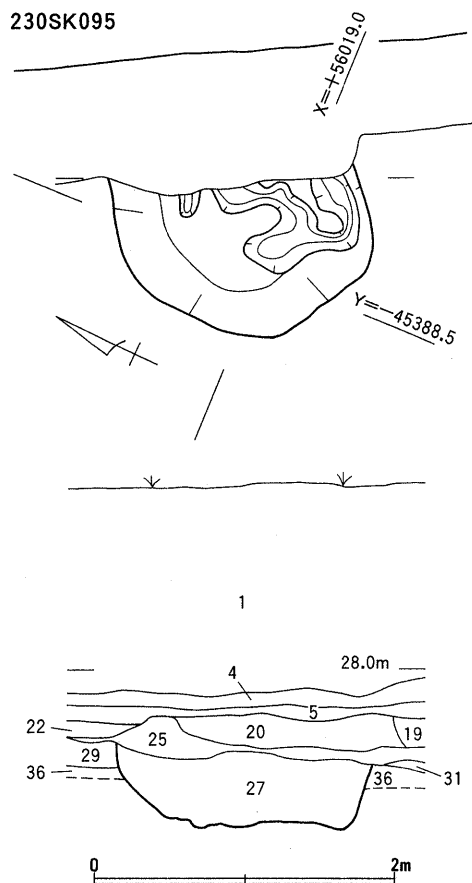
調査区の北西側に位置し、F 8・9区から検出された。北側の一部が小穴（230SX072）によって切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径83cm、短径77cm、深さは15cmほどを測る。覆土は明灰色土で構成され、奈良後期の遺物が包含されている。

230SK065（第4図）

調査区北西側のF 8区から検出され、小穴群（230SX087）を切って構築されている。平面形は不整五角形を呈し、規模は長軸135cm、短軸115cm、深さは8cmほどを測る。覆土は暗灰色土で構成され、平安中期の遺物が包含されている。

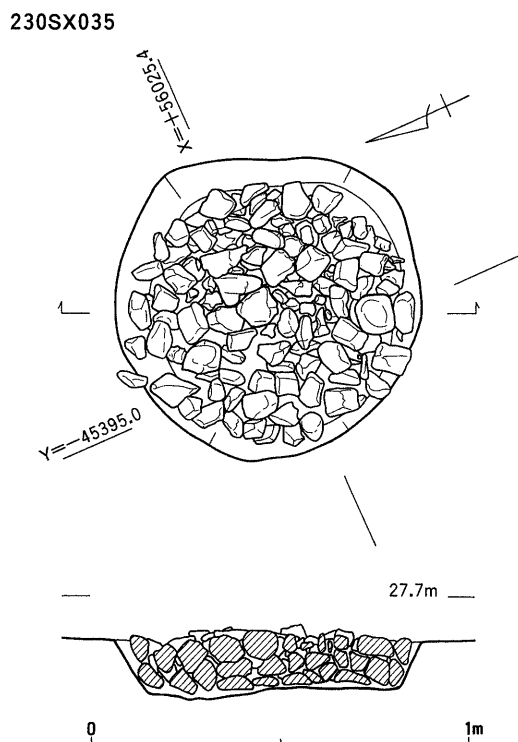
230SK095（第11図、図版7）

第Ⅱ面から検出された唯一の土坑である。調査区の北東壁際に位置し、F 4・5区から検出された。北東側が調査区外に展開し、全容は捉えきれていない。平面形は略円形または楕円形を呈すると考えられ、規模は南北方向で約160cm、深さは45cmほどを測る。覆土は灰白色土で構成され、遺物は古墳後期（7世紀後半）の須恵器小坏a、土師器甕などが出土している。



230SK095土層説明
27層 灰白色土 小礫を少量、灰色土および酸化鉄を斑紋状に含む。

第11図 230SK095実測図（1/50）



第12図 230SX035実測図（1/20）

7) その他の遺構

ここでは集石状の遺構1基(230SX035)、たまり状遺構9基(230SX001・007・018・024・049・053・054・061・070)、小穴および小穴群9ヵ所(230SX019・023・034・039・048・066・074・078・098)と第Ⅱ面から検出された自然地形と推定される230SX113について述べる。

230SX035 (第12図、図版7)

調査区の北西側に位置し、G7・8区から検出された。掘り方の平面形は径約1.6mの略円形を呈し、深さは30cmほどを測る。礫は拳大のものが中心に検出され、ほぼ全体に分布し、隙間がなく充填されている。石材はすべて花崗岩である。覆土は褐灰色土で構成され、遺物は奈良時代のものが含まれている。

230SX001 (第4図)

調査区の南端に位置し、B2・3区から検出された。西側が調査区外に展開し、小穴群(230SX038)の上面に構築されている。平面形は楕円形と推定され、規模については明確ではないが、深さは最深部で14cmを測る。覆土は明灰色土で構成され、出土遺物は平安前期末から中期初頭(大宰府Ⅷ期)が主体である。

230SX007 (第4図)

調査区の東側に位置し、E3区から検出された。北東側の一部が調査区外に展開し、たまり状遺構(230SX053)、小穴群(230SX057)を切って構築されている。調査部分の平面形は不整形で、規模は南北方向で2.3m、深さは浅く5cmほどである。覆土は赤褐色土で構成され、重複する230SX053とは明瞭な覆土の相違が認められることから別遺構として扱ったが、同一遺構の可能性も考えられる。出土遺物は平安前期(大宰府Ⅵb期)が主体である。

230SX018 (第4図)

調査区の南東端に位置し、C・D1区から検出され、溝(230SD003・010)に切られる。平面形は台形状を呈していたと推定され、規模は南北方向で1.95~2.30m、深さは2~21cmを測る。覆土は褐灰色土で構成され、出土遺物は平安前期が主体である。

230SX024 (第4図)

調査区の南東側に位置し、D・E2区から検出された。南側の一部は小穴(230SX019)によって切られ、北東側は調査区外に展開し、全容は捉えきれていない。平面形は細長い溝状を呈すると考えられる。最終的に検出された範囲は、長さ1.83m、幅0.95m、深さは3~18cmを測る。覆土は暗灰色土で構成され、出土遺物は平安前期(大宰府Ⅵb期)以降のものが包含される。

230SX049 (第4図)

調査区中央のやや北側に位置し、F・G5・6区から検出された。北東側は調査区外に展開し、全容は捉えきれていない。一部を小穴群(230SX052)に切られているが、他の小穴群(230SX059)の上面に構築されている。平面形は台形を呈すると考えられ、規模は南北方向で2.5m、深さは浅く10cmほどである。覆土は暗灰褐色土で構成され、出土遺物は平安前期(大宰府Ⅵb期)が主体である。

230SX053 (第4図)

調査区の東側に位置し、E3区を中心に検出された。北東側は調査区外に展開し、全容は捉えきれていない。上部にはたまり状遺構(230SX007)が構築され、下部からは小穴群(230SX057)が検出されている。調査部分の平面形は不整形で、規模は南北方向で2.75m、深さは浅く7cmほどである。覆土は上層より暗灰色土、黒灰色土の順に堆積し、内側には230SX007が構築されているが、同一遺構の可能性も考えられる。出土遺物は平安前期(大宰府Ⅶ期)が主体である。

230SX054 (第4図)

調査区中央のやや南東側のD3・4区を中心に検出され、小穴群(230SX105)の上面に構築されている。平面形は不整形で、規模は南北3.5m、東西3.9mを測り、深さは浅く5cmほどである。覆土は暗灰色土で構成され、遺物は奈良後期(大宰府Ⅴ期)が主体である。

230SX061 (第4図)

調査区の西端に位置し、D6区から検出された。西側は調査区外に展開し、全容は捉えきれていない。調査し得た範囲が狭く、平面形および規模については不明であるが、深さは5cmほどを測る。覆土は明灰色土で構成され、出土遺物は奈良後半のものが主体である。

230SX070 (第4図)

調査区東側のF4・5区から検出されたが、東側は調査区外に展開し、全容は捉えきれていない。部分的に溝(230SD030)、小穴群(230SX034)、小穴(230SX102)に切られている。調査し得た範囲が狭く、平面形および規模については不明であるが、深さは4～18cmを測る。覆土は暗灰褐色土で構成され、出土遺物は平安前期が主体である。

230SX019 (第4図)

調査区南東側のD2区から検出され、たまり状遺構(230SX024)を切って構築されている。平面形は隅丸三角形を呈し、規模は長軸90cm、短軸85cm、深さは6～21cmを測る。覆土は上層より明灰色土、明褐色土の順に堆積し、出土遺物は奈良後期から平安前期のものが主体である。

230SX023 (第4図)

調査区のほぼ中央のE4・5区から検出された2本の小穴である。溝(230SD075)、土坑(230SK041)、たまり状遺構(230SX063)を切って構築されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径でそれぞれ50cm前後、深さは15cmほどを測る。覆土は暗灰色土で構成されているが、焼土が多く含有される。出土遺物は平安時代のものが主体である。

230SX034 (第4図)

調査区東側のF4区から検出された3本の小穴である。小穴(230SX102)、たまり状遺構(230SX070)を切って構築されている。平面形は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で25～43cm、深さは9～13cmを測る。覆土は暗灰色土で構成されているが、焼土が含まれる。出土遺物は平安前期(大宰府Ⅶ期)以降のものが主体である。

230SX039 (第4図)

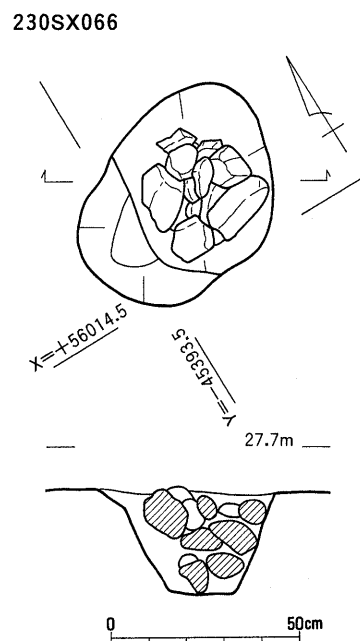
調査区のほぼ中央のE5・6区から検出され、小穴(230SX046)を切って構築されている。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径97cm、短径45cm、深さ15cmを測る。覆土は明灰色土で構成され、出土遺物は平安前期以降のものが主体である。

230SX048 (第4図)

調査区のほぼ中央のE5区から検出され、東側を土坑(230SK041)に壊されているが、たまり状遺構(230SX062)を切って構築されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径で45cm、深さは40cmを測る。覆土は褐灰色土で構成され、遺物は平安時代のものが出土している。

230SX066 (第13図、図版7)

調査区中央のやや西側に位置し、D5から検出されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径60cm、短径45cm、深さは27cmを測る。覆土内には礫が多く充填され、拳大のものが中心に検出されている。礫はすべて花崗岩である。覆土は明褐色土で構成されているが、遺物は出土していない。



第13図 230SX066実測図(1/20)

230SX074 (第4図)

調査区中央のやや北西寄りのE6・7区から検出された5本の小穴である。平面形は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で18~43cm、深さは8~18cmを測る。覆土は暗灰色土で構成され、出土遺物は平安前期末から中期初頭(大宰府Ⅷ期)を主体としている。

230SX078 (第4図)

調査区中央のやや北寄りのE・F6区から検出された4本の小穴である。平面形は略円形または楕円形を呈し、規模は長径で30~45cm、深さは12~25cmを測る。覆土は暗灰色土で構成され、出土遺物は平安前期以降のものが主体である。

230SX098 (第4図)

調査区北西側のF8区から検出された3本の小穴であるが、その中で1本は柵列(230SA080)に変更している。平面形は楕円形を呈し、規模は長径で30・35cm、深さはそれぞれ21cmを測る。覆土は暗灰色土で構成され、出土遺物は平安時代のものが主体である。

230SX113 (第5図)

第Ⅱ面の南東壁際に位置し、D6区から検出された。南西側が調査区外に展開し、北側は第Ⅰ面の土坑(230SK040)によって切られている。全容が不明であることから判断は難しいが、土層断面では明確な立ち上がりが確認されず、地山である黄褐色砂が鷺田川に向かって傾斜していることから自然地形と考えられる。遺物は奈良時代のものが包含される。

2. 遺 物

1) 溝出土遺物

230SD025出土遺物 (第14図、図版8)

暗灰色土

須恵器

捏鉢 (1・2) 1・2とも口縁部の破片資料で、回転ナデ調整される。1の外表面は灰黄色、内面は灰白色を呈し、口縁部は玉縁状となる。2は灰色を呈し、口縁部は内湾して立ち上がり、玉縁状となる。いずれも篠窯系である。

土師器

坏または皿 (3) 口縁部の破片資料である。口縁部は外反し、端部の内側には浅い沈線が観察される。器壁は薄く、橙色を呈する。畿内からの搬入品と考えられる。

黒色土器 A

椀 (4) 口径は14.8cmに復元される。外面は回転ナデが施され、内面はミガキ調整の後に黒色処理される。

黒色土器 B

小皿 a (5) 口径11.7cm、器高1.9cm、底径8.0cmに復元される。内外面とも体部は回転ナデ、外面の底部は回転ヘラ削り、内面の底部は不定方向のナデが施され、内外面とも黒色処理される。

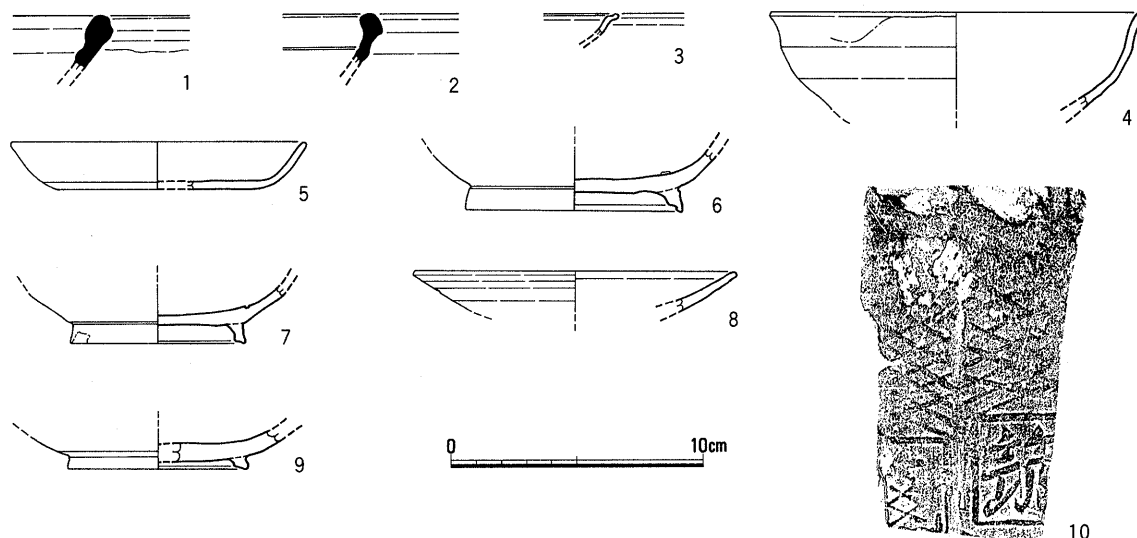
緑釉陶器

椀 (6・7) 6は高台径8.6cmを測る資料で、表土で取り上げた資料と接合した。胎土は暗橙色を呈し、黄緑色に発色する釉を施す。底部内外面にトチン跡がそれぞれ1ヵ所観察される。近江産と考えられる。7は高台径7.0cmに復元される破片資料である。胎土は暗黄緑色を呈し、暗緑色に発色する釉が高台外面の一部に観察されるが、それ以外は剥落して不明瞭である。近江産の製品と考えられる。

皿 (8) 口径12.8cmに復元される口縁部の破片資料である。胎土は灰色を呈し、暗緑色に発色する釉が施され、外面に重ね焼き痕が観察される。京都産と考えられる。

破片 (9) 皿または椀の破片資料で、高台径は7.1cmに復元される。胎土は灰白色を呈し、淡黄緑色

230SD025暗灰色土



第14図 230SD025出土遺物

に発色する釉が施されている。東海産と考えられる。

瓦類

平瓦 (10) 文字瓦Ⅵ-3類で、格子叩きが施され、押印による「筑」の文字が認められる。

金属製品

鉄釘 (全長6.9cm、幅0.5~0.8cm)、棒状鉄製品 (L字状、断面長方形、現存長8.0cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm) が出土している。

230SD030出土遺物 (第15図)

暗灰色土

土師器

小皿 a 1 (1) 口径9.0cm、器高1.0cm、底径6.3cmに復元される。器面の摩耗が著しく体部調整は不明であるが、外面の底部は回転ヘラ切りが施される。浅黄橙色を呈する。

黒色土器B

碗 (2) 口縁部の破片資料である。外面はナデ、内面はミガキが施され、内外面とも黒色処理される。胎土には白雲母をやや多く含む。

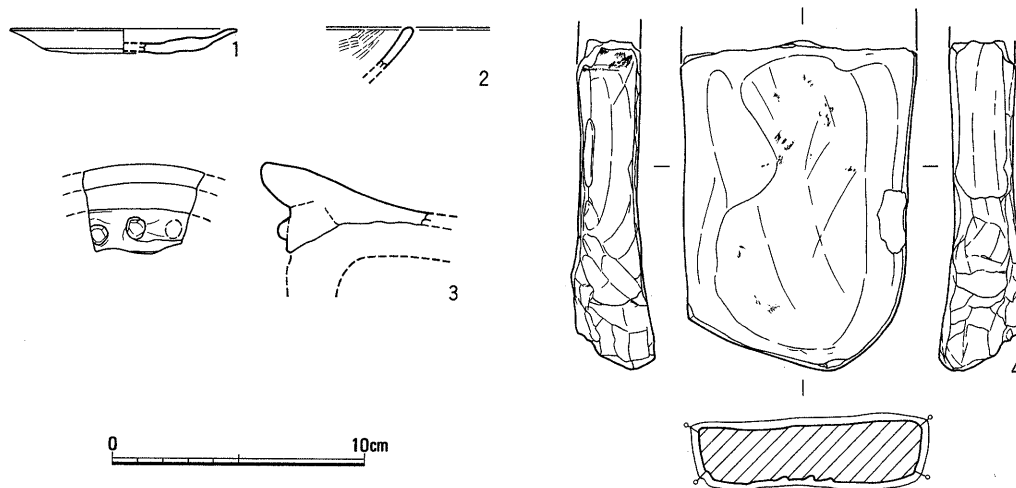
瓦類

軒丸瓦 (3) 瓦当の一部が残存し、外区に珠文が巡る。焼成は不良で、暗橙色~暗黄橙色である。

石製品

砥石 (4) 細粒砂岩を素材とし、4面が研磨される。1面には極少量ではあるが墨痕が観察され、転用硯の可能性も考えられる。現存長12.9cm、最大幅9.3cmを測る。

230SD030暗灰色土



第15図 230SD030出土遺物

230SD010出土遺物 (第16図、図版8)

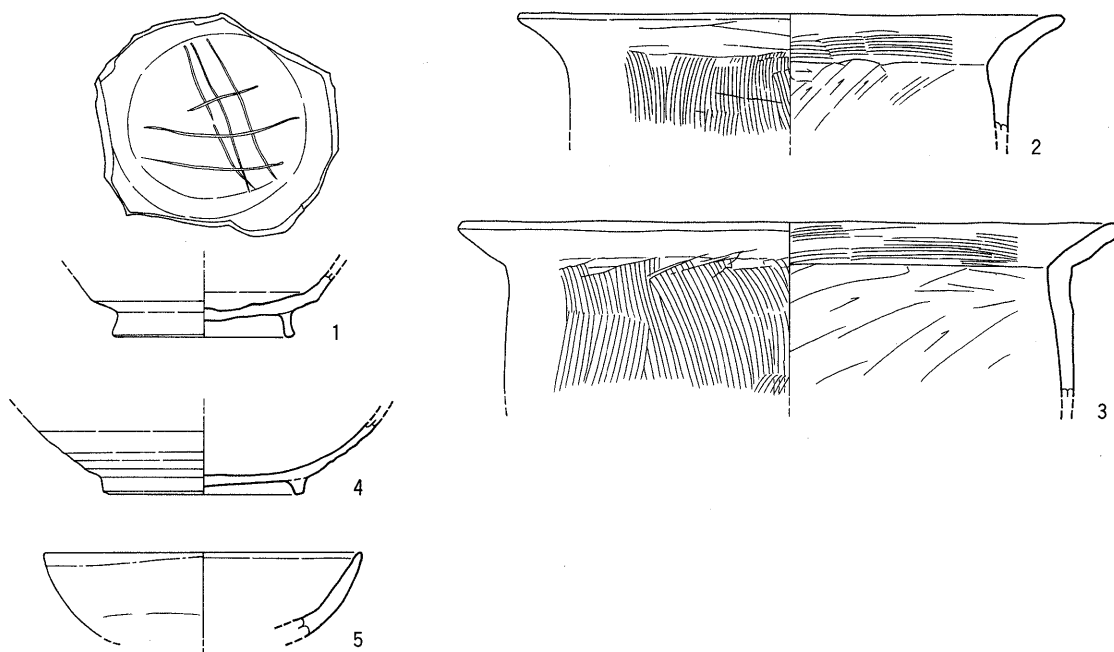
暗灰色土

土師器

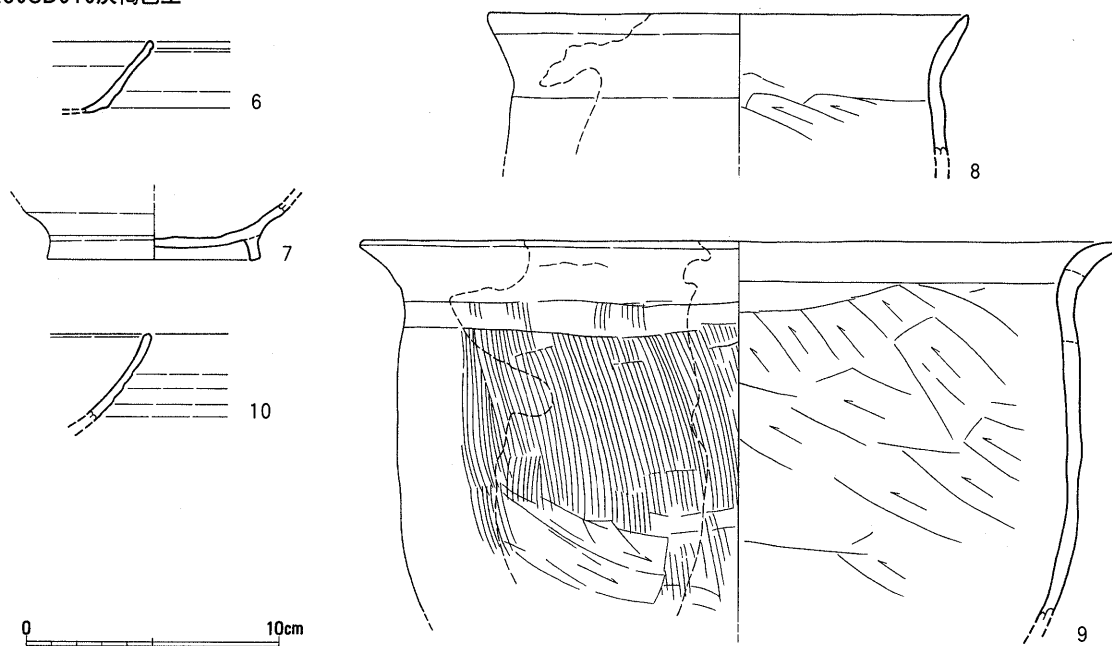
碗 c 1 (1) 底部が遺存する資料で、高台径7.2cmを測る。体部と底部の境に明瞭な稜を持ち、内面の底部にはヘラ描きが観察される。外面は明黄橙色、内面は明黄橙色~灰黄褐色を呈する。

甕 a (2・3) 2は口径21.6cmに復元される。外面の口縁部は横ナデ、胴部は縦ハケ目が施され、内面の口縁部上半は横ナデ、下半は横ハケ目、胴部はヘラ削りが行われている。胎土には白雲母が少量含まれ、外面は明黄橙色～橙色、内面は明黄橙色を呈する。3は口径26.2cmに復元される。外面の口縁部は横ナデ、胴部は縦ハケ目が施され、内面の口縁部横ハケ目、胴部はヘラ削りが行われる。胎土には白雲母が微量含まれ、黄橙色を呈するが、外面胴部の一部は橙色となる。

230SD010暗灰色土



230SD010灰褐色土



第16図 230SD010出土遺物

黒色土器 A

碗 c (4) 体部下半から底部が遺存する資料で、高台径8.0cmを測る。外面の体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りの後にナデが施され、板状圧痕が観察される。内面は不定方向のナデから黒色処理される。胎土には白雲母が少量含まれる。

碗 (5) 口径は12.6cmに復元される。外面は摩耗が著しく調整は不明で、内面はミガキ調整の後に黒色処理される。

その他

写真(図版8)に掲載した(R-006)は、土壁と考えられる資料である。灰白色を呈し、断面には粘土を積み上げた痕跡が観察される。

灰褐色土

土師器

坏 (6) 口縁から体部の破片資料で、外面は回転ナデが施され、内面は回転ナデと不定方向のナデが行われる。胎土には白雲母が微量含まれ、淡黄橙色を呈する。

坏 c (7) 底部が遺存する資料で、高台径9.4cmを測る。外面の底部は回転ヘラ切りの後にナデ、内面には不定方向のナデが施される。胎土には白雲母が少量含まれ、外面は明橙色～橙色、内面は明橙色を呈し、部分的に煤の影響により褐灰色に変色している。

甕 (8) 口径は20.0cmに復元される。口縁部は横ナデ、内面の胴部はヘラ削りが施される。胎土には角閃石と白雲母が多く含まれ、黄橙色を呈する。外面の大半に煤が付着する。

甕 a (9) 口径は30.0cmに復元される。内外面とも口縁部は横ナデ、外面の胴部は縦ハケ目、ヘラ削り、内面はヘラ削りが施される。胎土には白雲母が少量含まれ、外面は灰黄褐色、内面は明橙色を呈する。外面には帯状の煤の付着が観察される。

黒色土器 A

碗 (10) 口縁部の破片資料である。外面は回転ナデが施され、内面はミガキ調整の後に黒色処理される。

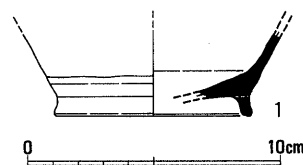
230SD075出土遺物 (第17図)

明灰色土

須恵器

坏 c (1) 体部から底部にかけての破片資料で、高台径は7.6cmに復元される。体部は回転ナデ、外面底部はヘラ削りが施される。青灰色～暗青灰色を呈するが、断面の中心部は酸化焙焼成気味である。

230SD075明灰色土



第17図 230SD075出土遺物

2) 掘立柱建物出土遺物

230SB050a出土遺物 (第18図)

暗灰色土

土師器

供膳具 (1) 口縁部の小破片で、内外面とも回転ナデが施される。胎土には白雲母が少量含まれ、暗黄橙色を呈する。

230SB050d出土遺物 (第18図)

明灰色土

土師器

供膳具 (2) 口縁部の小破片である。器面は摩耗が著しく、調整は不明である。灰白色を呈する。

230SB050f出土遺物 (第18図)

暗灰色土

土師器

供膳具 (3) 口縁部の小破片である。器面の摩耗が著しく、調整は不明である。暗橙色を呈する。

230SB050g出土遺物 (第18図)

暗灰色土

黒色土器 A

椀 (4) 口縁部の小破片である。器面の摩耗が著しいが、内面には黒色処理された痕跡が残る。胎土には白雲母が少量含まれる。

230SB050h出土遺物 (第18図)

暗灰色土

黒色土器 A

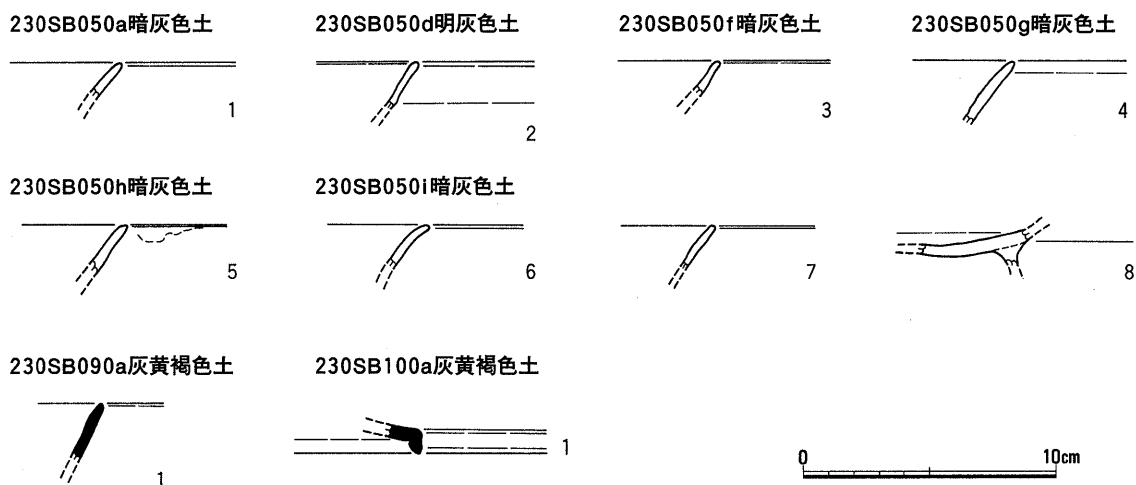
供膳具 (5) 口縁部の小破片である。器面は摩耗が顕著であるが、内面には黒色処理が観察される。胎土には白雲母が多く含まれる。

230SB050i出土遺物 (第18図)

暗灰色土

土師器

供膳具 (6・7) 6・7とも口縁部の小破片で、内外面とも回転ナデが施される。6は暗黄橙色、7は灰白色を呈する。



第18図 230SB050 a・d・f～i、SB090 a、SB100 a 出土遺物

坏または皿c（8） 底部の小破片である。内面はナデ、外面は回転ヘラ切りの後にナデが施される。高台の一部が残存し、灰白色を呈する。

230SB090a出土遺物（第18図）

灰黄褐色土

須恵器

坏または皿（1） 口縁部の小破片である。回転ナデ調整され、明青灰色～青灰色を呈する。

230SB100a出土遺物（第18図）

灰黄褐色土

須恵器

蓋3（1） 口縁部の小破片である。回転ナデ調整で仕上げられ、灰白色を呈する。

3）井戸出土遺物

230SE002出土遺物（第19図）

褐灰色土

土師器

甕（1） 口縁部の小破片である。内外面とも横ナデが施され、暗黄橙色を呈する。

青磁

未分類（2） 口縁部の小破片である。胎土は灰白色を呈し、釉は透明感がある暗緑灰色である。

陶器

甕（3） 胴部から底部にかけての破片資料である。外面の体部はタタキから回転ナデ、底部はヘラ切りが施され、内面は当て具痕を回転ナデで消している。胎土の内側は暗褐色、外側は灰色を呈する。朝鮮系の無釉陶器である。

暗灰色土

陶器

甕（4） 口径は16.4cmに復元される。回転ナデが行われ、口縁端部には粘土の移動による沈線が観察される。胎土の内側は灰色を呈し、外側は暗灰色となる。器面全体に灰を被り、粘土板の貼り合わせ部分の一部に隙間が生じている。朝鮮系の無釉陶器である。

黒褐色粘土

黒色土器B

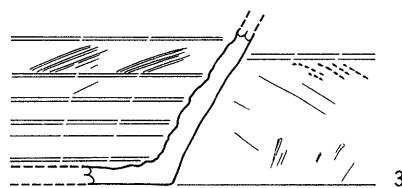
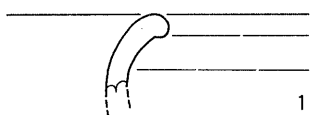
鉢（5） 口縁部の破片資料である。外面は横ヘラミガキが施され、内面の口縁部は横ナデ、体部はヘラミガキ調整となる。内外面とも黒色処理される。

明褐色土

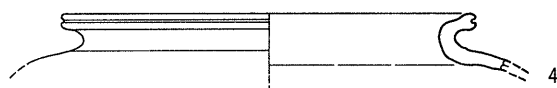
須恵器

壺（6） 肩部の小破片である。回転ナデから棒状の把手を貼付け、ナデを施す。その後に棒状工具で円孔を穿っている。黄灰色を呈し、把手の一部は還元化が顕著で黒灰色である。搬入品と考えられる。

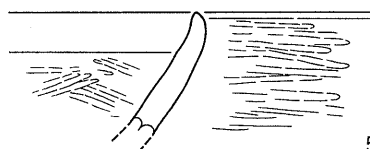
230SE002褐灰色土



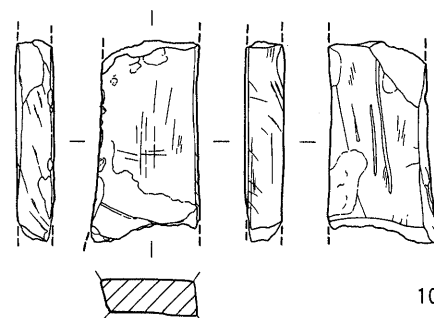
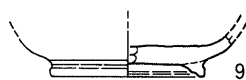
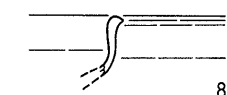
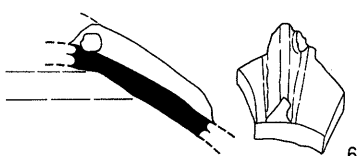
230SE002暗灰色土



230SE002黒褐色粘土



230SE002明褐色土



第19図 230SE002出土遺物

捏鉢（7） 底部の破片資料である。体部は回転ナデ、外面の底部は静止糸切りの後、ハケ状工具でのナデが観察される。灰白色を呈するが、一部は酸化焰焼成気味で淡橙色となる。篠窯系である。

黒色土器B

碗（8） 口縁部の小破片である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は玉縁状に肥厚する。内外面とも回転ナデが施された後、黒色処理される。

緑釉陶器

碗（9） 高台径は6.1cmに復元される。胎土は暗橙色を呈し、暗緑色に発色する釉を施している。内面の底部には陶枕痕が観察される。近江産と考えられる。

石製品

砥石（10） 細粒砂岩を素材とし、4面を使用する。現存長8.0cm、幅4.3cm、厚さ1.3cmを測る。

230SE005出土遺物（第20図、図版8）

褐灰色土

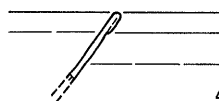
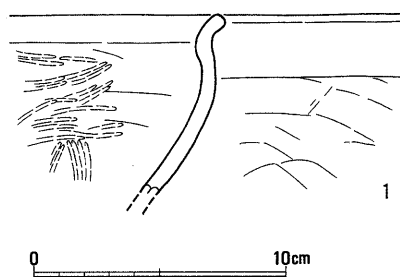
黒色土器A

鉢（1） 口縁から体部にかけての破片資料である。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は外反する。外面の口縁部は回転ナデ、体部は不定方向のナデが施され、内面は回転ナデ、ミガキ調整の後に黒色処理される。

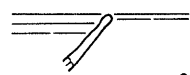
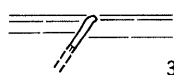
緑釉陶器

破片（2・3） いずれも碗の口縁部破片と考えられる。2は器面の摩耗が著しく、釉は全体に剥落

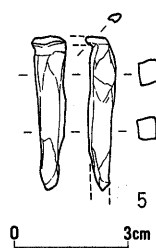
230SE005褐灰色土



230SE005灰褐色粘土



230SE005暗灰色土



第20図 230SE005出土遺物

し、端部に釉の痕跡が認められる程度である。胎土は灰黄色を呈するが、産地は不明である。3も器面の摩耗が著しく、薄く釉の痕跡を残すのみとなっている。胎土は灰黄色を呈し、東海産と考えられる。

白磁

碗（4） 口縁部の破片資料である。直線的に立ち上がり、口縁端部は折り曲げられている。釉は濁って黄色味を帯び、細かな貫入が入る。XI-1類である。

暗灰色土

金属製品

釘（5） 鉄製で、頭部を平たく潰し、断面は方形を呈する。現存長4.1cmを測る。

灰褐色粘土

土師器

坏（6） 口縁部の小破片である。内外面ともナデ調整され、端部はやや肥厚する。胎土には白雲母が少量含まれ、橙色を呈する。畿内産の可能性はある。

230SE006出土遺物（第21図、図版8）

暗灰色土

須恵器

捏鉢（1） 口縁部の小破片である。回転ナデ調整が施され、灰色を呈する。搬入品と考えられる。

土師器

碗c 2（2） 口径15.2cm、器高5.1cm、高台径6.9cmに復元され、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁端部はやや外反する。内外面とも口縁から体部は回転ナデ、内面の底部は不定方向のナデ、外面の底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。胎土には白雲母が微量含まれ、外面は明橙色、内面は淡黄橙色を呈する。

小皿2（3） 口径10.0cm、器高0.9cm、底径7.0cmに復元される。ナデ調整が施され、胎土には白雲母が微量含まれる。淡黄橙色を呈する。

甕（4） 口縁部の小破片で、内外面とも横ナデが施される。胎土には白雲母が微量含まれ、明橙色を呈する。外面には煤の付着が認められる。

黒色土器A

甕（5） 口縁部の小破片である。外面の口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデが施され、内面はナデ調

整の後に黒色処理される。外面には墨書の痕跡が認められる。

黒色土器B

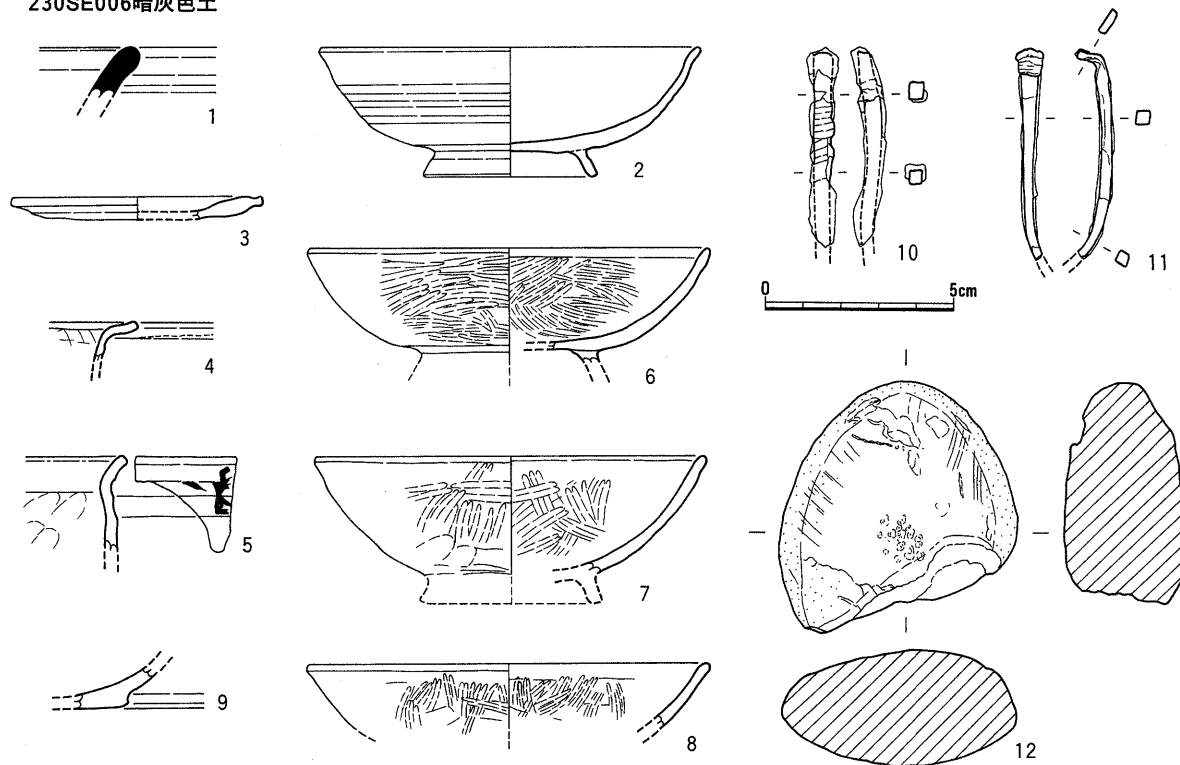
碗c 2 (6・7) 6は口径16.0cmに復元される。内外面とも体部はミガキ調整の後に黒色処理されるが、黒色化が進んでいない。大半は黄灰色を呈し、一部は明橙色となる。7は口径15.6cmに復元される。外面は横ヘラナデの後にミガキ、内面はミガキ調整が施され、内外面とも黒色処理される。

碗(8) 口径16.0cmに復元される。外面は横ナデの後にミガキ、内面はミガキ調整が施され、内外面とも黒色処理される。

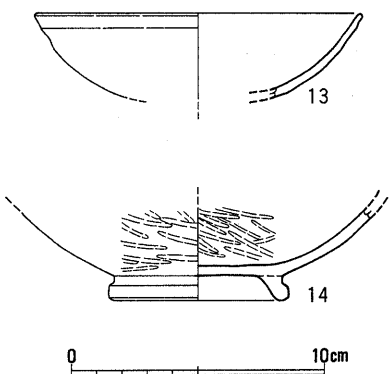
緑釉陶器

破片(9) 皿または碗の体部下位から底部にかけての小破片である。胎土は灰白色を呈し、淡黄緑

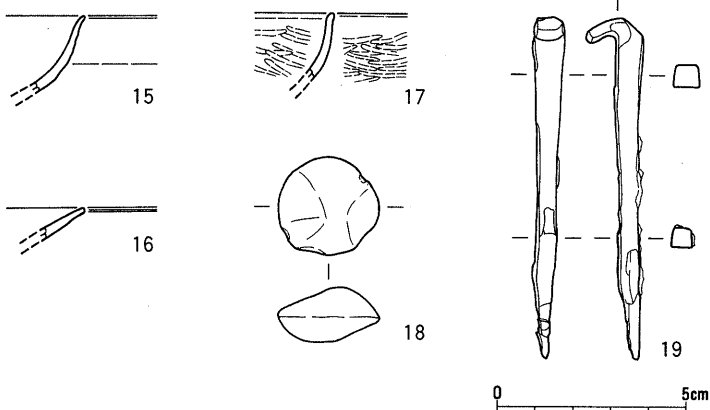
230SE006暗灰色土



230SE006黒灰色土



230SE006暗灰褐色土



第21図 230SE006出土遺物

色に発色する釉を施している。削り出しの円盤状高台で、京都産と考えられる。

金属製品

釘 (10・11) 10・11とも鉄製で、断面は方形である。頭部は平たく折り曲げられ、10は現存長5.3cm、11は現存長5.6cmを測る。

石製品

磨石 (12) 変成岩の亜円礫を素材とし、表面にはまばらな擦痕と敲打が観察される。長さ8.7cm、幅10.0cm、厚さ4.5cmを測る。

その他

写真 (図版 8) に掲載したM-014~016は土師器小皿 a の計測資料である。M-014は口径10.2cm、器高1.4cm、底径6.4cm、M-015は口径9.0cm、器高1.3cm、底径6.5cm、M-016は口径9.7cm、器高1.5cm、底径6.8cmを測る。

黒灰色土

土師器

丸底坏 (13) 口径は13.0cmに復元されるが、器面は摩耗が著しく調整は不明瞭である。胎土には白雲母がやや多く含まれ、淡黄橙色～黄橙色を呈する。

黒色土器B

碗 c 2 (14) 高台径は7.1cmを測り、内外面ともミガキ調整の後に黒色処理される。外面の底部は回転ヘラ切りが行われ、板状圧痕が観察される。

緑釉陶器

碗 (15) 口縁から体部にかけての小破片で、胎土は内側が明黄褐色、外側は黄灰色を呈する。濃緑色に発色する釉を施しているが、釉厚は薄い。近江産と考えられる。

皿 (16) 口縁部の小破片である。胎土は灰白色を呈し、淡緑色に発色する釉を施しているが、器面の摩耗が著しく、釉の剥落が顕著である。東海産と考えられる。

暗灰褐色土

黒色土器B

碗 (17) 口縁から体部上位の小破片である。内外面ともミガキ調整の後に黒色処理される。

土製品

玉 (18) 手捏ね。断面はそろばん玉状を呈し、幅4.0cm、厚さ2.2cm、重量23.6gを測る。用途は不明である。

金属製品

釘 (19) 鉄製で、断面は方形である。全長9.0cm、重量12.0gを測り、頭部は平たく折り曲げられている。

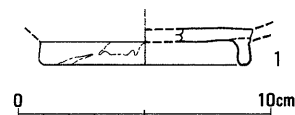
230SE055出土遺物 (第22図)

暗灰色土

灰釉陶器

碗または皿 (1) 高台径は8.4cmに復元される。胎土は灰白色を呈し、外面の一部に暗緑色の釉が認められる。

230SE055暗灰色土



第22図 230SE055出土遺物

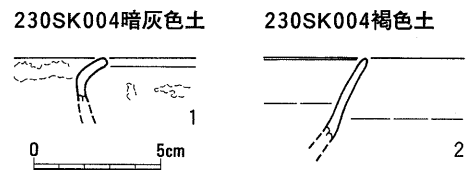
4) 土坑出土遺物

230SK004出土遺物 (第23図)

暗灰色土

土師器

甕 (1) 口縁部の小破片である。内外面とも横ナデが施され、部分的に煤が付着している。淡黄橙色を呈する。



第23図 230SK004出土遺物

褐色土

土師器

坏 (2) 口縁から体部の小破片である。内外面とも回転ナデが施され、淡黄橙色を呈する。

230SK011出土遺物 (第24図)

明灰色土

須恵器

坏 c (1) 体部下位から底部にかけての破片資料で、高台径は7.3cmに復元される。器面は回転ナデで仕上げられる。還元はやや不良で、暗橙色を呈し、部分的に黒灰色となる。

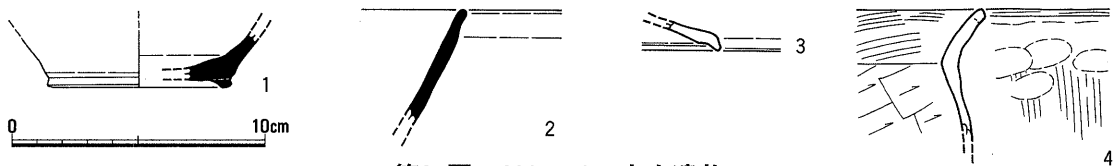
坏 (2) 口縁から体部の小破片で、器面は回転ナデで仕上げられる。焼成は良好で、明青灰色～青灰色を呈する。

土師器

蓋 3 (3) 口縁部の小破片である。内外面とも回転ナデが施され、橙色を呈する。

甕 a (4) 口縁部から胴肩部の小破片である。外面の口縁部は横ナデおよび指ナデ、胴部は縦ハケ目が施され、内面の口縁部は横ハケ目、胴部はヘラ削りが行われている。外面は橙色で、一部は灰色に変色する。内面は灰黄褐色を呈する。

230SK011明灰色土



第24図 230SK011出土遺物

230SK040出土遺物 (第25・26図、図版9)

覆土は上層より暗灰色土、黒灰色土、暗灰色土で構成され、遺物は主に上～中層（暗灰色土、黒灰色土）から出土している。

暗灰色土

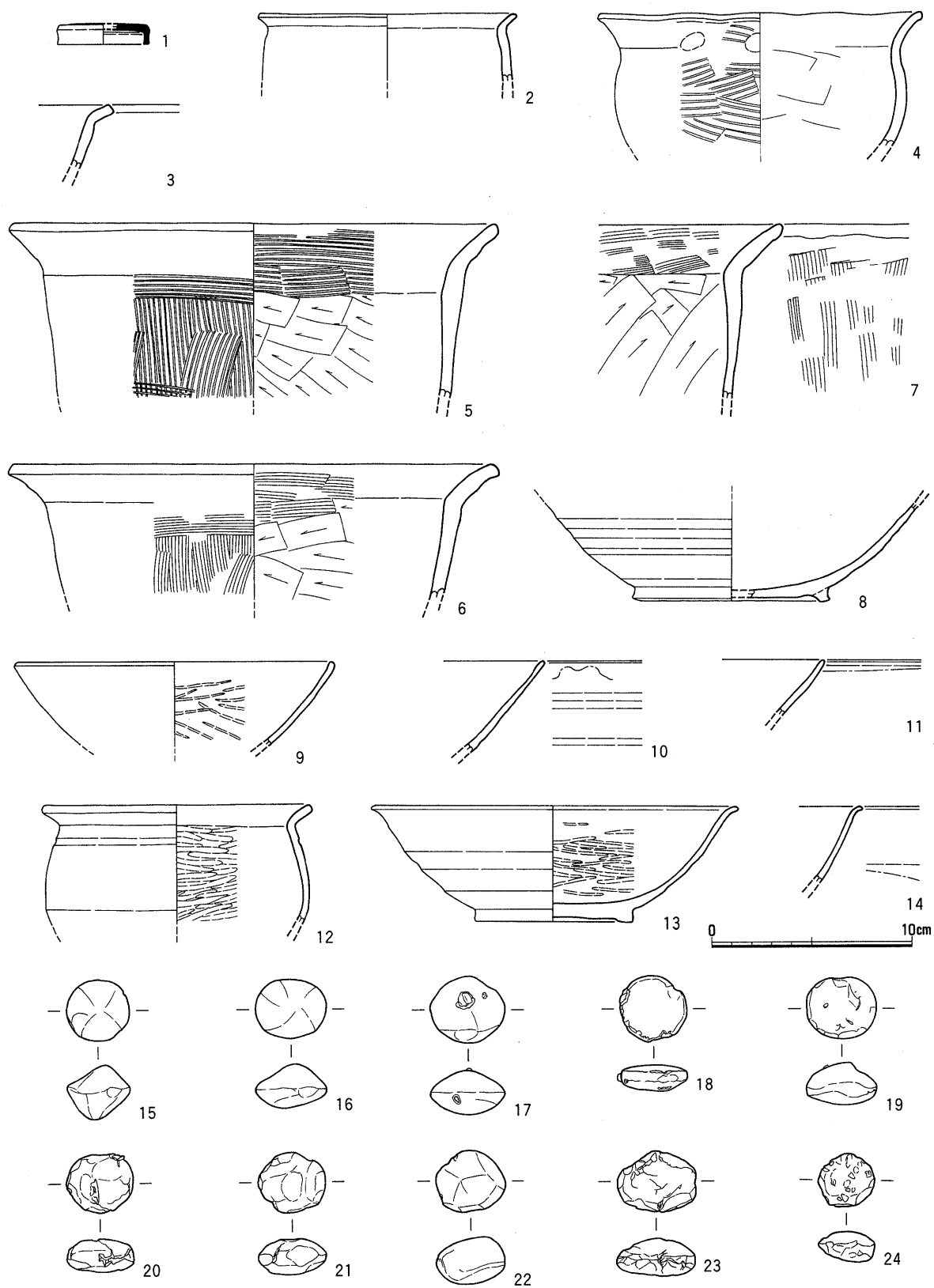
須恵器

小蓋 (1) 口径は4.6cmに復元される。外面天井部は回転ヘラ削り、口縁部は回転ナデが施される。焼成は良好で、暗青灰色～青灰色を呈する。

土師器

甕 (2～4) 2は口径13.0cmに復元される。内外面ともナデ調整が施され、胎土には白雲母がやや多く含まれ、橙色～黄橙色を呈する。3は口縁から胴部上位の小破片で、内外面ともナデ調整が施され

230SK040暗灰色土



第25图 230SK040出土遺物 (1)

る。胎土には白雲母が少量含まれ、外面は煤状の炭化物が付着し、大半が黒色を呈する。内面は淡黄橙色である。4は口径16.2cmに復元される。外面の口縁部はナデ、胴部は横タタキが施され、内面はナデ調整となる。灰褐色を呈し、口縁端部は暗橙色である。古式土師器の可能性はある。

甕a(5~7) 5・6とも口径は24.6cmに復元され、外面の口縁部は横ナデ、胴部ハケ目、内面の口縁部は横ハケ目、胴部はヘラ削りが施される。5の外面は淡黄橙色、内面は暗黄橙色、6の外面は淡黄色、内面は橙色を呈する。7は口縁から胴部上位の小破片である。外面の口縁部はナデ、胴部は縦ハケ目、内面の口縁部横ハケ目、胴部はヘラ削りが施される。外面は暗黄橙色、内面は橙色を呈する。

黒色土器A

碗c(8) 高台径は9.8cmに復元される。外面の体部は回転ナデおよび回転ヘラ削り、底部は回転ナデからナデが施される。内面の調整は不明である。焼成は不良で、内面の黒色化は進んでいない。

碗(9~11) 9は口径16.0cmに復元される資料である。外面は横ナデ、内面はミガキ調整の後に黒色処理される。10・11は口縁から体部の小破片である。外面は回転ナデが施されるが、内面は摩耗が著しく調整は不明瞭である。

甕(12) 口径は13.6cmに復元される。外面はナデが施され、内面の口縁部はナデ、胴部は横ヘラミガキの後に黒色処理される。外面には部分的に煤が付着する。

緑釉陶器

碗(13) 口径18.4cm、器高5.8cm、高台径8.0cmに復元される資料である。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は外反する。胎土は灰白色を呈し、淡緑色に発色する釉を施しているが、器面の摩耗が顕著で、釉の剥落が著しい。

灰釉陶器

碗(14) 口縁から体部の小破片で、直線的な体部から口縁端部は外反する。回転ナデ調整が施され、胎土は明青灰色、釉は淡緑灰色を呈する。

土製品

玉(15~24) 断面はそろばん玉状または楕円形を呈し、手捏ねである。幅は2.7~3.9cm、厚さ1.3~2.7cm、重量9.8~20.2gを測る。用途は不明である。

瓦類

軒丸瓦(25) 瓦当の1/2弱が残存する単弁蓮華文軒丸瓦である。残存部分の内区には1+8の蓮子を配し、蓮華文6葉が確認される。瓦当の側面には布目が観察される。

丸瓦(26) 有段式の丸瓦で、凸面は縄目、凹面は布目が施される。焼成は不良である。全長38.0cm、玉縁長5.0cm、幅16.1cm、高さ9.6cmを測る。

その他

写真(図版9)に掲載したR-027は須恵器甕の破片で、口縁部が剥がれた部分にタタキ目が観察される資料である。R-028は土師器の破片が癒着している資料である。R-029は青磁(褐彩)の水注の破片で長沙窯系である。

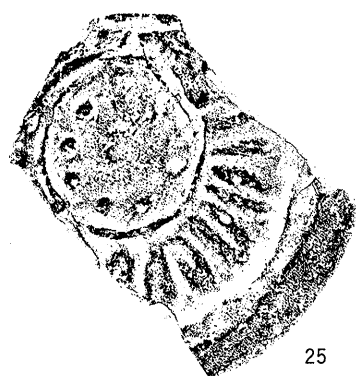
230SK041出土遺物(第27図)

明灰色土

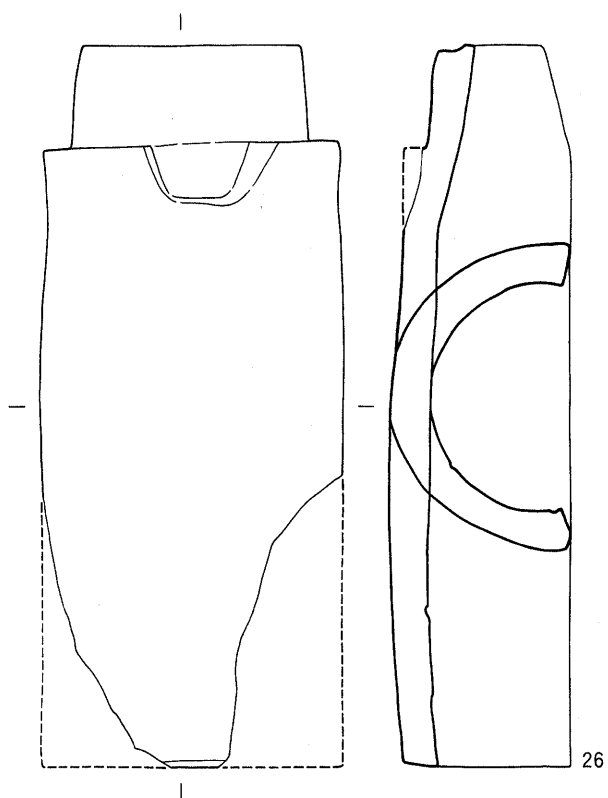
緑釉陶器

碗または皿(1) 体部下半から底部の小破片である。胎土は灰白色を呈し、明緑色に発色する釉が施される。京都産と考えられる。

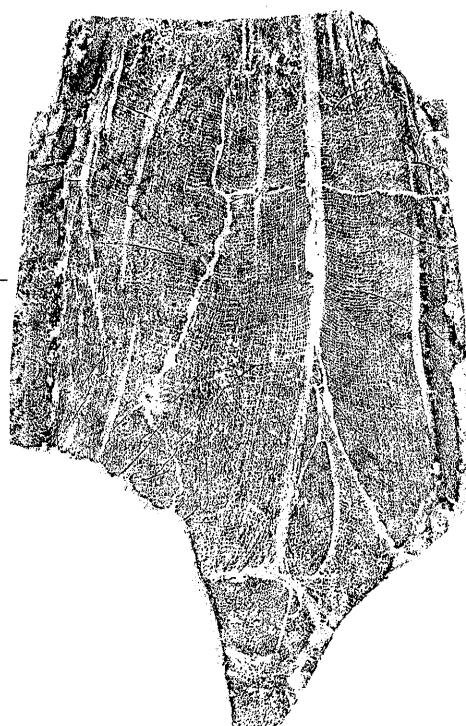
230SK040暗灰色土



25



26



第26図 230SK040出土遺物（2）

230SK045出土遺物（第27図）

暗灰色土

土師器

碗 c（1） 高台径は7.0cmに復元される破片資料である。内外面とも体部は回転ナデ、底部はナデが施される。胎土には白雲母がやや多く含まれ、明橙色を呈する。内面には煤の付着が観察される。

黒色土器 A

鉢（2） 口縁から体部の小破片である。体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁部は外反し、端部はほぼ平坦となる。外面は横ナデおよび回転ナデが施され、内面は横ミガキの後に黒色処理される。

青磁

水注（3） 褐彩が施された水注の胴肩部と把手の一部である。内外面は回転ナデで仕上げられ、把手が貼り付けられる。胎土は灰色を呈し、灰黄色と暗褐色に発色する釉が施されるが、内面の下半は無釉である。長沙窯系である。

石製品

砥石（4） 細粒砂岩を素材とし、4面を使用する。現存長5.4cm、現存幅5.6cm、厚さ1.7cmを測る。

230SK060出土遺物（第27図）

明灰色土

須恵器

蓋 3（1） 口縁部の小破片で、回転ナデで仕上げられる。焼成は良好で、灰色を呈するが、外面の一部は黒灰色に変色している。

土師器

坏（2・3） いずれも口縁から体部の破片資料である。2の口径は14.8cmに復元され、内外面とも回転ナデが施される。胎土には白雲母が微量含まれ、橙色を呈する。3は内外面とも横ナデが行われ、内面の口縁端部には沈線が施される。橙色を呈し、畿内産と考えられる。

230SK095出土遺物（第27図、図版10）

灰白色土

須恵器

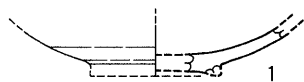
小坏 a（1） 口径11.2cm、器高3.3～4.0cm、底径6.6cmを測る。内外面とも口縁から体部は回転ナデで仕上げられ、外面の底部は回転ヘラ切りからナデ調整が施される。焼成は良好であるが、内面全体に降灰が観察され、焼き歪みが生じている。黒灰色を呈するが、一部は暗青灰色となる。

土師器

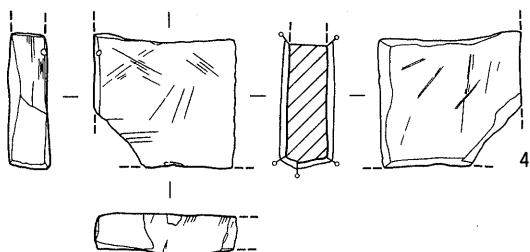
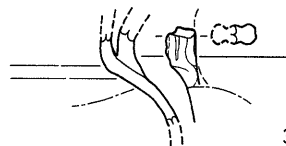
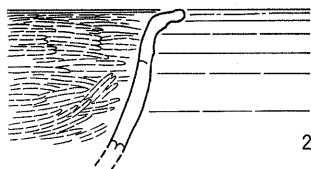
甕（2） 口径13.6cm、器高7.9cmを測る。外面の口縁から胴部はナデ、底面にはカキ目が観察され、内面の口縁部は横ナデ、胴から底部は不定方向のナデが施される。胎土には白雲母が微量含まれ、外面は暗橙色、内面は淡黄橙色を呈する。

把手付甕（3） 口径は30.2cmに復元される。外面はナデ調整から把手は貼り付けられ、内面の口縁部は横ナデ、胴部は削りが施される。胎土には白雲母が微量含まれ、外面は暗黄橙色、内面は橙色を呈する。内面の胴部には煤が付着する。

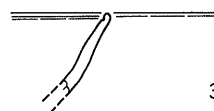
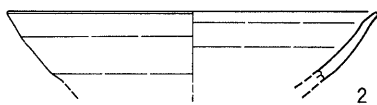
230SK041明灰色土



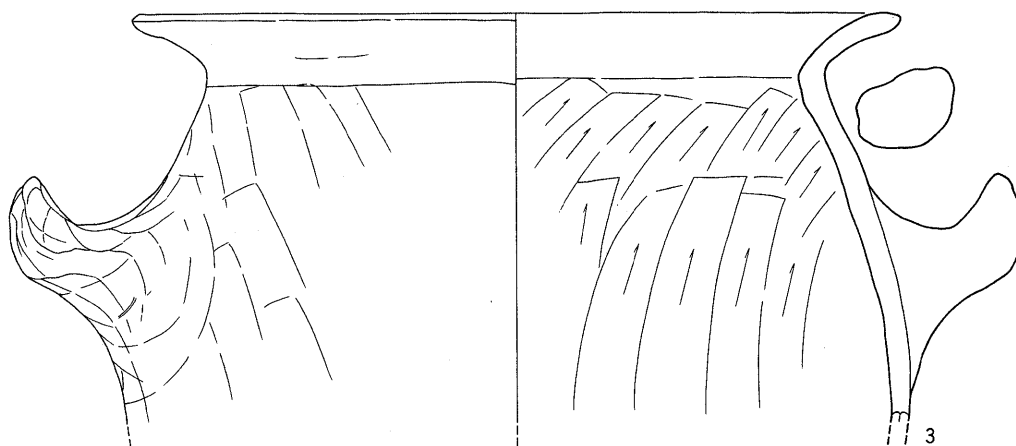
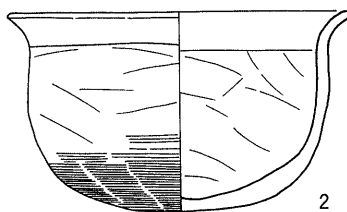
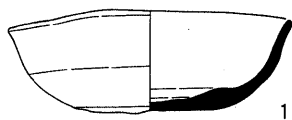
230SK045暗灰色土



230SK060明灰色土



230SK095灰白色土



第27图 230SK041 · 045 · 060 · 095出土遺物

5) その他の遺構出土遺物

230SX001出土遺物 (第28図)

明灰色土

土師器

碗 c 1 (1・2) 1は口径11.0cm、器高4.9cm、高台径7.0cmに復元される。内外面とも口縁から体部は回転ナデ、外面の底部はナデが施され、内面の底部は回転ナデからナデ調整が行われる。胎土には白雲母が多く含まれ、暗橙色を呈する。2は口径12.0cmに復元される。内外面とも口縁から体部は回転ナデ、内面の底部は回転ナデからナデ調整が行われる。胎土には白雲母が少量含まれ、灰黄色を呈する。外面の底部は黒変している。

皿 c (3) 口径12.4cm、器高2.2cm、高台径6.6cmに復元される。内外面とも回転ナデが施され、外面の底部は回転ヘラ切りが行われる。灰白色を呈する。

石製品

面子? (4) 安山岩を素材とし、全体を敲打によって円板状に成形している。表面には煤が点状に付着する。径5.1cm、厚さ1.6cm、重量71gを測る。

230SX007出土遺物 (第28図、図版10)

赤褐色土

須恵器

蓋 4 (1) 口径は18.8cm、器高2.0cmに復元される。内外面とも口縁部は回転ナデが施され、外面の天井部は回転ヘラ切りからナデ、内面は不定方向のナデが行われる。焼成は良好で、青灰色～明青灰色を呈する。

甕 (2・3) 2は口径19.0cmに復元される。内外面とも口縁部は回転ナデ、外面の胴部は平行タタキが施され、内面はナデ調整されるが、当て具痕が観察される。外面の全面に自然釉が付着し、外面は灰色および黒色、内面は青灰色を呈する。3は口縁部から胴肩部の小破片である。内外面とも口縁部は回転ナデ、外面の胴部はタタキ、内面はタタキからナデ調整される。青灰色を呈する。

黒色土器 A

碗 (4・5) いずれも口縁から体部にかけての小破片である。4の外面は回転ナデが施され、内面はミガキ調整の後に黒色処理される。5の外面も回転ナデが施されるが、内面は器面の摩耗が著しく、調整は不明瞭である。

その他

写真 (図版10) に掲載したM-001は土師器の皿 a で、口径14.0cm、器高2.0cm、底径10.5cmを測る。M-002は土師器の坏 a で、口径12.4cm、器高3.9cm、底径7.2cmを計測する資料である。

230SX018出土遺物 (第28図)

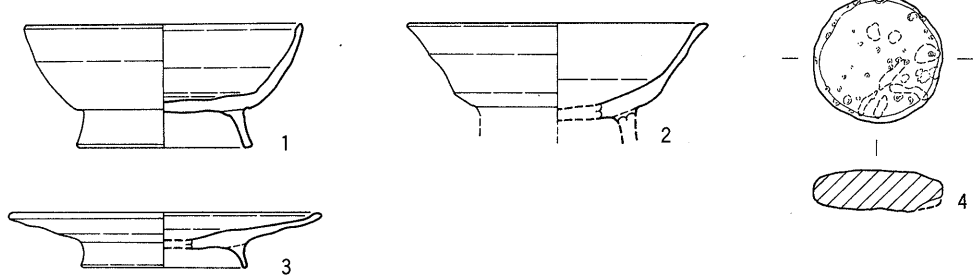
褐灰色土

土師器

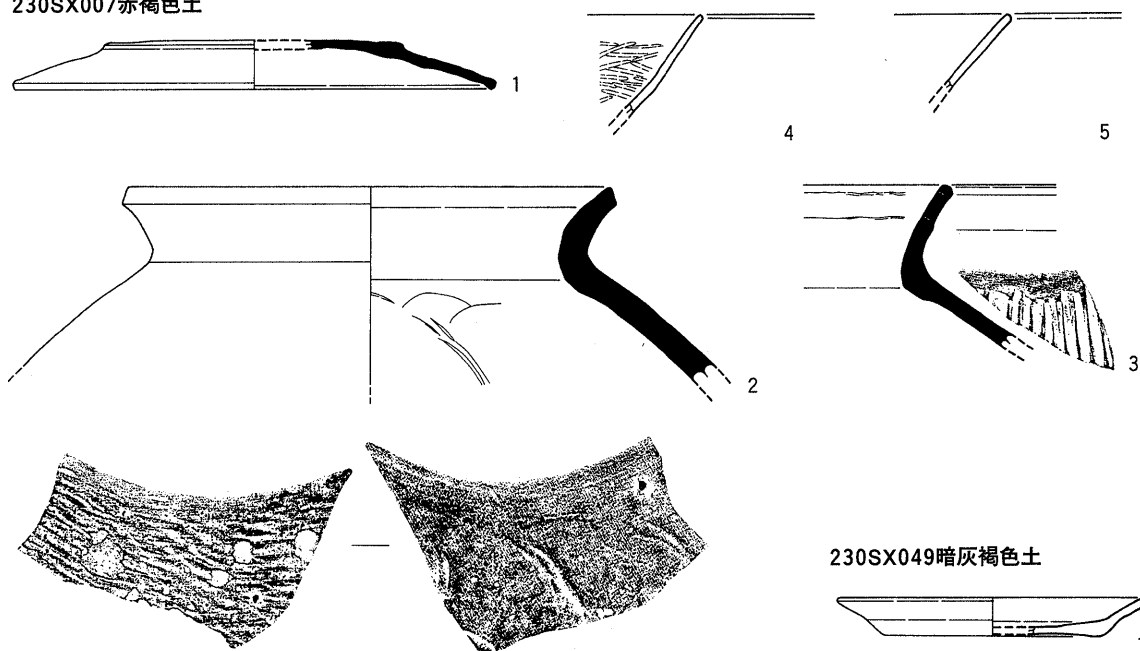
坏 c (1) 底部の1/2が遺存する資料で、高台径6.6cmを測る。体部は回転ナデが施され、外面の底部は回転ヘラ切りからナデ、内面の底部は不定方向のナデが行われる。色調は灰白色～明黄橙色を呈するが、外面の底部は褐灰色となる。

甕 a (2) 口径は18.2cmに復元される。外面の口縁部は横ナデ、胴部は縦ハケ目が施され、内面の

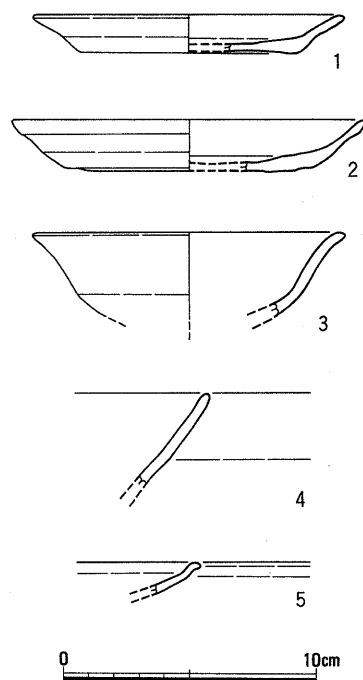
230SX001明灰色土



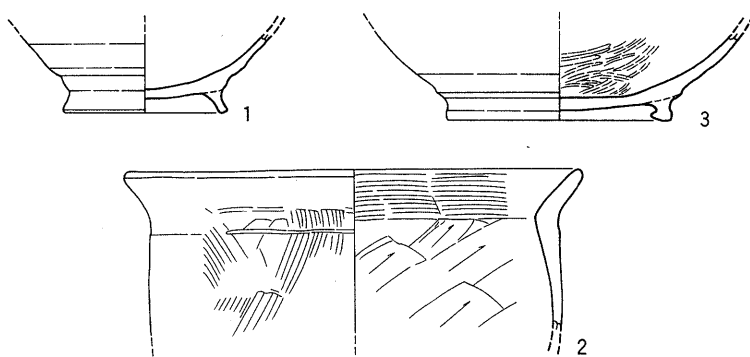
230SX007赤褐色土



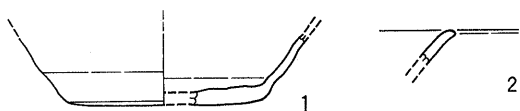
230SX049暗灰褐色土



230SX018褐灰色土



230SX024暗灰色土



第28图 230SX001 · 007 · 018 · 024 · 049出土遺物

口縁部は横ハケ目、胴部はヘラ削りが行われる。胎土には白雲母が少量含まれ、明黄橙色を呈する。

黒色土器 A

碗 c (3) 高台径は9.0cmに復元される。外面の体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りからナデが施される。内面はミガキ調整の後に黒色処理される。

230SX024出土遺物 (第28図)

暗灰色土

土師器

坏 a (1) 底径が7.7cmに復元される体部から底部の破片資料である。外面の体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りからナデが行われ、内面の体部は回転ナデ、底部はナデ調整が施される。胎土には白雲母が少量含まれ、橙色を呈する。

緑釉陶器

皿または碗 (2) 口縁部の小破片である。胎土は灰白色を呈し、淡緑色に発色する釉を施す。京都産と考えられる。

230SX049出土遺物 (第28図)

暗灰褐色土

土師器

皿 a (1・2) いずれも口縁から体部は回転ナデが施され、外面の底部は回転ヘラ切り、内面の底部は回転ナデからナデ調整が行われる。胎土には白雲母が少量含まれる。1は口径12.2cm、器高1.6cm、底径8.5cmに復元され、淡橙色～濃橙色を呈する。2は口径14.0cm、器高2.0cm、底径10.0cmに復元され、暗黄橙色である。

黒色土器 A

碗 (3・4) 3は口径12.4cmに復元される資料である。内外面とも回転ナデが施され、内面と外面の口縁端部は黒色処理される。4は口縁から体部にかけての小破片である。外面は回転ナデが施され、内面と外面の口縁端部は黒色処理されるが、内面は器面の摩耗が著しく、調整は不明瞭である。

灰釉陶器

皿 (5) 口縁部の小破片である。胎土は灰白色を呈し、淡緑灰色に発色する釉を施す。

230SX053出土遺物 (第29図)

暗灰色土

須恵器

坏 a (1) 口径13.4cm、器高3.1cm、底径7.8cmに復元される。内外面とも口縁から体部は回転ナデ、内面の底部は不定方向のナデが施され、外面の底部は回転ヘラ切りが行われ、板状圧痕が残る。灰白色を呈するが、底部は灰色、口縁部は黒色または灰褐色となる。

土師器

坏 a (2) 口径13.8cm、器高3.7cm、底径7.0cmに復元される。内外面とも口縁から体部は回転ナデ、内面の底部は不定方向のナデが施され、外面の底部は回転ヘラ切りが行われる。胎土には白雲母が少量含まれ、暗黄橙色～暗橙色を呈する。

坏 (3) 口縁から体部の小破片で、器面は回転ナデが施される。胎土には白雲母が少量含まれ、灰

白色～淡黄橙色を呈する。

甕 a (4) 口縁から胴肩部の小破片である。内外面とも口縁部は横ナデが施され、胴部の外面は縦ハケ目、内面は削り調整となる。胎土には白雲母が少量含まれ、橙色を呈する。外面には部分的に煤が付着する。

黒灰色土

須恵器

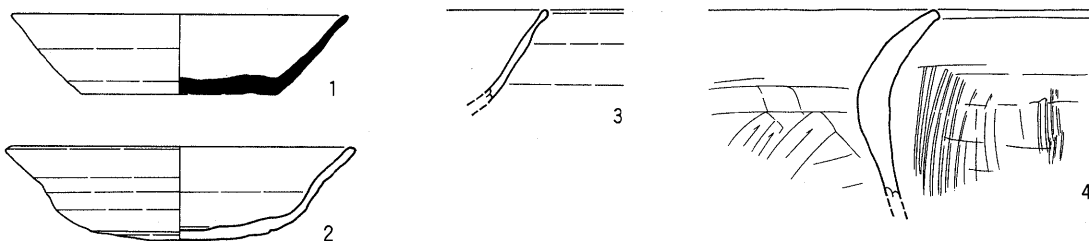
大椀 (5) 口径は21.2cmに復元される資料で、内外面とも回転ナデが施されるが、外面の下端には回転ヘラ削りが観察される。灰色を呈する。

土師器

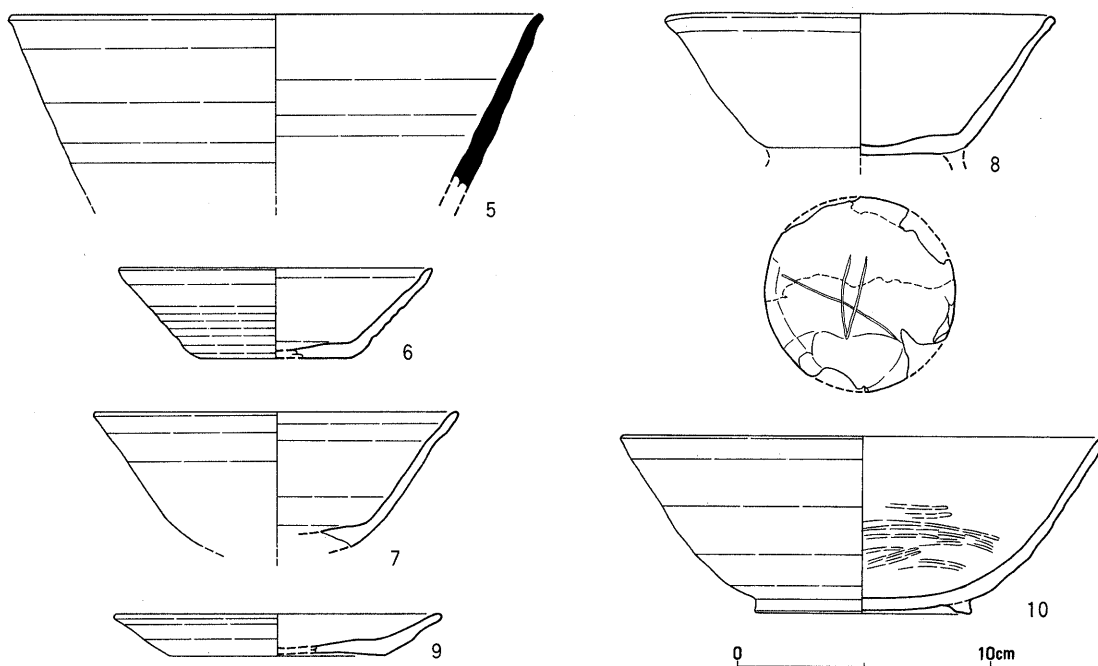
坏 a (6) 口径12.4cm、器高3.6cm、底径6.0cmに復元される。外面の口縁から体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りの後にナデが施されるが、内面は摩耗が著しく調整は不明瞭である。胎土には白雲母が少量含まれ、黄橙色～明橙色を呈する。

坏 (7) 口径は14.4cmに復元される口縁から体部の破片資料で、内外面とも回転ナデが施される。胎土には白雲母が含まれ、外面は橙色、内面は暗黄橙色を呈する。

230SX053暗灰色土



230SX053黒灰色土



第29図 230SX053出土遺物

碗 c 1 (8) 口径は15.0～15.4cmを測る。内外面とも口縁から体部は回転ナデが施され、内面の底部はほぼ一定方向のナデ、外面の底部は回転ヘラ切りからナデが行われる。外面の底部にはヘラ描きが観察される。胎土には白雲母がやや多く含まれる。外面の大半に煤が付着し、黒褐色呈するが、部分的には明黄橙色である。

皿 a (9) 口径13.0cm、器高1.7cm、底径8.6cmに復元される。器面の摩耗が著しく調整は不明瞭である。焼成は不良で、橙色を呈する。

黒色土器 A

碗 c 1 (10) 口径19.2cm、器高7.0cm、高台径8.5cmに復元される。外面の口縁から体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りが施され、内面はミガキおよび不定方向のナデから黒色処理される。

230SX054出土遺物 (第30図)

暗灰色土

須恵器

蓋 3 (1～3) 1は口径が13.6cmに復元される資料である。内面の天井部は不定方向のナデ、口縁部は回転ナデが行われ、外面の天井部は回転ヘラ切りからナデ、口縁部は回転ナデが施される。明青灰色を呈するが、口縁部は黒灰色となる。2は口径が14.4cmに復元される。器面は回転ナデが行われ、明青灰色を呈する。3は口径が19.4cmに復元される。内面は回転ナデが行われ、外面の天井部は回転ヘラ切りからナデ、口縁部は回転ナデが施される。青灰色～明青灰色を呈する。

壺蓋 (4) 天井部外周から口縁部にかけての小破片である。内面は回転ナデが行われ、外面の天井部は回転ヘラ切り、口縁部は回転ナデが施される。青灰色～暗青灰色を呈する。

坏 a (5) 口径13.0cm、器高3.9cm、底径7.7cmに復元される資料である。内面は回転ナデおよび不定方向のナデが施され、外面の口縁から体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りとなる。灰白色を呈するが、口縁端部は黒色に変色し、重ね焼きの痕跡が観察される。

皿 a (6) 口縁から底部にかけての小破片である。内面と外面の口縁部は回転ナデが行われ、外面の底部は回転ヘラ切りからナデ調整が施される。焼成は良好で、青灰色を呈する。

甕 (7) 口径が18.0cmに復元される口縁部の破片資料で、内外面とも回転ナデが施される。焼成は良好で、青灰色を呈する。

土師器

蓋 c 3 (8) 口径は17.0cmに復元される。外面の天井部はヘラ切りからナデ、口縁部は回転ヘラ削り、回転ナデが施され、内面は回転ナデから不定方向のナデが行われる。胎土には白雲母がやや多く含まれ、外面は黄橙色～橙色、内面は淡黄橙色を呈する。

坏 c (9) 口径15.6cm、器高5.3cm、高台径8.0cmに復元される。内面の口縁から体部は器面が摩耗し、調整は不明瞭、底部は不定方向のナデが行われる。外面の口縁から体部は回転ヘラ削り、底部は回転ヘラ切りからナデが施され、ヘラ描きが観察される。胎土には白雲母がやや多く含まれ、外面は橙色、内面は淡黄橙色を呈する。

皿 a (10) 口径17.0cm、器高1.3cm、底径12.8cmに復元される。内外面とも体部はミガキ、外面の底部は回転ヘラ削りとなる。胎土には白雲母が少量含まれ、橙色～淡黄橙色を呈する。

皿 c (11) 口径23.2cmに復元される資料である。内面は回転ナデが施され、外面は回転ナデおよび回転ヘラ削りが行われる。胎土には白雲母が少量含まれ、橙色を呈する。

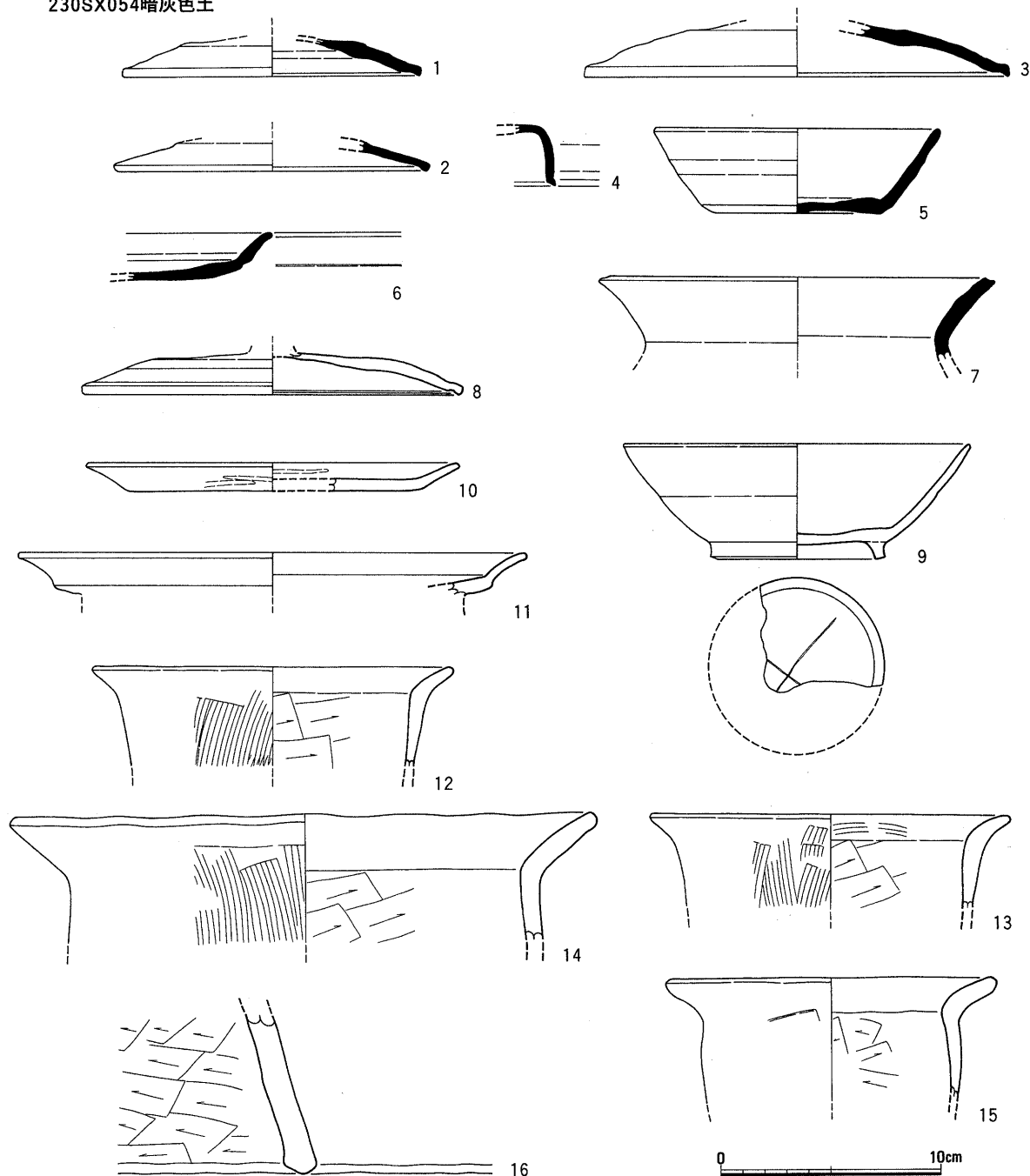
甕 a (12～14) 12・13は口径が16.4cm、14は口径が26.8cmに復元される資料である。12・14は内外

面とも口縁部は横ナデ、胴部の外面は縦ハケ目、内面はヘラ削りとなる。色調はいずれも橙色～淡黄橙色を呈する。13は外面の口縁部は横ナデ、胴部は縦ハケ目、内面の口縁部は横ハケ目、胴部はヘラ削りとなる。橙色～暗黄橙色を呈するが、内面は黒色を帯びる。

甕 (15) 口径は15.0cmに復元される。外面は摩耗により調整は不明瞭、内面の口縁部はナデ、胴部はヘラ削りが施される。橙色～暗黄橙色を呈する。

カマド (16) 底部の小破片で、外面はナデ、内面はヘラ削りが施される。外面は暗黄橙色、内面は褐色～灰褐色を呈する。

230SX054暗灰色土



第30図 230SX054出土遺物

230SX061出土遺物（第31図）

明灰色土

土師器

坏c（1） 高台径は7.8cmに復元される体部から高台部の破片資料である。内外面とも体部は摩耗により調整は不明瞭であるが、外面の下端には回転ヘラ削りが観察され、内面の底部はナデが施される。胎土には白雲母が少量含まれ、橙色～暗黄橙色を呈する。

坏e（2） 口径9.8cm、器高3.9cm、底径6.0cmに復元される。器面は摩耗により調整は不明瞭であるが、外面の底部には回転ヘラ削りが観察される。胎土には白雲母がやや多く含まれ、橙色～淡黄橙色を呈する。

皿（3） 復元口径15.0cmの破片資料で、器面は回転ナデが施される。橙色～淡黄橙色を呈する。

230SX070出土遺物（第31図）

暗灰褐色土

土師器

坏（1） 口径は16.4cmに復元される口縁から体部の破片資料で、内外面とも回転ナデが施される。胎土には白雲母が含まれ、暗橙色～黄橙色を呈する。

碗c（2） 高台径が8.4cmに復元される体部から底部の破片資料で、器面は摩耗が著しく調整は不明である。胎土には白雲母が少量含まれ、橙色を呈するが、全体に灰色を帯びる。

灰釉陶器

碗または皿（3） 高台径が8.4cmに復元される体部から底部の破片資料である。胎土は明青灰色～灰白色を呈し、灰白色に発色する釉が施される。

段皿（4） 口径は17.4cmに復元され、口縁部と体部の境には段を有する。胎土は明青灰色～灰白色を呈し、灰白色に発色する釉が施される。

230SX019出土遺物（第31図）

明灰色土

土師器

皿（1） 口縁部小破片。内外面とも回転ナデが施され、胎土に白雲母が少量含まれ、橙色を呈する。

230SX023出土遺物（第31図）

暗灰色土

須恵器

風字硯（1） 二面硯と考えられる。中央部の境縁はほぼ遺存し、現存長13.1cm、現存幅6.8cm、器高3.8cmを測る。焼成は良好で、灰色を呈する。横田Ⅱ類である。

土師器

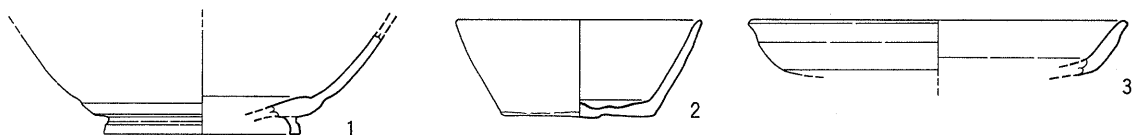
坏（2） 口縁部の小破片で、器面の摩耗が著しく、調整は不明である。橙色を呈する。

230SX034出土遺物（第31図）

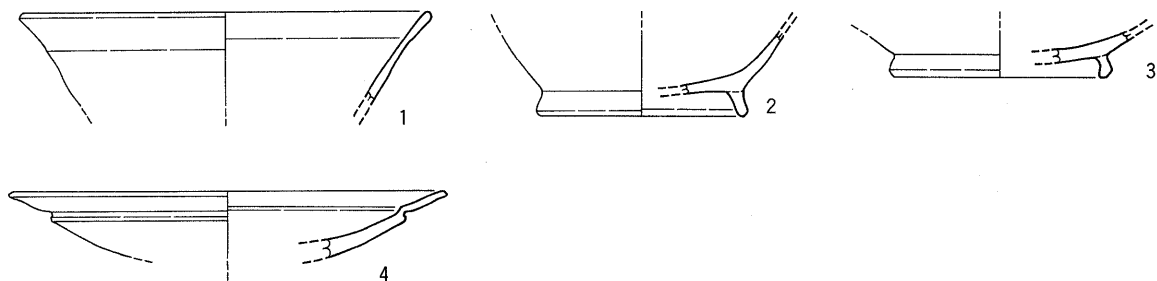
暗灰色土

土師器

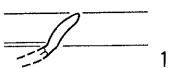
230SX061明灰色土



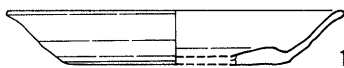
230SX070暗灰褐色土



230SX019明灰色土



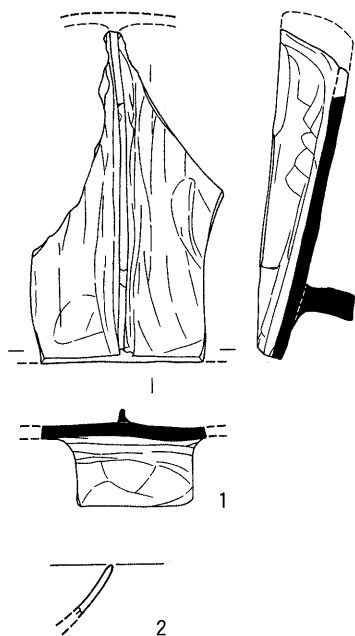
230SX034暗灰色土



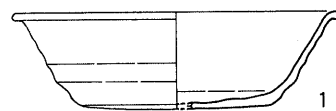
230SX039明灰色土



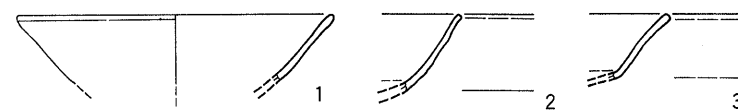
230SX023暗灰色土



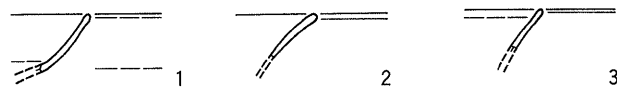
230SX074暗灰色土



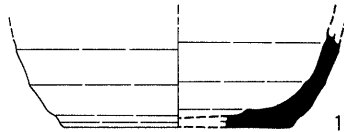
230SX078暗灰色土



230SX098暗灰色土



230SX113灰白色土



0 10cm

第31图 230SX061·070·019·023·034·039·074·078·098·113出土遺物

坏 a (1) 口径13.4cm、器高2.1cm、底径9.0cmに復元される。内外面とも体部は回転ナデ、内面の底部はナデが施され、外面の底部は回転ヘラ切りからナデ調整される。胎土には白雲母が微量含まれ、淡黄橙色を呈する。

230SX039出土遺物 (第31図)

明灰色土

灰釉陶器

碗 (1) 高台径は7.4cmに復元される底部の破片資料である。胎土は灰黄色を呈し、灰緑色に発色する釉を施す。内面の底部には重ね焼きの痕跡が観察される。

230SX048出土遺物 (図版10)

褐灰色土

瓦類

平瓦 写真 (図版10) に掲載した。文字瓦 XV 類であり、「大」の文字が2ヵ所に認められる。

230SX074出土遺物 (第31図)

暗灰色土

土師器

坏 a (1) 口径13.0cm、器高3.8cm、底径7.6cmに復元され、内外面とも体部は回転ナデが施され、内面底部は不定方向のナデ、外面底部は回転ヘラ切りからナデ調整される。淡黄橙色～淡黄色を呈する。

230SX078出土遺物 (第31図)

暗灰色土

土師器

坏 (1～3) いずれも口縁から体部の小破片で、器面の摩耗が著しく調整は不明である。1は口径12.6cmに復元され、黒灰色を呈する。2は胎土に白雲母が少量含まれ、淡黄橙色を呈する。3は黄灰色～灰色である。

230SX098出土遺物 (第31図)

暗灰色土

土師器

坏 (1～3) いずれも口縁から体部の小破片で、器面の摩耗が著しく調整は不明である。1は胎土に白雲母が多く含まれ、淡橙色～橙色を呈する。2は胎土に白雲母が少量含まれ、淡黄橙色を呈する。3は淡黄色である。

230SX113出土遺物 (第31図)

灰白色土

須恵器

壺 (1) 胴部下位から底部の破片資料で、底径は9.0cmに復元される。胴部は回転ナデが施され、外面の底部は回転ヘラ切りとなる。灰白色を呈する。

6) 調査区内出土遺物

表土出土遺物 (第32図、図版10)

ここに報告する緑釉陶器平瓶の大半は、表土の掘削中に確認されたコンクリート擁壁の取り壊しの際に発見されたものである。復元および接合作業中に、たまり状遺構 (230SX018) の褐灰色土と小穴 (230SX032) の褐色土から出土した資料と接合した。本来はどちらかの遺構に帰属するものと考えられるが、正確な出土位置が不明であることから、ここでは表土出土遺物として説明する。

緑釉陶器

平瓶 (1) 胴部から底部にかけての資料で、底径は14.8cmを測る。外面の底部は回転ヘラ切りが施される。胎土は淡黄色を呈し、緑色に発色する釉を施し、光沢がある。部分的に釉は赤色に変色する。防長産と考えられる。

灰釉陶器

皿 (2) 口縁から体部の破片資料で、口径は14.0cmに復元される。胎土は明青灰色を呈し、淡黄緑色に発色する釉が施されている。東海産と考えられる。

灰色土出土遺物 (第32図)

土師器

蓋 3 (1) 口縁部の小破片である。内外面とも回転ナデが施され、淡橙色を呈する。

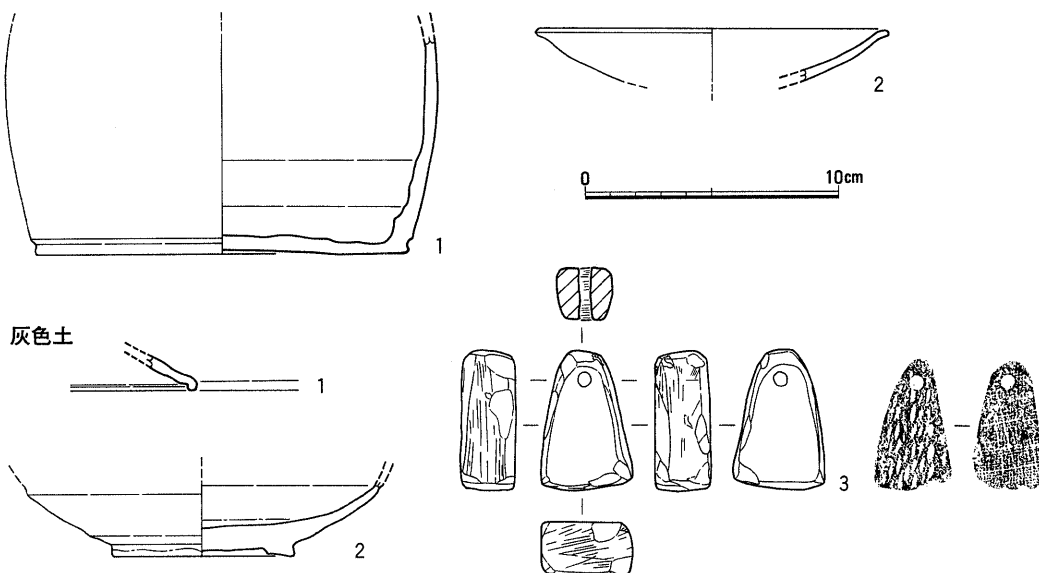
緑釉陶器

碗 (2) 体部から底部にかけての破片資料で、高台径は7.0cmに復元される。器面は摩耗し、釉の剥離が著しい。削り出し高台で、内面の底部には重ね焼き痕が観察される。胎土は灰色を呈し、淡黄色に発色する釉を施している。京都産と考えられる。

土製品

権 (3) 縄目叩きの瓦を転用した製品で、完形品である。側面と底面は研磨により成形され、全長5.6cm、最大幅3.65cm、厚さ2.1cm、重量48.8g、孔径0.6cmを測る。

表土



第32図 調査区内出土遺物 (1)

褐色土出土遺物（第33図）

須恵器

蓋 c（1） 天井部の破片資料で、外面は回転ヘラケズリ、つまみ部は回転ナデが施され、内面は回転ナデが行われる。つまみ部は暗橙色、外面は灰色、内面は灰褐色を呈する。

蓋 c 1（2） 口径は13.4cmに復元され、外面の天井部は回転ヘラ削り、口縁部は回転ナデが施され、内面は回転ナデが行われる。外面は灰黄色、内面は淡青灰色を呈する。

蓋 1（3～6） 3は外面の天井部は回転ヘラ削り、口縁部は回転ナデが施され、内面は回転ナデが行われる。口径は13.3cmに復元され、灰白色を呈する。4～6は口縁部の小破片で、回転ナデが施される。4は外面に自然釉が付着し、還元が不良で、外面は灰白色、内面は青灰色を呈する。5も還元が不良で、外面は青灰色、内面は暗赤灰色を呈する。6は還元が良好で、灰色を呈する。

蓋 3（7～9） いずれも口縁部の小破片である。7の外面は回転ヘラ削りおよび回転ナデが施され、内面は回転ナデ調整される。灰色を呈する。8・9は内外面とも回転ナデが施され、8の外面は暗灰色、内面は淡灰色、9は灰色を呈する。

坏 a（10） 口径13.2cm、器高3.8cm、底径9.2cmに復元される。外面の底部は回転ヘラ切りで、それ以外は回転ナデ調整となる。還元は良好で、黒灰色を呈する。

坏 c（11～14） 11の高台径は8.0cm、12の高台径は8.6cmに復元され、いずれも灰色を呈する。11の外面の底部は回転ヘラ切りから高台が貼り付けられ、体部は回転ナデが施される。12の外面の底部は回転ナデから高台が貼り付けられ、体部は回転ナデが施される。13・14は体部から底部にかけての小破片で、体部は回転ナデが施されるが、14の外面は器面が摩耗し、調整は不明瞭である。13の外面は暗灰色、内面は淡青灰色を呈し、14の外面は暗灰色、内面は青灰色となる。

鉢（15） 口縁部の小破片である。外面は回転ナデとヘラ削りが施され、内面は横ナデから不定方向のナデが行われる。胎土には粘土のつなぎ目が観察され、外面は暗灰色、内面は灰白色を呈する。

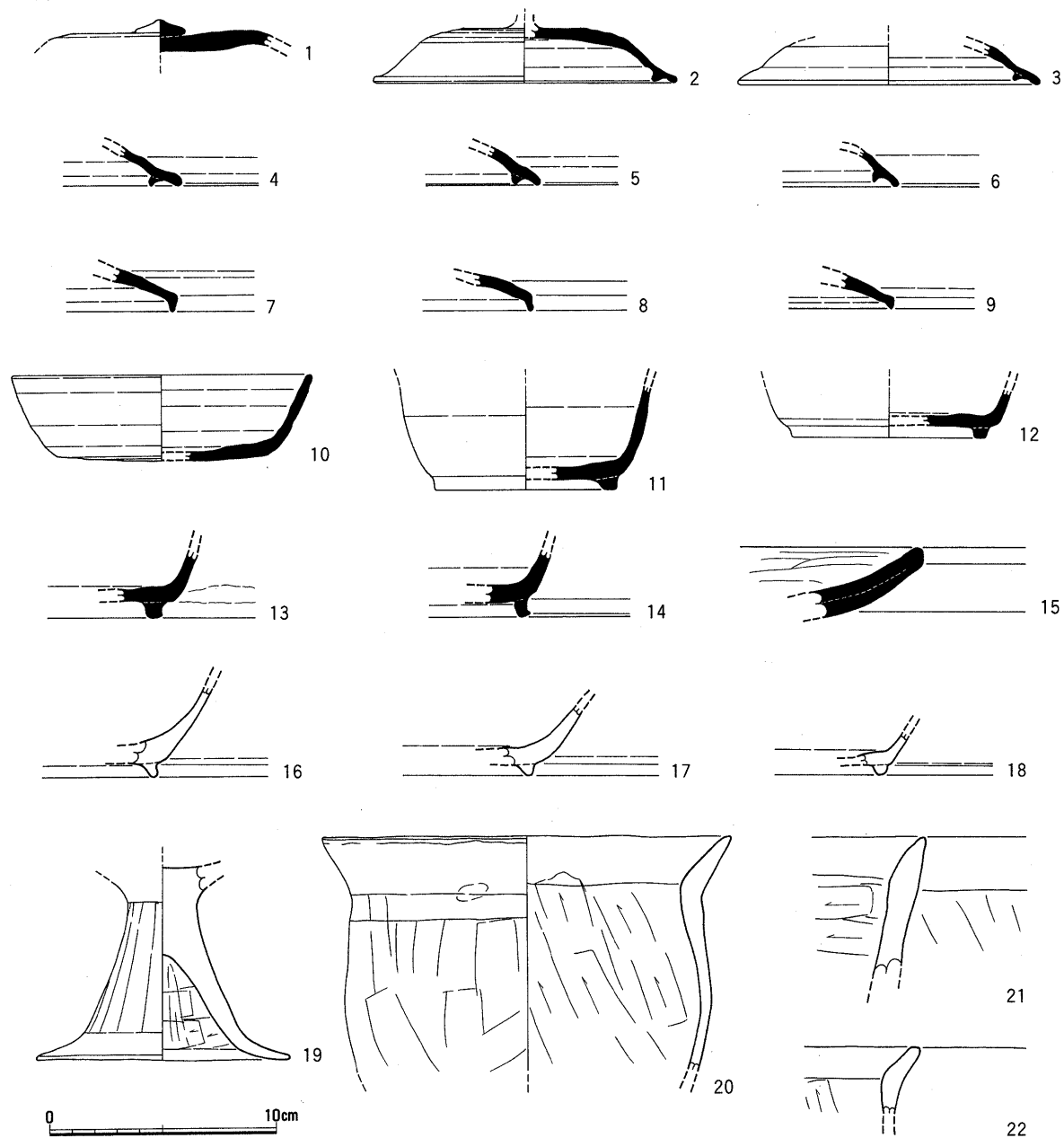
土師器

坏 c（16～18） いずれも体部から底部にかけての小破片である。16・17は器面の摩耗が著しく調整は不明、18は回転ナデが施される。16は胎土に白雲母が多く含まれ、濃橙色であるが、外面の底部は灰色となる。17は胎土に白雲母がやや多く含まれ、橙色を呈する。18は白雲母が微量含まれ、外面は濃橙色、内面は橙色を呈する。

高坏（19） 底径が16.2cmに復元される脚部の資料である。内外面とも脚柱部はヘラ削り、裾部は横ナデが施され、橙色を呈する。

甕（20～22） 20の口径は18.0cmに復元され、内外面とも口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削りが施されるが、外面の調整は不明瞭である。橙色を呈する。21・22は口縁から胴部にかけての小破片である。21は口縁部は横ナデ、外面の胴部はヘラナデ、内面はヘラ削りが施される。胎土には白雲母が少量含まれ、外面は橙色、内面は暗黄橙色を呈する。22は口縁部は横ナデ、胴部の内面は削り調整が行われ、橙色を呈する。

褐色土



第33図 調査区内出土遺物（2）

VII. 小 結

今回の大宰府条坊跡第230次調査は、限られた範囲であったが、2面の生活面と整地層が確認された。第Ⅰ面では奈良時代後期から平安時代の遺構群が検出され、整地層を挟んだ第Ⅱ面では古墳時代後期から奈良時代前半の遺構が発見された。以下、ここでは各面で検出された遺構を列記し、主な遺構を中心に、現時点で考えられる幾つかの点を整理したい。

第Ⅰ面で検出された遺構は、溝6条（SD003・010・015・025・030・075）、掘立柱建物1棟（SB050）、柵列2条（SA020・080）、井戸4基（SE002・005・006・055）、土坑7基（SK004・011・040・041・045・060・065）、集石状遺構1基（SX035）、たまり状遺構、それに小穴群である。また、第Ⅱ面からは溝1条（SD112）、掘立柱建物3棟（SB090・100・110）、土坑1基（SK095）、小穴群が発見された。

今次調査で検出された最古の遺構は、第Ⅱ面の土坑（SK095）で、遺構面の重複および出土遺物から7世紀後半（大宰府ⅠA期）には埋没したと考えられる。同様に、第Ⅱ面から検出された掘立柱建物3棟は、上面に形成された整地層との関連から奈良前半（大宰府Ⅱ期）には埋没したと考えられる。その中でSB100とSB110は軸線がほぼ揃い、加えて重複する柱穴も認められることから建て替えが行われたと考えられる。また、SB090は調査区の制約や攪乱の影響によって柱穴2本の検出ではあるが、柱穴aからは根固め石と考えられる礫が出土し、上述の2棟と約1.5mの間隔で並列する状況が窺えることから掘立柱建物と推定している。出土遺物は、いずれの掘立柱建物も希薄であるが、SB100からは須恵器の蓋3が出土している。規模の判明したSB100は梁行2間（3.6m・12尺）、桁行3間（3.9m・13尺）の側柱建物であり、鷺田川の氾濫低地に位置することから整地事業時の建物である可能性が指摘される。

次に、第Ⅱ面の上に形成された整地層は、褐色土で構成され、内部からは須恵器の蓋c・蓋1・蓋3・坏a・坏c、土師器の坏c・高坏・甕などが出土している。ここでは比較的出土量が多く、型式学的な変化の比較的捉えやすい須恵器の供膳具の特徴を述べ、整地層の形成時期について検討をしたい。

まず蓋cは扁平な擬宝珠形のつまみを有し、天井部は平坦な形状を呈する。また蓋1のかえりは口縁端部より内側に後退し、蓋3の口縁部形態は断面が三角形を呈する。坏aは体部の丸味を下端に有し、坏cの高台の断面は四角形に近い低高台である。以上の形態的特徴から整地層には7世紀末（大宰府ⅠB期）から8世紀前半（大宰府Ⅱ期）の遺物が包含され、整地層を掘り込んで奈良後半のたまり状遺構（SX054）が構築されていることから、整地層の形成は奈良前半（大宰府Ⅱ期）から後半（大宰府Ⅴ期）の間と推定される。

最後に、整地層上の第Ⅰ面についてみると、東西路（条路）の南側側溝（SD025）と北側側溝（SD030）、それに南北路（坊路）の西側側溝（SD003・015）が検出されている。条路側溝の主軸方位は、SD025がN-83°-W、SD030はN-91°-Eを指針し、北側側溝（SD030）は政庁中軸線（狭川 1996・1998）に対してほぼ直交するが、南側側溝（SD025）は西側が北に振れ直交しない点が問題となる。それは調査範囲が狭小で東西7.75mの検出にとどまったこと、東側には坊路の西側側溝が検出され、交差点が近接することが影響していると考えられる。両側溝の心々間の距離は、8.4m（28尺）～8.7m（29尺）を測り、過去の調査例（狭川 1996・1998、太宰府市史編纂委員会 1992）と比較すると、その規模はかなり大きく、東側約500mの地点で検出された条坊跡第212次調査（香川 2001）の条路（十一条）と規模はほぼ同じであり、十一条の東西路（条路）は相対的に広がったと考えられる。

また、南北路（坊路）の西側側溝は、SD003とSD015が重複して検出されたことから、改修された可能性が考えられる。主軸方位はそれぞれN-3°-WとN-2°-Eを指し、政庁中軸線とほぼ平行関係にある。その西側に構築された溝（SD010）の南側は、南北路（坊路）の西側側溝（SD003・015）と約

1.0mの間隔をおいてほぼ平行関係にあることから、道路側溝の可能性を考える必要がある。東西路（条路）の南側側溝（SD025）は、整地層を掘り込んで構築されているが、平安中期（大宰府Ⅸ～Ⅹ期）の井戸（SE002・006）に壊されている。また、道路側溝とは直接的な切り合い関係はないものの、道路面と推定される範囲に奈良後半（大宰府Ⅴ期）のSX054、平安前期（大宰府Ⅵb期）のSX007、同（大宰府Ⅶ期）SX053が構築されている。なお、道路側溝の最終的な埋没時期は出土遺物から平安前期末から中期初頭（大宰府Ⅷ期）と考えられる。

次に、平安前期の所産と推定される掘立柱建物（SB050）は、梁行2間（3.0m・10尺）、桁行3間（5.4m・18尺）の側柱建物で、東西路（条路）の北側側溝（SD030）の推定線と約1.3mの間隔で並行関係にあることから町家を構成する1棟であったと考えられる。

井戸は、いずれも平安中期の所産と考えられる。調査区の南東側に展開する2基（SE002・006）は大宰府Ⅸ～Ⅹ期と推定され、出土遺物からSE002がやや先行すると考えられる。北西端の2基（SE005・055）については、調査区の制約から完掘に至っておらず、明確な帰属時期は捉えきれていないが、遺構間の切り合い関係からSE005が先行すると推定される。

以上、大宰府条坊跡第230次調査で検出された2面の主な遺構と整地層について見てきた。地点的な調査の制約から十分な検討を行うことはできなかったが、大宰府条坊跡を考える上では、貴重な資料を提示できたと考える。

引用・参考文献

太宰府市史編纂委員会 1992 『太宰府市史 考古資料編』太宰府市

中島恒次郎他 1996 『大宰府条坊跡Ⅸ』太宰府市教育委員会

狭川真一他 1998 『大宰府条坊跡Ⅹ』太宰府市教育委員会

香川達郎 2001 『大宰府条坊跡ⅩⅧ―地区道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所

付編 大宰府条坊跡230次調査出土遺物の蛍光X線分析

1. 目的

本調査より出土した材質不明の資料2点について、それぞれ以下の目的で蛍光X線による材質の同定を試みた。

- a : S-25 暗灰色土 金属製品 鉛製品か否かの判断
- b : S-40 暗灰色土 用途不明遺物 材質分析

2. 分析方法

まず資料を実体顕微鏡などを用いて肉眼観察した後、太宰府市文化ふれあい館設置の微小部エネルギー分散型蛍光X線分析装置（TREX650（株）テクノス社製）を用いて、各資料について定性分析を行った。分析条件は次のとおりである。

（分析条件）

X線管電圧：40KV X線管電流：3.00mA コリメーター：0.30mm フィルター：なし
測定時間：300秒 分析環境：真空

3. 結果

それぞれの分析結果を以下に記す。

a

肉眼観察では、表面に見られる白色粉状の生成物や、重量感等から鉛成分が含まれている事が十分に予想された（写真1）。銀灰色部分の分析の結果、鉛、硫黄が検出され、鉛製品である事が確認された（図1）。イリジウムの存在についてはその理由が明らかでない。

b

肉眼観察では、約8mmの厚みの黒褐色の平らな層と、それに密着する、黒褐色から黄土色へと徐々に色味が変化する襞状を呈する層の2層が確認できる（写真2）。外観や重量から考えて有機物の可能性が高かったが、層毎に分析を行った結果検出された元素はいずれも、鉄、カルシウム、マンガン、ケイ素等で層の違いによる差はほとんど無く、これらは表面に付着していた土の成分と考えられる。この遺物そのものの材質を示す元素は特定できなかった（図2・3）。

この遺物がまだ湿った状態にあった時には気付かなかったが、乾燥した状態では石油系の刺激臭を放っている事がわかり、有機化合物の可能性が高いと考えられる。この化合物の材質・構造特定のためには別の分析を行う必要があり、出土状況を考慮した上で遺物の性格を判断しなければならないだろう。



写真1



写真2

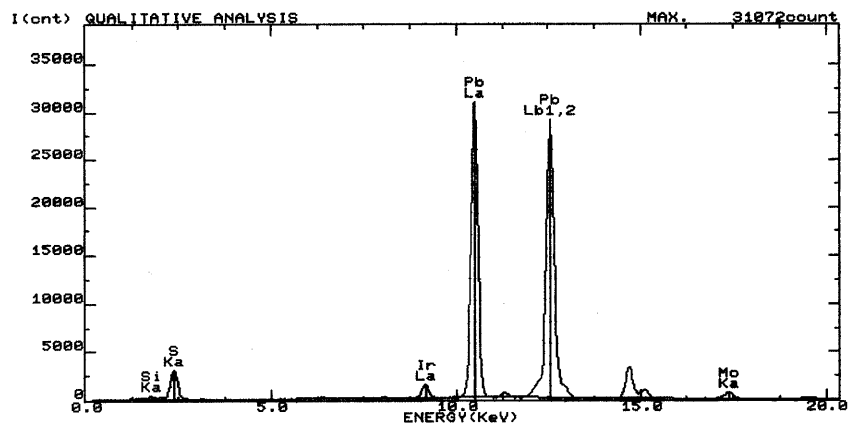


図1 分析結果：a

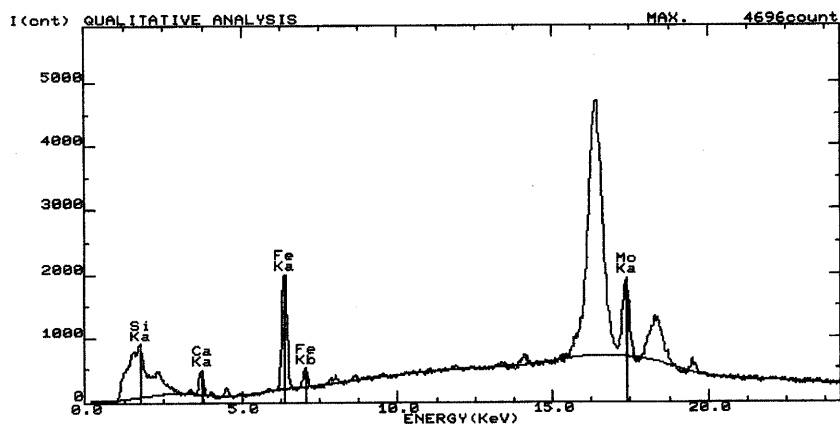


図2 分析結果：b（平面部分）

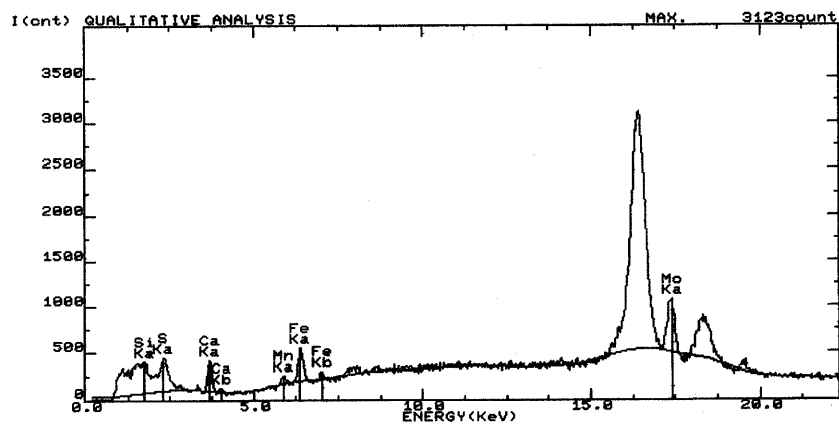
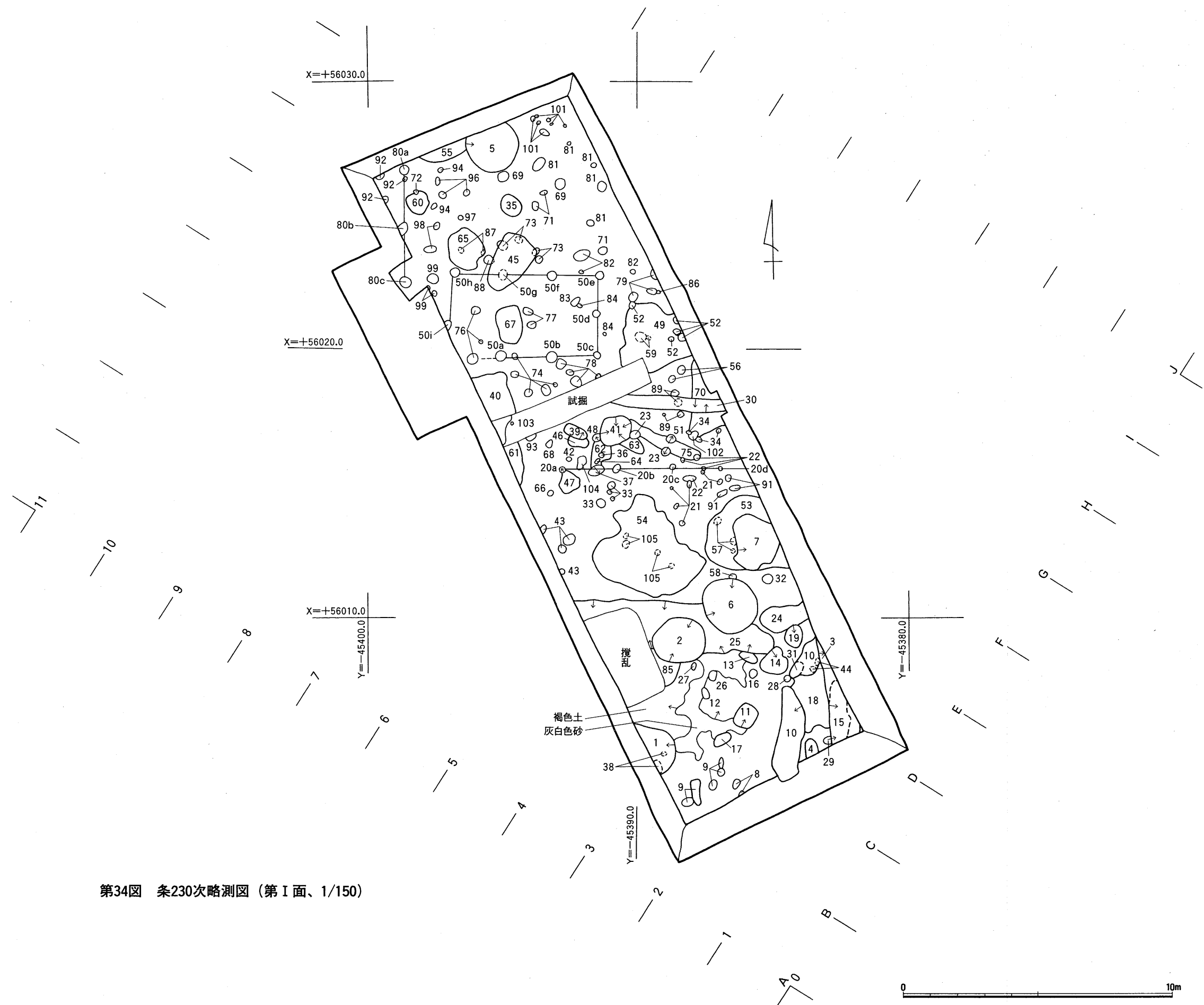


図3 分析結果：b（變狀部分）



第34図 条230次略測図 (第I面、1/150)



第35図 条230次略測図 (第II面、1/150)

大宰府条坊跡第230次調査 遺構番号台帳(1)

S-番号	遺構番号	種 別	備 考	埋積土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時 期	地区番号
1	230SX001	たまり		明灰色土	38→1	平安前期(Ⅷ期)	B 2・3
2	230SE002	井 戸		明褐色土→黒褐色粘土 →暗灰色土→褐色土	85→25→2	平安前期～中期(Ⅸ期) ・後期	C・D 3
3	230SD003	溝	道路側溝	明褐色土→明灰色土	10・15・18・29→ 3	平安中期・後期	D 1
4	230SK004	土 坑		褐色土→暗灰色土→明 灰色土		平安前期	C 1
5	230SE005	井 戸		灰褐色粘土→暗灰色土 →褐色土→褐色土→ 黒褐色土→暗灰色土	55→5	平安中期・後期	G・H 8
6	230SE006	井 戸	井戸枠は板材・曲物	暗灰色砂→暗灰褐色土 →黒色粘土→黒灰色土 →暗灰色土	25・58→6	平安中期(Ⅸ<Ⅹ期) ・後期(Ⅺ期)	D 2・3
7	230SX007	たまり	焼土を多量に含む	赤褐色土	57→53→7	平安前期(Ⅵb期)	E 3
8	230SX008	小穴群	3 穴	明灰色土	9→8	奈良	B 1
9		小穴群	4 穴	明灰色土	9→8	奈良・平安	B 2
10	230SD010	溝		灰褐色土→暗灰色土	18・31→10	平安前期	C 1～D 2
11	230SK011	土 坑		明灰色土		奈良後期 平安後期混 じり	C 2
12		小 穴		明灰色土		平安前期～	C 2
13		小 穴		暗灰色土	25→13	平安前期～	D 2
14		たまり		明灰色土	25→14	平安中期～	D 2
15	230SD015	溝	道路側溝	灰褐色土	15→3		D 1
16		小 穴		明灰色土		平安前期～	D 2
17		小 穴		明灰色土		平安前期～	C 2
18	230SX018	たまり		褐色土	18→10→3	平安前期～	C・D 1
19	230SX019	小 穴		明褐色土→明灰色土	24→19	奈良後期・平安前期～	D 2
20	230SA020	柵 列	21(2穴)、37(1穴)、 42(1穴)はS20に変更	暗灰色土・明灰色土	47→20		E 4～D 5
21		小穴群	8穴 2穴は20c・dに 変更	暗灰色土	22→21	平安前期～	E 4
22		小穴群	4 穴	明灰色土	75→22→21	平安前期～	F 4
23	230SX023	小穴群	2 穴 焼土を多く含む	暗灰色土	63・75→41→23	平安	E 4・5
24	230SX024	たまり		暗灰色土	24→19	平安前期(Ⅵb期)～	D・E 2
25	230SD025	溝	道路側溝	暗灰色土	85→25→2・6・ 13・14	平安前期(Ⅷ期)	D 2～C 4
26		小 穴		明灰色土		平安前期(Ⅵb期)～	C 2
27		小 穴		明灰色土		平安前期～	C 3
28		小 穴		明灰色土		平安前期(Ⅵb期)～	D 2
29		小 穴		暗灰色土	29→3	平安前期(Ⅵb期)～	C 1
30	230SD030	溝	道路側溝	暗灰色土	70・89→30	平安前期(Ⅷ期)	F 4～E 5
31		小 穴		明褐色土	31→10		D 2
32	230SX032	小 穴	焼土を多量に含む	褐色土		平安前期～	E 2
33		小穴群	4 穴	暗灰色土		平安前期～	D 5
34	230SX034	小穴群	3 穴 焼土を含む	暗灰色土	70→102→34	平安前期(Ⅶ期)～	F 4
35	230SX035	集石状遺構	礫は花崗岩	褐色土		奈良	G 7・8

大宰府条坊跡第230次調査 遺構番号台帳(2)

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋積土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	地区番号
36		小 穴		暗灰色土	62→64→36		E 5
37		小穴群	2 穴 1 穴は20bに変更	明灰色土	62→37	平安前期 (Ⅵ期) ~	E 5
38	230SX038	小穴群	2 穴	明褐色土	38→1	平安後期~	B 2
39	230SX039	小 穴		明灰色土	46→39	平安前期~	E 5・6
40	230SK040	土 坑		暗灰色土→黒灰色土→ 暗灰色土	試掘坑により61と の新旧は不明	平安前期 (Ⅶ期)	E 6・7
41	230SK041	土 坑		明灰色土	48・62・63・75→ 41→23	平安前期 (Ⅶ期)	E 5
42		小穴群	2 穴 1 穴は20aに変更	明灰色土		平安前期~	D 5
43		小穴群	4 穴	明灰色土		平安前期~	D 5
44		小穴群	2 穴	明褐色土	44→10		D 1
45	230SK045	土 坑		暗灰色土	50・73・88→45	平安前期 (Ⅶ期)	F・G 7
46	230SX046	小 穴		暗灰色土	46→39	平安前期 (Ⅶ期) ~	E 5
47		小 穴		褐灰色土	47→20	平安前期 (Ⅶ期) ~	D 5
48	230SX048	小 穴		褐灰色土	62→48→41	平安	E 5
49	230SX049	たまり		暗灰褐色土	59→49→52	平安前期 (Ⅵb期)	F・G 5・6
50	230SB050	掘立柱建物	67・74・76・77・83・84 とも重複関係にあるが直 接的な切り合いはない	明灰色土→暗灰色土	50→45	平安前期	F 6~8
51		小 穴		明灰色土	75→51	平安前期 (Ⅶ期) ~	E 4
52	230SX052	小穴群	5 穴	暗灰褐色土	49・79→52	平安前期~	F 5
53	230SX053	たまり		黒灰色土→暗灰色土	57→53→7	平安前期 (Ⅶ期)	E 3
54	230SX054	たまり		暗灰色土	105→54	奈良後半 (Ⅴ期)	D 3・4
55	230SE055	井 戸	調査区の端のため底面ま で調査はできていない	暗灰色土	55→5	平安中期	G 8・9
56		小穴群	2 穴	明灰色土		平安前期~	F 5
57	230SX057	小穴群	3 穴	明灰色土	57→53→7	平安前期~	E 3
58	230SX058	小 穴		明灰色土	58→6	平安前期 (Ⅶ期)	D 3
59	230SX059	小穴群	2 穴	灰褐色土	59→49		F 5
60	230SK060	土 坑		明灰色土	60→72	奈良後半	F 8・9
61	230SX061	たまり		明灰色土	試掘坑により40と の新旧は不明	奈良後半	D 6
62	230SX062	たまり		明灰色土	62→36・37・41・ 48・64	平安前期~	E 5
63	230SX063	たまり		明灰色土	63→41→23	平安前期~	E 5
64		小 穴		明灰色土	62→64→36		E 5
65	230SK065	土 坑		暗灰色土	87→65	平安中期	F 8
66	230SX066	小 穴	礫が出土 (礫は花崗岩)	明褐色土			D 5
67		たまり		明灰色土		平安前期	F 7
68		小 穴		明灰色土			E 6
69		小穴群	2 穴	青灰色土		平安前期~	G 8
70	230SX070	たまり		暗灰褐色土	70→30・34・102	平安前期	F 4・5
71		小穴群	3 穴	暗灰褐色土		平安	G 7
72	230SX072	小 穴		黒褐色土	60→72	平安前期 (Ⅶ期) ~	F 9
73	230SX073	小穴群	4 穴	暗灰色土	73→45	平安前期	F 7

大宰府条坊跡第230次調査 遺構番号台帳(3)

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋積土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	地区番号
74	230SX074	小穴群	5穴	暗灰色土		平安前期Ⅶ～Ⅷ期	E 6・7
75	230SD075	溝		明灰色土	75→22・23・41・51	平安前期(Ⅶb期)	E 4・5
76		小穴群	3穴	暗灰色土		平安前期～	E 7
77		小穴群	2穴	暗灰色土		平安前期～	F 7
78	230SX078	小穴群	4穴	暗灰色土		平安前期～	E・F 6
79		小穴群	4穴	明灰色土	86→79→52	平安	G 6
80	230SA080	柵列	掘立柱建物の可能性有り	暗灰色土			E 8～G 9
81		小穴群	4穴	暗青灰色土		平安前期(Ⅶ期)～	H 7
82		小穴群	3穴	灰色土		平安前期～	G 6
83		小穴		暗灰色土	84→83	平安前期(Ⅶ期)～	F 6
84		小穴群	2穴	暗灰色土	84→83	平安前期(Ⅶ～Ⅷ期)	F 6
85	230SX085	小穴		明灰色土	85→25→2		C 3
86		小穴		明灰色土	86→79	奈良～	G 5
87	230SX087	小穴群	2穴	暗灰色土	87→65	奈良～	F 8
88		小穴		暗灰褐色土	88→45		F 7
89		小穴群	4穴	暗灰褐色土	89→30	平安中期～	F 5
90	230SB090	掘立柱建物	第Ⅱ面 2穴の検出で、 1穴から根固め石が出土	灰黄褐色土→灰褐色土			D 4
91		小穴群	3穴	明灰色土		平安前期～	E 3
92		小穴群	4穴 1穴を80aに変更	灰褐色土		平安～	F 9
93		小穴		明灰色土		奈良～	D 6
94		小穴群	2穴	暗灰色土		平安前期(Ⅶ期)～	G 9
95	230SK095	土坑	第Ⅱ面	灰白色土		古墳後期(ⅠA期)～	F 4・5
96		小穴群	3穴	明灰色土		平安前期～	G 8
97		小穴		青灰色土			F 8
98	230SX098	小穴群	3穴 1穴を80bに変更	暗灰色土		平安～	F 8
99		小穴群	4穴 1穴を80cに変更	暗灰色土		平安～	F 8
100	230SB100	掘立柱建物	第Ⅱ面 110と重複	灰黄褐色土→灰褐色土	110→100	奈良前期	D・E 4～6
101		小穴群	7穴	暗灰色土		平安前期(Ⅶ期)～	H 8
102	230SX102	小穴		明灰色土	70→102→34		F 4
103		小穴		黒灰色土		平安前期～	E 6
104		小穴		明灰色土			E 5
105	230SX105	小穴群	4穴	暗灰色土	105→54	奈良後半	D 4
106		小穴群	第Ⅱ面 3穴	灰色土			F 5
107		小穴群	第Ⅱ面 4穴	灰褐色土			G 7
108		小穴	第Ⅱ面	灰褐色土(砂質)			E 6
109		小穴	第Ⅱ面	灰白色土			E 7
110	230SB110	掘立柱建物	第Ⅱ面 100と重複	灰黄褐色土→灰褐色土	110→100		D・E 4～6
111		小穴	第Ⅱ面	灰色土			D 6
112	230SD112	溝	第Ⅱ面	灰褐色土(砂質)	112→40		D 6～E 7
113	230SX113	自然傾斜	第Ⅱ面 自然傾斜と推定	灰白色土	113→40	奈良～	D 6
114		自然傾斜	第Ⅱ面 自然傾斜と推定	灰白色土	114→100		D 6

大宰府条坊跡第230次調査 出土遺物一覧表（1）

S-1 明灰色土

須恵器	坏c、高坏、小壺、甕
土師器	碗c1、碗c2、皿c、甕b、煮炊具
黒色土器A	碗
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（1）
瓦類	平瓦（縄目）
石製品	面子？

S-2 褐灰色土

須恵器	蓋b、蓋c、蓋3、坏c、坏×皿、高坏、壺×蓋×高坏、壺、甕
土師器	蓋3、坏d、丸底坏a、丸底坏、碗c、丸碗、小皿a1、小皿2、小皿（へう）、皿、高坏、甕、甕b（叩き）、把手付甕、把手、煮炊具、破片
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c、破片
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（3）、Ⅱ（1）、Ⅱ-2（1）、破片：Ⅰ（1）、Ⅱ（1）
青磁（未分類）	破片（2）
瓦類	平瓦（縄目、格子）、丸瓦、破片（格子）
緑釉陶器	碗×皿（京都）（1）、破片（防長）（1）
白磁	皿：Ⅵ-1b（1）、Ⅶ-2a（1）、破片：Ⅱ系（1）
須恵質（輸入）	朝鮮系陶器甕（2）
その他	焼土塊

S-2 暗灰色土

須恵器	蓋c、甕
土師器	碗c、小皿a2、甕b、煮炊具
黒色土器A	碗c
越州窯系青磁	水注破片：Ⅰ（1）
瓦類	平瓦（縄目）
緑釉陶器	破片（近江）（1）
白磁	破片：Ⅰ（1）
須恵質（輸入）	朝鮮系陶器甕（1）

S-2 黒褐色粘土

須恵器	蓋c、坏、壺、甕、鉢b
土師器	碗c、碗c2、小皿a1、供膳具、煮炊具
黒色土器A	供膳具
黒色土器B	鉢
越州窯系青磁	碗：Ⅰ-5（1）、Ⅱ（1）、破片：Ⅱ（2）
瓦類	丸瓦（縄目、格子）
石製品	基石
白磁	破片：Ⅰ（1）

S-2 明褐色土

須恵器	蓋3、坏、捏鉢（篠）、壺c、壺d、甕
土師器	碗c2、小皿a1、甕b
黒色土器B	碗、鉢
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（2）、Ⅰ-2（1）、皿：Ⅰ（2）、破片：Ⅰ（1）
瓦類	平瓦（格子）、丸瓦（格子）
石製品	砥石、破片（滑石）
緑釉陶器	碗（近江）（1）
灰釉陶器	破片（1）
中国陶器	破片（1）

S-3 明灰色土

須恵器	蓋c、蓋3、坏a、坏c、皿×坏、甕
土師器	坏a、坏c、坏×皿、碗c1、皿、甕a、甕a（筑後）、甕（在地）、甕
製塩土器	煎熬土器
黒色土器A	碗c、甕
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	碗：Ⅱ（1）、Ⅲb（1）、壺：Ⅱ系（1）、破片：Ⅰ（2）
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（格子）、破片（縄目、格子）
石製品	砥石
白磁	碗：Ⅱ（1）、Ⅳ-1（1）、Ⅳb（1）、破片（1）

S-3 明褐色土

須恵器	壺e
土師器	坏a、坏a×丸碗、碗c、煮炊具
瓦類	破片（縄目）

S-4 暗灰色土

土師器	坏、甕
-----	-----

S-4 褐色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	坏
緑釉陶器	破片（東海）（1）

S-5 黒褐色土

須恵器	蓋3、高坏、甕
土師器	坏a、小皿、把手、煮炊具
黒色土器A	碗、破片
越州窯系青磁	碗：Ⅰ-2（1）、皿：Ⅰ（1）、破片：Ⅰ（1）
瓦類	破片（縄目）
その他	焼土塊

S-5 褐灰色土

須恵器	蓋c、蓋3、坏c、甕
土師器	坏a、丸底坏a、碗c、甕a、甕b、甕
黒色土器A	碗、供膳具
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（1）、Ⅰ-5（1）、Ⅱ（1）、破片：Ⅰ（3）
瓦類	破片（縄目）
緑釉陶器	破片（京都）（1）、（東海）（2）、（不明）（1）
白磁	XI-1（1）
その他	焼土塊

S-5 暗灰色土

須恵器	蓋c、蓋1、蓋3、坏c、坏c×皿、壺、甕、把手
土師器	坏a、丸底坏a、坏c、碗c、皿c、皿、甕（在地、筑後）、甕
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗c、破片
越州窯系青磁	壺（1）、破片：Ⅰ（9）、Ⅱ（2）
瓦類	平瓦（縄目、格子）、丸瓦（縄目）
石製品	石鍋（滑石）
緑釉陶器	破片（近江）（1）、（不明）（1）
灰釉陶器	貯蔵具（1）、破片（3）
中国陶器	破片（3）
金属製品	鉄釘

S-5 灰褐色粘土

須恵器	高坏、甕
土師器	蓋3、甕
その他	焼土塊

S-6 暗灰色土

須恵器	蓋c、蓋3、坏c、坏、坏×皿、壺、甕
土師器	坏a、坏c、丸底坏a、丸底坏、碗c、小皿a1、小皿2、器台、甕a、甕b、甕、煮炊具
黒色土器A	碗c、甕
黒色土器B	碗c、碗
瓦器	碗
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（1）、Ⅱ（1）、破片：Ⅰ（1）
瓦類	平瓦（縄目、格子）、丸瓦（縄目）、破片（縄目）
石製品	基石、磨石
緑釉陶器	破片（京都）（1）
白磁	碗：Ⅳ（4）、Ⅳ-1b（1）、Ⅳ-b（2）
須恵質（輸入）	朝鮮系陶器（2）
金属製品	鉄釘、鉾滓
その他	焼土塊

S-6 黒灰色土

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	蓋c、坏、丸底坏a、碗c、小皿a1、器台、煮炊具
黒色土器B	碗c、破片
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（1）、坏：Ⅰ（1）、破片：Ⅰ（1）、Ⅱ（2）
瓦類	平瓦（縄目、格子）、丸瓦（縄目）
緑釉陶器	碗（近江）（1）、皿（東海）（1）、破片（東海）（1）
白磁	破片：華南（2）
中国陶器	破片（1）
須恵質（輸入）	朝鮮系陶器破片（1）
金属製品	鉄滓
その他	焼土塊

S-6 暗灰褐色土

須恵器	坏c、捏鉢（篠）、壺、甕
土師器	坏a、碗c、小皿a1、甕a、甕b、煮炊具
黒色土器A	破片
黒色土器B	碗
瓦類	丸瓦（格子）、破片（格子）
石製品	破片（滑石）
金属製品	鉄釘
土製品	用途不明

大宰府条坊跡第230次調査 出土遺物一覧表（2）

S-7 赤褐色土

須恵器	蓋3、蓋4、坏c、坏、壺、甕、鉢b
土師器	蓋3、坏a、坏d、皿a、煮炊具
黒色土器A	碗c、碗
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦
その他	焼土塊、壁

S-8 明灰色土

須恵器	坏
土師器	破片

S-9 明灰色土

須恵器	坏c、皿a、甕
土師器	蓋3、坏×小皿、甕a、甕

S-10 暗灰色土

須恵器	蓋c、蓋3、坏a、坏c、壺、甕
土師器	蓋c、碗c1、高坏、甕a
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗2
越州窯系青磁	碗：I（1）
瓦類	平瓦（格子）、破片（縄目、格子）
その他	土壁？

S-10 灰褐色土

須恵器	蓋4、壺
土師器	坏c、坏d、碗、皿a、甕a（在地、筑後）
製塩土器	破片
黒色土器A	碗c1、碗
越州窯系青磁	碗：I（1）
瓦類	平瓦（格子）、丸瓦（格子）
その他	焼土塊

S-11 明灰色土

須恵器	蓋、坏c、甕
土師器	蓋3、丸底坏、甕a
黒色土器A	碗c

S-12 明灰色土

土師器	坏
黒色土器A	坏、碗c

S-13 暗灰色土

須恵器	蓋3、坏c、壺×甕
土師器	甕a、供膳具
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦（縄目）
その他	焼土塊

S-14 明灰色土

須恵器	蓋3、壺a、甕
土師器	碗c、甕b、煮炊具
黒色土器A	碗c

S-16 明灰色土

土師器	坏a、甕a、甕破片
製塩土器	破片
黒色土器B	破片
瓦類	平瓦（縄目）

S-17 明灰色土

土師器	供膳具
-----	-----

S-18 褐色土

須恵器	蓋c、壺蓋、小坏a、坏c、甕
土師器	蓋3、碗c、甕b、甕（在地、筑後）、甕
製塩土器	煎熬土器、焼塩壺
瓦類	丸瓦、破片（縄目）
緑釉陶器	平瓶（防長）（1）
弥生土器	壺

S-19 明灰色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	蓋3、甕a、破片（筑後）
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片

S-19 明褐色土

須恵器	蓋、皿a、甕、供膳具
土師器	甕、供膳具

S-21 暗灰色土

須恵器	蓋3、蓋×高坏、甕、供膳具
土師器	坏a（ヘラ）、坏c、甕a、甕
黒色土器B	供膳具
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（縄目）
緑釉陶器	破片（防長？）（1）

S-22 明灰色土

須恵器	甕
土師器	坏a、坏c、甕
黒色土器A	供膳具
瓦類	破片（縄目）

S-23 暗灰色土

須恵器	蓋1、蓋3、甕、風字硯
土師器	坏a（ヘラ）、坏c、甕
その他	焼土塊

S-24 暗灰色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	坏a、坏c、碗c、甕
黒色土器A	破片
緑釉陶器	破片（京都）（1）

S-25 暗灰色土

須恵器	蓋c、蓋3、坏c、捏鉢（篠）、壺、甕
土師器	蓋b、坏a、丸底坏（混入）、碗c1、丸碗、皿、甕a、甕b、甕（筑後）
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗、破片
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	鉢破片：I（1）、破片：I（1）、II（1）
瓦類	平瓦（縄目、格子、文字VI-3）、丸瓦（格子）
石製品	碁石
緑釉陶器	碗（近江）（3）、皿（近江）（2）、皿（京都）（1）、破片（東海）（2）、（京都）（3）、（不明）（1）
灰釉陶器	破片（1）
金属製品	鉄釘、鉄滓、棒状鉄製品

S-26 明灰色土

土師器	供膳具、煮炊具（筑後）
-----	-------------

S-27 明灰色土

須恵器	甕、破片
土師器	供膳具、破片
黒色土器A	破片

S-28 明灰色土

土師器	甕a、供膳具
-----	--------

S-29 暗灰色土

土師器	高台
その他	焼土塊

S-30 暗灰色土

須恵器	蓋3、坏c、坏、壺、甕
土師器	坏a、碗c、小皿a1、煮炊具
黒色土器A	破片
黒色土器B	碗c、供膳具
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（縄目）、軒丸瓦、破片（縄目）
石製品	砥石
灰釉陶器	破片（1）
その他	焼土塊

S-31 明褐色土

須恵器	供膳具、貯蔵具
土師器	蓋3、坏a（ヘラ）、煮炊具

S-32 褐色土

須恵器	壺e、壺、甕
緑釉陶器	壺（防長）（1）

S-33 暗灰色土

須恵器	破片
土師器	甕a、供膳具
黒色土器A	破片

S-34 暗灰色土

須恵器	供膳具
土師器	坏a（ヘラ）

S-35 褐色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	供膳具

大宰府条坊跡第230次調査 出土遺物一覧表（3）

S-37 明灰色土

須恵器	供膳具
土師器	甕a、供膳具（ヘラ）
黒色土器A	供膳具

S-38 明褐色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	小皿a2、供膳具

S-39 明灰色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	甕、供膳具
黒色土器A	碗c
越州窯系青磁	破片：Ⅱ（1）
瓦類	平瓦（縄目）
灰釉陶器	碗（1）

S-40 暗灰色土

須恵器	蓋c、蓋1、蓋3、小壺蓋、蓋3×高坏、小坏c、坏c、坏身、壺、甕、鉢b
土師器	坏a、碗c1、碗c2、皿a、甕（精製、在地、筑後）、煮炊具
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗c1、甕
長沙窯系青磁	水注（1）
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（縄目）、軒丸瓦
石製品	碁石
緑釉陶器	碗（防長）（1）、（京都）（2）、破片（防長）（1）
灰釉陶器	碗（1）、壺（2）、破片（1）
土製品	用途不明
その他	焼土塊

S-40 黒灰色土

須恵器	甕
瓦類	平瓦（縄目）

S-41 明灰色土

須恵器	坏、壺、甕、風字硯
土師器	坏、甕
長沙窯系青磁	水注（1）
瓦類	平瓦（縄目）
緑釉陶器	碗（京都）（1）

S-42 明灰色土

須恵器	甕
土師器	甕（筑後）、供膳具（ヘラ）

S-43 明灰色土

須恵器	蓋c3、坏c、壺、破片
土師器	坏a、坏d、甕a、甕b
黒色土器A	破片
瓦類	破片（縄目）

S-45 暗灰色土

須恵器	蓋3、坏c、壺、甕b、甕、鉢b
土師器	坏a、碗c1、碗c、高坏、甕a（筑後）、甕a
黒色土器A	碗、甕
越州窯系青磁	水注：Ⅰ（1）
長沙窯系青磁	水注（1）
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（縄目）
石製品	碁石
灰釉陶器	破片（1）
その他	焼土塊

S-46 暗灰色土

須恵器	蓋3、甕
土師器	坏a

S-47 褐色土

須恵器	甕、供膳具、貯蔵具
土師器	供膳具、破片（筑後）
黒色土器A	供膳具、破片

S-48 褐色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	甕、供膳具
瓦類	平瓦（縄目、格子、文字XV）

S-49 暗灰褐色土

須恵器	蓋3、坏c、坏、皿、壺、甕、鉢a3
土師器	蓋c、坏a、皿a、甕a、煮炊具
黒色土器A	碗
瓦類	破片（縄目）
石製品	碁石
灰釉陶器	皿（1）
土製品	カマド

S-50a 暗灰色土

須恵器	蓋1、蓋3、坏
土師器	坏c、坏×皿、煮炊具
黒色土器A	破片
その他	焼土塊

S-50a 明灰色土

須恵器	坏、甕
土師器	碗c、煮炊具

S-50b 暗灰色土

須恵器	蓋3
土師器	碗c、煮炊具
黒色土器A	供膳具
瓦類	平瓦（縄目）

S-50b 明灰色土

須恵器	蓋3
土師器	坏、煮炊具

S-50c 明灰色土

土師器	供膳具、煮炊具
-----	---------

S-50d 暗灰色土

須恵器	破片（肥後）
土師器	甕
瓦類	平瓦（縄目）

S-50d 明灰色土

土師器	坏、煮炊具
石製品	碁石

S-50e 暗灰色土

須恵器	破片
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	破片

S-50e 明灰色土

須恵器	坏a
土師器	煮炊具

S-50f 暗灰色土

須恵器	坏
土師器	坏d、煮炊具

S-50f 明灰色土

須恵器	破片
土師器	供膳具、煮炊具

S-50g 暗灰色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	坏a
黒色土器A	碗、破片

S-50h 暗灰色土

須恵器	壺
土師器	坏、煮炊具
黒色土器A	供膳具
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（格子）
金属製品	鉄滓

S-50i 暗灰色土

須恵器	蓋3、坏、壺
土師器	坏×皿c
瓦類	平瓦（格子）

S-50i 明灰色土

須恵器	高坏、甕
土師器	煮炊具

S-51 明灰色土

須恵器	甕
土師器	供膳具
黒色土器A	破片
その他	焼土塊

大宰府条坊跡第230次調査 出土遺物一覧表（4）

S-52 暗灰褐色土

須恵器	坏a、坏c、小壺、甕
土師器	供膳具（ヘラ）、煮炊具
瓦類	平瓦（格子）
その他	焼土塊

S-53 暗灰色土

須恵器	蓋3、坏a、坏c、壺、甕
土師器	碗c1、甕a（在地、筑後）
黒色土器A	碗c
瓦類	破片（縄目）
石製品	碁石
弥生土器	大型埴
その他	焼土塊

S-53 黒灰色土

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a、碗c1、皿a、甕a
黒色土器A	碗c1
瓦類	平瓦（縄目）
その他	焼土塊

S-54 暗灰色土

須恵器	蓋c3、蓋3、壺蓋、坏a、坏c、皿a、壺、甕b、甕
土師器	蓋c3、蓋3、坏a、坏c、坏d、皿a、把手付甕、甕a、甕a（雲母）、甕（筑後）、甕
製造土器	焼埴壺
黒色土器A	供膳具
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（縄目）
土製品	カマド
その他	焼土塊

S-55 暗灰色土

須恵器	蓋3、坏c、壺f×d、甕
土師器	坏c、坏、皿1、甕、把手、煮炊具（在地、筑後）
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗
越州窯系青磁	破片：I（3）
瓦類	破片（格子）
緑釉陶器	破片（防長）（1）
灰釉陶器	破片（1）
白磁	皿：XI（1）、破片：I（1）

S-56 明灰色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	坏a（ヘラ）、坏c、甕a、甕
黒色土器A	供膳具
越州窯系青磁	碗：I-3（1）
瓦類	丸瓦（格子）
その他	焼土塊

S-57 明灰色土

須恵器	小壺
土師器	坏a、煮炊具
その他	焼土塊

S-58 明灰色土

須恵器	蓋3
土師器	坏a、碗c
黒色土器B	坏a
その他	焼土塊

S-60 明灰色土

須恵器	蓋3、坏a、甕、円面硯、供膳具
土師器	坏（畿内、在地）、甕、供膳具

S-61 明灰色土

須恵器	蓋3、坏c、壺e、甕
土師器	坏c、坏d、坏e、皿

S-62 明灰色土

須恵器	蓋b、甕
土師器	坏a、煮炊具

S-63 明灰色土

須恵器	壺、甕、供膳具
土師器	坏、煮炊具

S-65 暗灰色土

須恵器	蓋3、甕
土師器	碗c、甕a、煮炊具（在地、筑後）
瓦類	破片

S-67 明灰色土

須恵器	坏a、坏
土師器	坏、煮炊具
黒色土器A	碗

S-69 青灰色土

須恵器	坏c
土師器	蓋3、皿a、甕

S-70 暗灰褐色土

須恵器	蓋、坏c、坏身、甕
土師器	坏a、坏、碗c、甕
越州窯系青磁	破片：I（1）
瓦類	平瓦（縄目）
灰釉陶器	段皿（1）、碗×皿（1）
土製品	カマド
その他	焼土塊

S-71 暗灰褐色土

須恵器	蓋3、蓋、坏、高坏、甕
土師器	坏a、坏c、碗c、皿b、煮炊具
瓦類	破片
石製品	黒曜石

S-72 黒褐色土

須恵器	破片
土師器	供膳具

S-73 暗灰色土

須恵器	蓋3、壺、甕
土師器	蓋4、甕（在地、筑後）、供膳具

S-74 暗灰色土

須恵器	甕
土師器	坏a（ヘラ）、高台、甕

S-75 明灰色土

須恵器	坏c、甕
土師器	碗c
越州窯系青磁	碗：I（1）、破片：II（1）

S-76 暗灰色土

須恵器	蓋c、蓋3、甕
土師器	坏a（ヘラ）、坏a、坏c、甕

S-77 暗灰色土

須恵器	坏c、壺b、甕
土師器	坏a、坏c、煮炊具
黒色土器A	供膳具
その他	焼土塊

S-78 暗灰色土

須恵器	蓋4、脚（風字硯？）、甕、供膳具
土師器	坏a、甕a、供膳具
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片

S-79 明灰色土

須恵器	蓋3
土師器	坏a、坏c、甕
瓦類	丸瓦（調整不明）

S-81 暗青灰色土

須恵器	蓋3、蓋、坏、甕
土師器	坏a（ヘラ）、坏c、壺、小甕（雲母）、甕
瓦類	平瓦（縄目）

S-82 灰色土

須恵器	坏a、甕、破片
土師器	坏a、甕、供膳具、煮炊具
黒色土器A	破片
瓦類	破片

S-83 暗灰色土

須恵器	蓋c、坏c、高坏、甕
土師器	坏a（ヘラ）、坏c、皿a
黒色土器A	碗c
瓦類	平瓦（縄目）
その他	焼土塊

S-84 暗灰色土

須恵器	甕（器面摩耗）、破片
土師器	碗c、甕

S-86 明灰色土

須恵器	壺
-----	---

大宰府条坊跡第230次調査 出土遺物一覧表（5）

S-87 暗灰色土	
土 師 器	供膳具
S-88 暗灰褐色土	
須 恵 器	破片
土 師 器	破片（油煙）
S-89 暗灰褐色土	
須 恵 器	蓋3、小坏c、坏c、壺f×d、壺?、甕
土 師 器	坏a、小皿a、甕
黒色土器B	供膳具
そ の 他	焼土塊
S-90 a 灰黄褐色土	
須 恵 器	坏×皿
S-91 明灰色土	
土 師 器	坏a（へう）、煮炊具
S-92 灰褐色土	
須 恵 器	蓋3、皿、甕
土 師 器	甕（雲母）、甕、供膳具
黒色土器B	破片
灰 釉 陶 器	破片（1）
そ の 他	焼土塊
S-93 明灰色土	
須 恵 器	壺×鉢、甕
土 師 器	供膳具、破片
S-94 暗灰色土	
須 恵 器	甕、供膳具
土 師 器	小坏、坏、甕
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
S-95 灰白色土	
須 恵 器	小坏a
土 師 器	甕、把手付甕、供膳具
S-96 明灰色土	
須 恵 器	供膳具
土 師 器	供膳具
そ の 他	焼土塊
S-98 暗灰色土	
須 恵 器	蓋1、蓋3、供膳具
土 師 器	坏a、坏d、甕a
瓦 類	平瓦（縄目）
S-99 暗灰色土	
須 恵 器	坏c、供膳具
土 師 器	坏a、甕
S-100 a 灰黄褐色土	
須 恵 器	蓋3、鉢a、供膳具
土 師 器	供膳具
S-100 b 灰黄褐色土	
土 師 器	供膳具
S-100 c 灰黄褐色土	
須 恵 器	壺、供膳具
土 師 器	供膳具
S-100 d 灰黄褐色土	
土 師 器	供膳具、煮炊具
S-100 f 灰黄褐色土	
土 師 器	供膳具、煮炊具
S-100 g 灰黄褐色土	
須 恵 器	甕

S-100 i 灰黄褐色土	
土 師 器	破片
S-101 暗灰色土	
須 恵 器	蓋3、坏a、坏c、甕
土 師 器	坏a（へう）、甕a、甕b
そ の 他	焼土塊
S-103 黒灰色土	
須 恵 器	甕
土 師 器	供膳具
S-105 暗灰色土	
土 師 器	坏a、甕a
S-106 灰色土	
須 恵 器	甕
土 師 器	甕a、甕、供膳具
S-107 灰褐色土	
須 恵 器	破片
土 師 器	甕、供膳具
S-110 d 灰黄褐色土	
須 恵 器	甕、供膳具
S-112 灰褐色土	
土 師 器	煮炊具、破片
S-113 灰白色土	
須 恵 器	壺、甕a
表土	
須 恵 器	蓋c、蓋1、蓋3、蓋、坏a、坏c、坏、坏身、小壺、壺、甕b、甕
土 師 器	蓋3、蓋、坏a、坏c、坏d、丸底坏、碗c、碗c1、皿a、皿2、高坏、器白、甕a、甕b、甕、把手付甕、把手焼塩壺
製 塩 土 器	焼塩壺
黒色土器A	碗c、碗c1、碗2、碗、破片
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（2）、Ⅱ（1）、破片（1）
長沙窯系青磁	水注（4）
龍泉窯系青磁	碗：Ⅲ（1）
瓦 類	平瓦（縄目、格子）、丸瓦（縄目）、丸瓦、軒平瓦、破片（格子）
石 製 品	紡錘車、剥片（黒曜石）
緑 釉 陶 器	平瓶（防長）（1）、碗（近江）（1）、破片（京都）（2）
灰 釉 陶 器	皿（1）
肥前系陶磁器	瓶（1）
土 製 品	カマド
そ の 他	焼土塊
灰色土	
須 恵 器	蓋c3、蓋c、蓋3、坏a、坏c、坏、皿a、皿3、壺、甕、鉢
土 師 器	坏c、坏、丸底坏a、碗c、皿a、皿3、皿、壺a、甕a（在地、筑後）、甕a、甕、把手
黒色土器A	碗c、破片
瓦 類	平瓦（縄目）、破片（縄目）
緑 釉 陶 器	碗（京都）（1）、破片（近江）（2）
白 磁	破片：広東系（1）
土 製 品	榼
褐色土	
須 恵 器	蓋c、蓋1、蓋3、坏c、壺、甕
土 師 器	坏c、高台、甕a、甕、供膳具、煮炊具
土 製 品	カマド
褐色土（調査区壁際）	
須 恵 器	蓋c、蓋1、坏a、坏c、高坏、壺、鉢
土 師 器	蓋c、坏c、皿b、高坏、把手、煮炊具
瓦 類	破片（縄目）
黄褐色砂	
土 師 器	煮炊具

大宰府条坊跡第230次調査 遺物計測表(1)

S-1 明灰色土

単位=cm、()=復元数値、+α=残存高

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
土師器	碗c1	第28図-1	R-001	(11.0)	4.9	7.0		○		
土師器	碗c1	第28図-2	R-002	(12.0)	4.0+α			○		
土師器	皿c	第28図-3	R-003	(12.4)	2.2	(6.6)				
石製品	面子?	第28図-4	R-004							

S-2 褐灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
土師器	甕	第19図-1	R-001		3.3+α					
青磁	未分類	第19図-2	R-002		2.0+α					
陶器	甕	第19図-3	R-003		6.2+α					朝鮮系
土師器	丸底坏a		M-001	(15.8)	3.5		ヘラ		○	
土師器	小皿a		M-002	(11.0)	1.4	(8.0)	ヘラ			
土師器	小皿a		M-003	(11.0)	1.2	(8.0)	ヘラ		○	
土師器	小皿a		M-004	(10.6)	1.0	(8.0)	ヘラ			
土師器	小皿a		M-005	(10.0)	1.4	(7.0)	ヘラ		○	
土師器	小皿a		M-006	(9.0)	1.1	(6.6)	ヘラ		○	
土師器	小皿a		M-007	10.4	1.5	8.2	ヘラ		○	

S-2 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
陶器	甕	第19図-4	R-001	(16.4)	2.3+α					朝鮮系

S-2 黒褐色粘土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
黒色土器B	鉢	第19図-5	R-001		4.8+α					

S-2 明褐色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
緑釉陶器	碗	第19図-9	R-001		1.8+α	(6.1)				近江産
黒色土器B	碗	第19図-8	R-002		2.4+α					
須恵器	捏鉢	第19図-7	R-003		2.2+α		静止糸切り			篠
須恵器	壺	第19図-6	R-004		4.6+α					搬入品
石製品	砥石	第19図-10	R-005							

S-4 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
土師器	甕	第23図-1	R-001		1.7+α					

S-4 褐色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
土師器	坏	第23図-2	R-001		3.4+α					

S-5 褐灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
白磁	碗	第20図-4	R-001		2.8+α					XI 1類
緑釉陶器	破片	第20図-3	R-002		1.5+α					東海産
緑釉陶器	破片	第20図-2	R-003		1.3+α					産地不明
黒色土器A	鉢	第20図-1	R-004		7.2+α					

S-5 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
鉄製品	釘	第20図-5	R-001							
土師器	丸底坏a		M-001	(15.4)	4.1+α		ヘラ			

大宰府条坊跡第230次調査 遺物計測表(2)

S-5 灰褐色粘土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
土師器	坏	第20図-6	R-001		2.2+ α					畿内産

S-6 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
土師器	碗c2	第21図-2	R-001	(15.2)	5.1	6.9				
土師器	小皿2	第21図-3	R-002	(10.0)	(0.9)	(7.0)				
土師器	甕	第21図-4	R-003		1.6+ α					
黒色土器A	甕	第21図-5	R-004		3.7+ α					墨書
黒色土器B	碗c2	第21図-7	R-005	(15.6)	4.7+ α					
黒色土器B	碗	第21図-8	R-006	(16.0)	2.6+ α					
黒色土器B	碗c2	第21図-6	R-007	(16.0)	4.6+ α					
緑釉陶器	破片	第21図-9	R-008		1.7+ α					京都産
須恵器	捏鉢	第21図-1	R-009		2.0+ α					搬入品
石製品	磨石	第21図-12	R-010							
鉄製品	釘	第21図-10	R-011							
鉄製品	釘	第21図-11	R-012							
土師器	小皿a		M-001	(9.4)	1.3	(7.8)	ヘラ	○	○	
土師器	小皿a		M-002	(10.2)	1.2	(7.8)	—	—	—	
土師器	小皿a		M-003	(9.8)	1.3	(6.8)	ヘラ	—	○	
土師器	小皿a		M-004	(10.4)	1.2	(8.0)	ヘラ	×	×	
土師器	小皿a		M-005	(10.2)	1.5	(8.0)	ヘラ	—	—	
土師器	小皿a		M-006	(9.8)	1.3	(7.6)	ヘラ	×	×	
土師器	小皿a		M-007	9.7	1.3	7.6	ヘラ	○	○	
土師器	小皿a		M-008	10.0	1.8	8.0	ヘラ	○	○	
土師器	小皿a		M-009	9.6	1.3	6.7	ヘラ	○	×	
土師器	小皿a		M-010	9.5	1.3	7.4	ヘラ	—	○	
土師器	小皿a		M-011	(10.0)	1.2	(7.2)	ヘラ	○	○	
土師器	小皿a		M-012	(9.4)	1.6	(6.8)	ヘラ	○	○	
土師器	小皿a		M-013	(9.8)	1.0	(6.8)	ヘラ	○	×	
土師器	小皿a		M-014	10.2	1.4	6.4	ヘラ	○	○	写真資料
土師器	小皿a		M-015	9.0	1.3	6.5	—	—	○	写真資料
土師器	小皿a		M-016	9.7	1.5	6.8	ヘラ	○	○	写真資料
土師器	丸底坏a		M-017	15.0	3.1					
土師器	丸底坏a		M-018	12.8	3.3+ α					
土師器	丸底坏a		M-019	14.8	3.4+ α					
土師器	丸底坏a		M-020	15.6	4.4					
土師器	丸底坏a		M-021	16.2	4.5					
土師器	丸底坏a		M-022	14.6	3.1					
土師器	丸底坏a		M-023	15.8	3.2+ α					
土師器	丸底坏a		M-024	15.4	3.6					
土師器	丸底坏a		M-025	15.8	3.7					
土師器	丸底坏a		M-026	15.0	4.5					

S-6 黒灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
土師器	丸底坏	第21図-13	R-001	(13.0)	3.4+ α			○		
黒色土器B	碗c2	第21図-14	R-002		3.7+ α	7.1			○	
緑釉陶器	皿	第21図-16	R-003		1.3+ α					東海産
緑釉陶器	碗	第21図-15	R-004		3.1+ α					近江産
土師器	小皿a		M-001	(10.2)	1.1	(7.2)	ヘラ	—	○	

大宰府条坊跡第230次調査 遺物計測表(3)

土師器	小皿 a		M-002	(10.0)	1.1	(7.0)	ヘラ	○	×	
土師器	小皿 a		M-003	(9.6)	1.3	(6.8)	ヘラ	—	○	
土師器	丸底坏 a		M-004	15.0	3.2					
土師器	丸底坏 a		M-005	(15.2)	4.0					
土師器	丸底坏 a		M-006	(17.0)	4.2					
土師器	丸底坏 a		M-007	(15.4)	3.1+ α					
土師器	丸底坏 a		M-008	(15.8)	3.7+ α					
土師器	丸底坏 a		M-009	(15.4)	3.1+ α					

S-6 暗灰褐色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
黒色土器B	椀	第21図-17	R-001		2.7+ α					
土製品	玉	第21図-18	R-002		2.2					用途不明
鉄製品	釘	第21図-19	R-003							

S-7 赤褐色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	蓋 4	第28図-1	R-001	(18.8)	2.0					
須恵器	甕	第28図-3	R-002		6.5+ α					
須恵器	甕	第28図-2	R-003	(19.0)	7.8+ α					
黒色土器A	椀	第28図-4	R-004		4.1+ α					
黒色土器A	椀	第28図-5	R-005		3.1+ α					
土師器	皿 a		M-001	14.0	2.0	10.5	ヘラ	×	×	写真資料
土師器	坏 a		M-002	12.4	3.9	7.2	ヘラ	—	—	写真資料
土師器	坏 a		M-003	(12.0)	4.2	(6.8)	ヘラ	×	×	
土師器	坏 a		M-004	(12.0)	2.6+ α					
土師器	坏 a		M-005	(12.0)	2.9+ α					

S-10 暗灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
黒色土器A	椀 c	第16図-4	R-001		3.1+ α	8.0		○	○	
土師器	椀 c 1	第16図-1	R-002		2.6+ α	7.2		○		
土師器	甕 a	第16図-3	R-003	(26.2)	6.8+ α					
土師器	甕 a	第16図-2	R-004	(21.6)	4.7+ α					
黒色土器A	椀	第16図-5	R-005	(12.6)	3.4+ α					
その他	土壁?		R-006							写真資料

S-10 灰褐色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	坏 c	第16図-7	R-001		2.2+ α	9.4		○		
土師器	坏	第16図-6	R-002		2.85+ α					
土師器	甕 a	第16図-9	R-003	(30.0)	15.1+ α					
土師器	甕	第16図-8	R-004	(20.0)	5.6+ α					
黒色土器A	椀	第16図-10	R-005		3.4+ α					

S-11 明灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	蓋 3	第24図-3	R-001		1.2+ α					
土師器	甕 a	第24図-4	R-002		5.3+ α					
須恵器	坏	第24図-2	R-003		4.6+ α					
須恵器	坏 c	第24図-1	R-004		2.3+ α	(7.3)				

大宰府条坊跡第230次調査 遺物計測表 (4)

S-18 褐灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	坏 c	第28図-1	R-001		3.2+ α	6.6		○		
土師器	甕 a	第28図-2	R-002	(18.2)	6.5+ α					
黒色土器A	碗 c	第28図-3	R-003		3.6+ α	(9.0)				

S-19 明灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	皿	第31図-1	R-001		2.3+ α					

S-23 暗灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	風字硯	第31図-1	R-001		3.8					横田Ⅱ類
土師器	坏	第31図-2	R-002		2.1+ α					

S-24 暗灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	坏 a	第28図-1	R-001		2.7+ α	(7.7)	ヘラ	○		
緑釉陶器	皿×碗	第28図-2	R-002		2.4+ α					京都産

S-25 暗灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	坏×皿	第14図-3	R-001		0.9+ α					畿内系
黒色土器B	小皿 a	第14図-5	R-002	(11.7)	1.9	(8.0)		○		
黒色土器A	碗	第14図-4	R-003	(14.8)	3.9+ α					
緑釉陶器	碗	第14図-6	R-004		2.5+ α	8.6				近江産 表土資料と接合
緑釉陶器	碗	第14図-7	R-005		2.3+ α	(7.0)				近江産
緑釉陶器	破片	第14図-9	R-006		1.2+ α	(7.1)				東海産
緑釉陶器	皿	第14図-8	R-007	(12.8)	1.6+ α					京都産
須恵器	捏鉢	第14図-1	R-008		2.2+ α					篠
須恵器	捏鉢	第14図-2	R-009		2.1+ α					篠
瓦	文字瓦	第14図-10	R-010							Ⅵ-3「筑」
土師器	坏 a		M-001	(11.2)	2.2	(6.8)	ヘラ	○		

S-30 暗灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	小皿 a 1	第15図-1	R-001	(9.0)	1.0	(6.3)	ヘラ			
黒色土器B	碗	第15図-2	R-002		1.7+ α					
瓦	軒丸瓦	第15図-3	R-003							
石製品	砥石	第15図-4	R-004							
土師器	坏 a		M-001	(13.4)	3.8+ α	(6.8)	ヘラ	○		
土師器	坏 a		M-002	(13.0)	3.3+ α	(7.4)	ヘラ	○	○	

S-34 暗灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	坏 a	第31図-1	R-001	(13.4)	2.1	(9.0)	ヘラ	○		

S-39 明灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
灰釉陶器	碗	第31図-1	R-001		2.1+ α	(7.4)				

S-40 暗灰色土

種 別	器 種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
黒色土器A	碗 c	第25図-8	R-001		5.0+ α	(9.8)				
土師器	甕 a	第25図-5	R-002	(24.6)	8.7+ α					
土師器	甕 a	第25図-6	R-003	(24.6)	6.8+ α					
土師器	甕 a	第25図-7	R-004		8.7+ α					

大宰府条坊跡第230次調査 遺物計測表(5)

土師器	甕	第25図-4	R-005	(16.2)	6.7+ α					
土師器	甕	第25図-2	R-006	(13.0)	3.4+ α					
土師器	甕	第25図-3	R-007		3.2+ α					
黒色土器A	椀	第25図-10	R-008		4.6+ α					
黒色土器A	椀	第25図-9	R-009	(16.0)	4.2+ α					
黒色土器A	椀	第25図-11	R-010		2.8+ α					
須恵器	小蓋	第25図-1	R-011	(4.6)	1.0					
灰釉陶器	椀	第25図-14	R-012		3.8+ α					
瓦	軒丸瓦	第26図-25	R-013							瓦当
瓦	丸瓦	第26図-26	R-014		9.6					縄目
土製品	玉	第25図-15	R-015		2.7					用途不明
土製品	玉	第25図-16	R-016		2.2					用途不明
土製品	玉	第25図-17	R-017		2.3					用途不明
土製品	玉	第25図-18	R-018		1.3					用途不明
土製品	玉	第25図-19	R-019		2.1					用途不明
土製品	玉	第25図-20	R-020		1.7					用途不明
土製品	玉	第25図-21	R-021		1.8					用途不明
土製品	玉	第25図-22	R-022		2.4					用途不明
土製品	玉	第25図-23	R-023		1.9					用途不明
土製品	玉	第25図-24	R-024		1.5					用途不明
緑釉陶器	椀	第25図-13	R-025	(18.4)	5.8	8.0				京都産
黒色土器A	甕	第25図-12	R-026	(13.6)	6.0+ α					
須恵器	甕		R-027							写真資料
土師器	坏×皿		R-028							写真資料
青磁(褐彩)	水注		R-029							長沙窯系 写真資料
土師器	皿a		M-001	(13.6)	1.6	10.4	ヘラ			
土師器	坏a		M-002	12.2	3.3	7.2	ヘラ			
土師器	坏a		M-003	(12.4)	4.2+ α	(7.4)	ヘラ			
土師器	坏a		M-004	(12.4)	3.7	7.2	ヘラ			
土師器	坏a		M-005	(13.4)	3.6+ α	(7.4)	ヘラ			
土師器	坏a		M-006	(13.4)	3.6+ α	(8.2)	ヘラ			
土師器	坏c		M-007	(11.8)	3.5+ α					

S-41 明灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
緑釉陶器	椀×皿	第27図-1	R-001		1.9+ α					京都産

S-45 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
土師器	椀c	第27図-1	R-001		2.6+ α	(7.0)		○		
黒色土器A	鉢	第27図-2	R-002		5.6+ α					
青磁(褐彩)	水注	第27図-3	R-003		3.9+ α					長沙窯系
石製品	砥石	第27図-4	R-004							
土師器	坏a		M-001	(12.6)	3.5	(7.3)		○		

S-48 褐灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口径	器高	底径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備考
瓦	平瓦		R-001							文字瓦(格子) XV 写真資料

大宰府条坊跡第230次調査 遺物計測表(6)

S-49 暗灰褐色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	皿 a	第28図-2	R-001	(14.0)	2.0	(10.0)	ヘラ	○		
土師器	皿 a	第28図-1	R-002	(12.2)	1.6	(8.5)	ヘラ	○		
黒色土器A	椀	第28図-3	R-003	(12.4)	3.3+ α					
黒色土器A	椀	第28図-4	R-004		3.8+ α					
灰釉陶器	皿	第28図-5	R-005		1.3+ α					

S-50 a 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	供膳具	第18図-1	R-001		1.4+ α					

S-50 d 明灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	供膳具	第18図-2	R-001		1.8+ α					

S-50 f 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	供膳具	第18図-3	R-001		1.4+ α					

S-50 g 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
黒色土器A	椀	第18図-4	R-001		2.5+ α					

S-50 h 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
黒色土器A	供膳具	第18図-5	R-001		2.0+ α					

S-50 i 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	供膳具	第18図-6	R-001		1.7+ α					
土師器	供膳具	第18図-7	R-002		1.7+ α					
土師器	坏×皿 c	第18図-8	R-003		1.4+ α					

S-53 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	坏 a	第29図-1	R-001	(13.4)	3.1	(7.8)	ヘラ	○	○	
土師器	甕 a	第29図-4	R-002		7.3+ α					
土師器	坏 a	第29図-2	R-003	(13.8)	(3.7)	7.0	ヘラ	○		
土師器	坏	第29図-3	R-004		3.6+ α					

S-53 黒灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	大椀	第29図-5	R-001	(21.2)	7.0+ α					
土師器	皿 a	第29図-9	R-002	(13.0)	(1.7)	(8.6)				
土師器	坏 a	第29図-6	R-003	(12.4)	3.6	(6.0)				
土師器	坏	第29図-7	R-004	(14.4)	5.3+ α					
土師器	椀 c 1	第29図-8	R-005	15.0~15.4	5.6+ α			○		
黒色土器A	椀 c 1	第29図-10	R-006	(19.2)	7.0	(8.5)		○		

S-54 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	坏 a	第30図-5	R-001	(13.0)	3.9	7.7	ヘラ	○		
須恵器	甕	第30図-7	R-002	(18.0)	3.8+ α					
須恵器	蓋 3	第30図-2	R-003	(14.4)	1.4+ α					
須恵器	蓋 3	第30図-1	R-004	(13.6)	1.7+ α					
須恵器	蓋 3	第30図-3	R-005	(19.4)	2.4+ α					
須恵器	皿 a	第30図-6	R-006		2.1+ α					

大宰府条坊跡第230次調査 遺物計測表(7)

須恵器	壺蓋	第30図-4	R-007		1.8+ α					
土師器	蓋c3	第30図-8	R-008	(17.0)	1.9+ α					
土師器	皿c	第30図-11	R-009	(23.2)	1.9+ α					
土師器	皿a	第30図-10	R-010	(17.0)	1.3	(12.8)				
土師器	坏c	第30図-9	R-011	(15.6)	5.3	(8.0)		○		
土師器	甕a	第30図-12	R-012	(16.4)	4.5+ α					
土師器	甕a	第30図-13	R-013	(16.4)	4.3+ α					
土師器	甕a	第30図-14	R-014	(26.8)	5.8+ α					
土師器	甕	第30図-15	R-015	(15.0)	5.7+ α					
土師器	カマド	第30図-16	R-016		7.3+ α					

S-55 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
灰釉陶器	碗×皿	第22図-1	R-001		1.4+ α	(8.4)				

S-60 明灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	蓋3	第27図-1	R-001		1.0+ α					
土師器	坏	第27図-2	R-002	(14.8)	2.8+ α					
土師器	坏	第27図-3	R-003		3.3+ α					畿内系

S-61 明灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	坏e	第31図-2	R-001	(9.8)	3.9	6.0	ヘラ			
土師器	坏c	第31図-1	R-002		4.0+ α	(7.8)		○		
土師器	皿	第31図-3	R-003	(15.0)	2.2+ α					

S-70 暗灰褐色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
灰釉陶器	碗×皿	第31図-3	R-001		1.8+ α	(8.4)				
灰釉陶器	段皿	第31図-4	R-002	(17.4)	2.6+ α					
土師器	碗c	第31図-2	R-003		3.4+ α	(8.4)				
土師器	坏	第31図-1	R-004	(16.4)	3.7+ α					

S-74 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	坏a	第31図-1	R-001	(13.0)	3.8	(7.6)	ヘラ	○		

S-75 明灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	坏c	第17図-1	R-001		3.4+ α	(7.6)		○		

S-78 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	坏	第31図-2	R-001		3.1+ α					
土師器	坏	第31図-1	R-002	(12.6)	2.7+ α					
土師器	坏	第31図-3	R-003		2.7+ α					

S-90a 灰黄褐色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	坏×皿	第18図-1	R-001		2.3+ α					

S-95 灰白色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	小坏a	第27図-1	R-001	11.2	3.3~4.0	6.6				
土師器	甕	第27図-2	R-002	13.6	7.9				○	
土師器	把手付甕	第27図-3	R-003	(30.2)	16.2+ α					

大宰府条坊跡第230次調査 遺物計測表(8)

S-98 暗灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土師器	坏	第31図-1	R-001		2.3+ α					
土師器	坏	第31図-2	R-002		1.8+ α					
土師器	坏	第31図-3	R-003		1.7+ α					

S-100a 灰黄褐色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	蓋3	第18図-1	R-001		1.1+ α					

S-113 灰白色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	壺	第31図-1	R-001		4.0+ α	(9.0)				

表 土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
緑釉陶器	平瓶	第32図-1	R-001		8.7+ α	14.8				防長産 S-18褐 灰色土・S-32褐 色土と接合
灰釉陶器	皿	第32図-2	R-002	(14.0)	2.1+ α					東海産

灰色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
緑釉陶器	碗	第32図-2	R-001		3.0+ α	(7.0)				京都産
土師器	蓋3	第32図-1	R-002		1.5+ α					
土製品	権	第32図-3	R-003							

褐色土

種別	器種	図版番号	R-番号	口 径	器 高	底 径	底部切離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須恵器	坏a	第33図-10	R-001	(13.2)	3.8	(9.2)	ヘラ			
須恵器	坏c	第33図-11	R-002		4.6+ α	(8.0)				
須恵器	坏c	第33図-14	R-003		3.0+ α					
須恵器	坏c	第33図-13	R-004		2.9+ α					
須恵器	坏c	第33図-12	R-005		2.2+ α	(8.6)				
須恵器	蓋c1	第33図-2	R-006	(13.4)	2.6+ α					
須恵器	蓋1	第33図-3	R-007	(13.3)	1.8+ α					
須恵器	蓋1	第33図-5	R-008		1.7+ α					
須恵器	蓋1	第33図-4	R-009		1.7+ α					
須恵器	蓋1	第33図-6	R-010		1.7+ α					
須恵器	蓋c	第33図-1	R-011		1.4+ α					
須恵器	蓋3	第33図-7	R-012		1.6+ α					
須恵器	蓋3	第33図-9	R-013		1.6+ α					
須恵器	蓋3	第33図-8	R-014		1.9+ α					
須恵器	鉢	第33図-15	R-015		3.1+ α					
土師器	坏c	第33図-18	R-016		1.8+ α					
土師器	坏c	第33図-17	R-017		3.1+ α					
土師器	坏c	第33図-16	R-018		4.0+ α					
土師器	高坏	第33図-19	R-019		8.5+ α	(16.2)				脚部
土師器	甕	第33図-20	R-020	(18.0)	10.4+ α					
土師器	甕	第33図-22	R-021		2.9+ α					
土師器	甕	第33図-21	R-022		6.3+ α					

図 版

※本書に掲載した写真図版番号は遺物の実測図と対応関係にあるが、写真図版のみの資料に関してはR（遺物）番号またはM（計測遺物）番号を表記した。



調査区全景（写真上が南東）



調査区全景（写真上が北東）

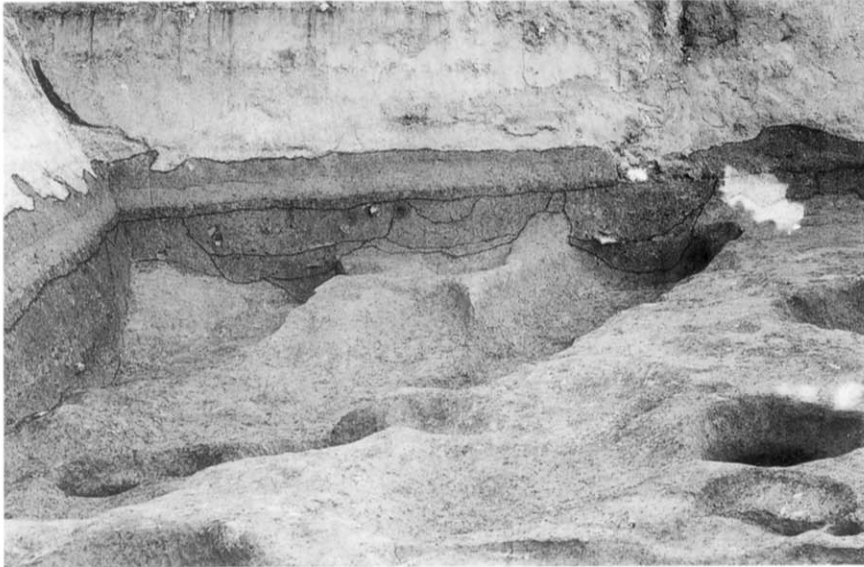
図版 2



調査区南側全景（写真上が北東）



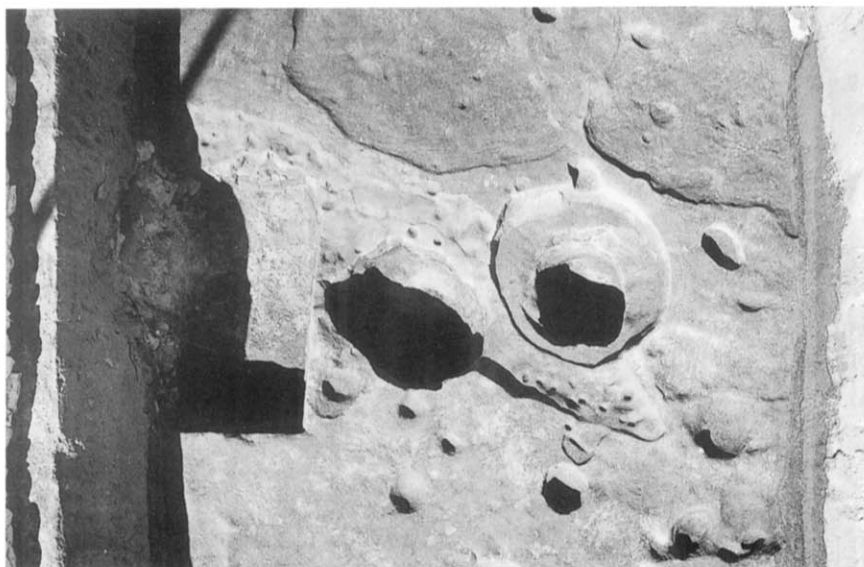
調査区全景（第Ⅱ面、南東から）



調査区南東壁土層断面



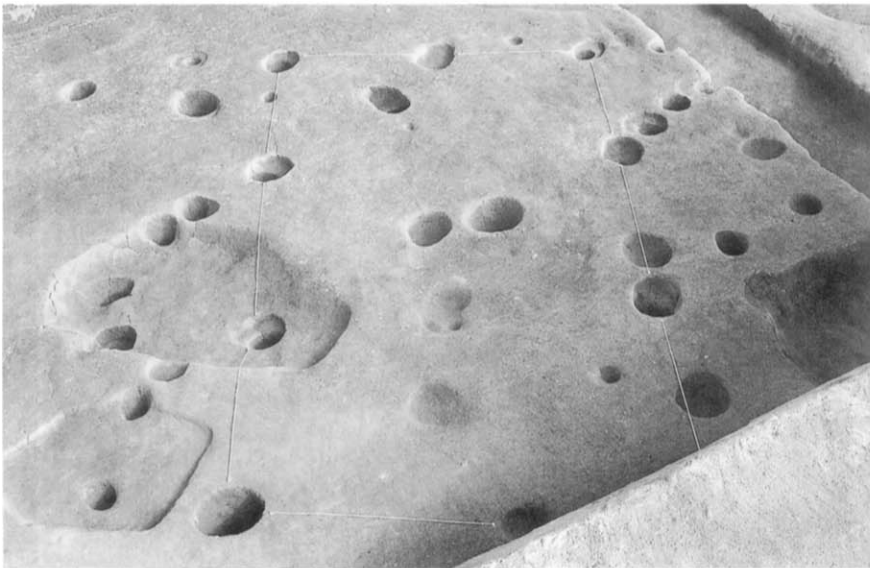
調査区北東壁土層断面



230SD025全景（写真上が北東）



230SD030全景（西から）



230SB050全景（西から）



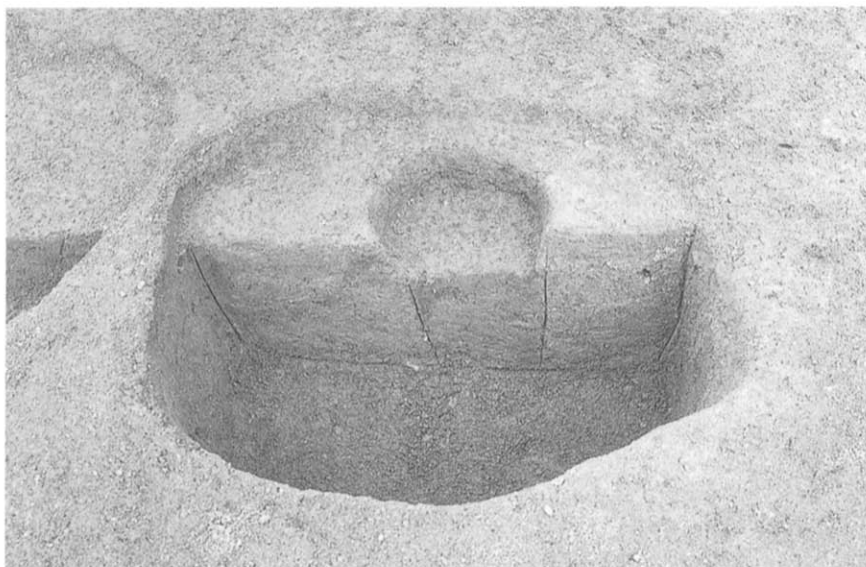
230SB090全景（西から）



230SB090 a 礫出土状態（北東から）



230SB090・100・110全景（北から）



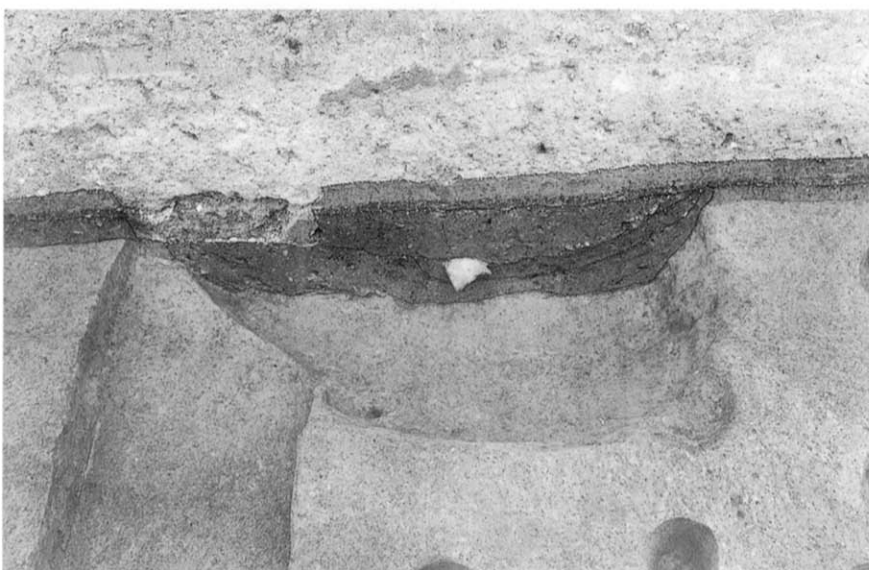
230SB100 j 土層断面（南から）



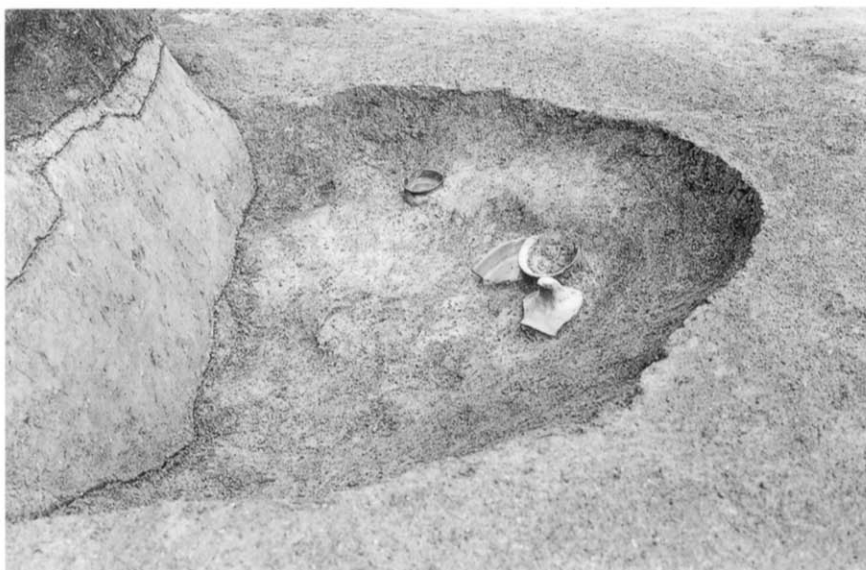
230SE005全景（東から）



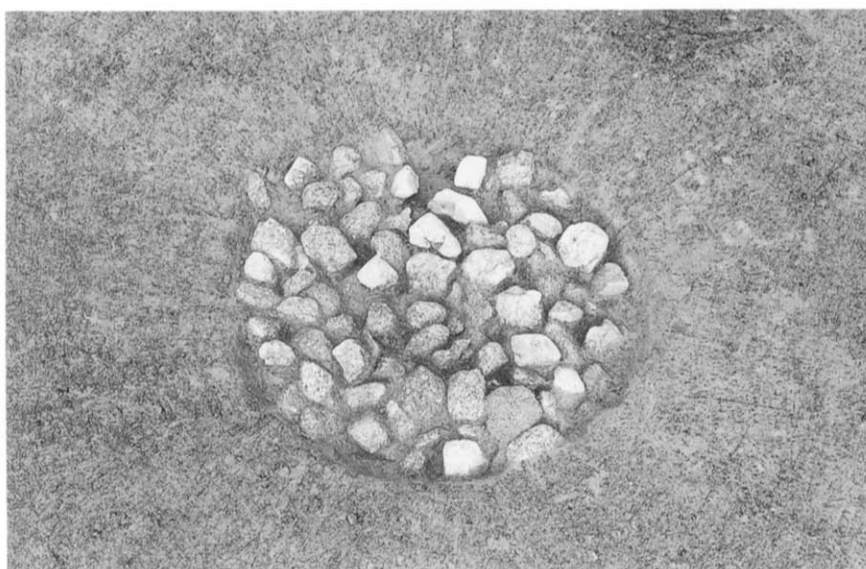
230SE006全景（南東から）



230SK040全景（北東から）



230SK095遺物出土状態（北西から）

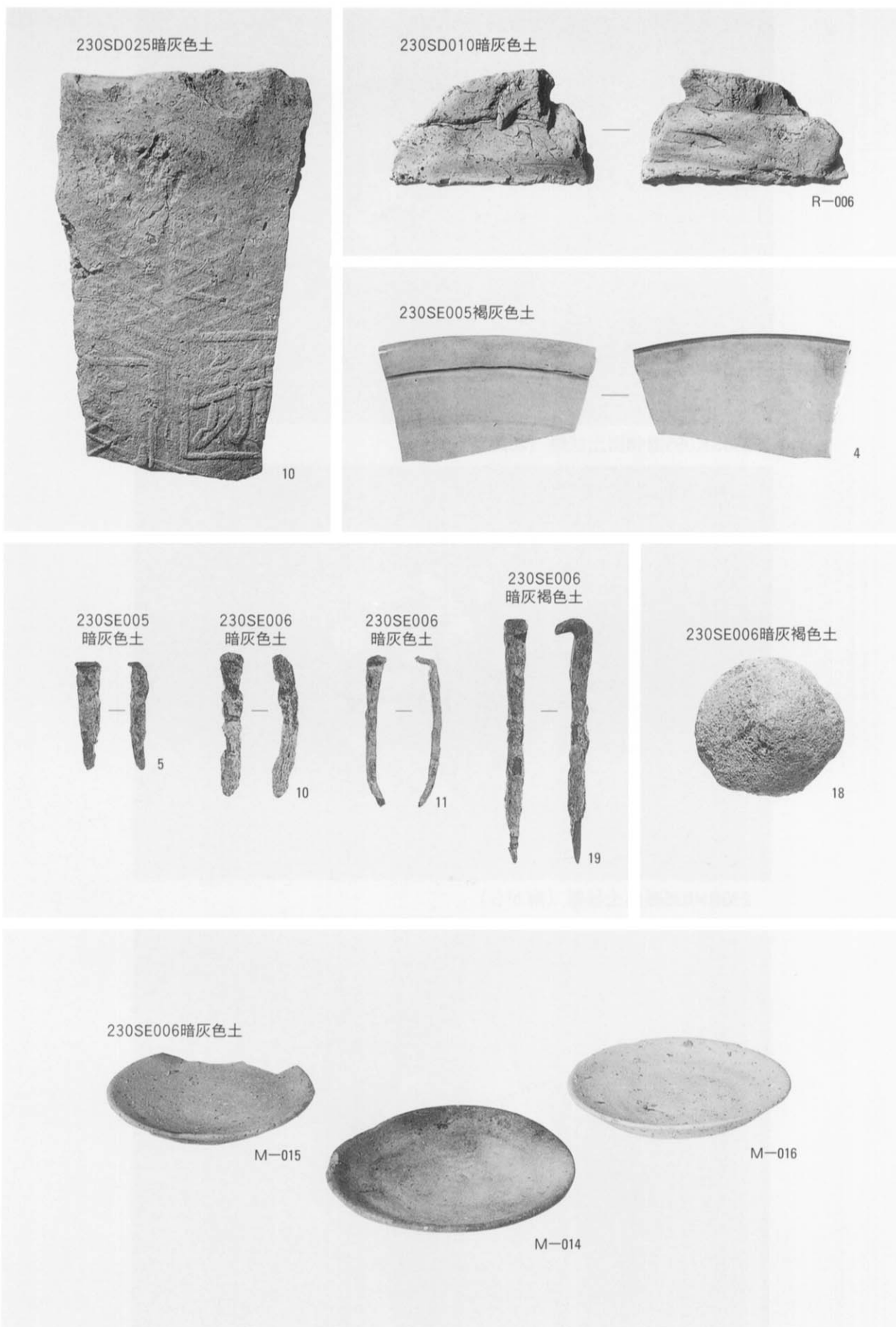


230SX035礫出土状態（南から）



230SX066礫出土状態（北東から）

图版 8



230SD025・010、230SE005・006出土遺物

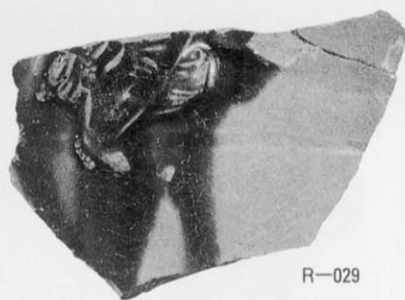
230SK040暗灰色土



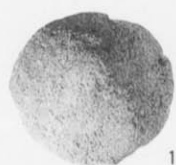
R-027



R-028



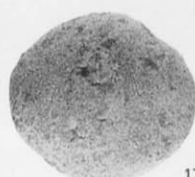
R-029



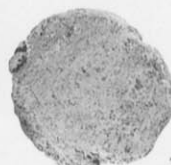
15



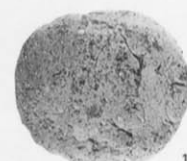
16



17



18



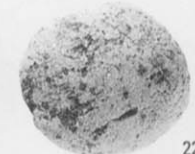
19



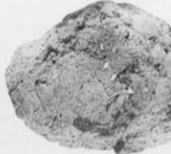
20



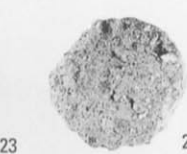
21



22



23

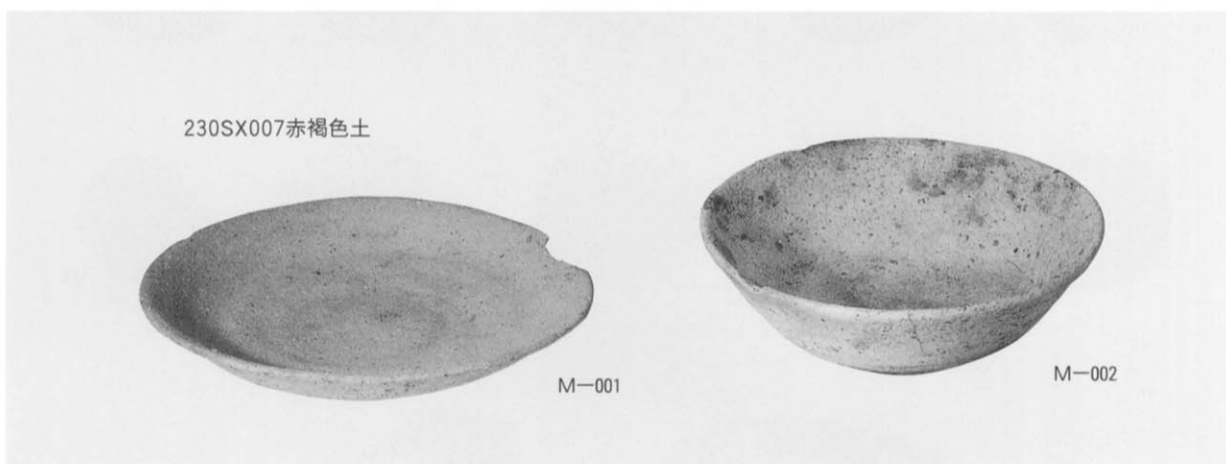
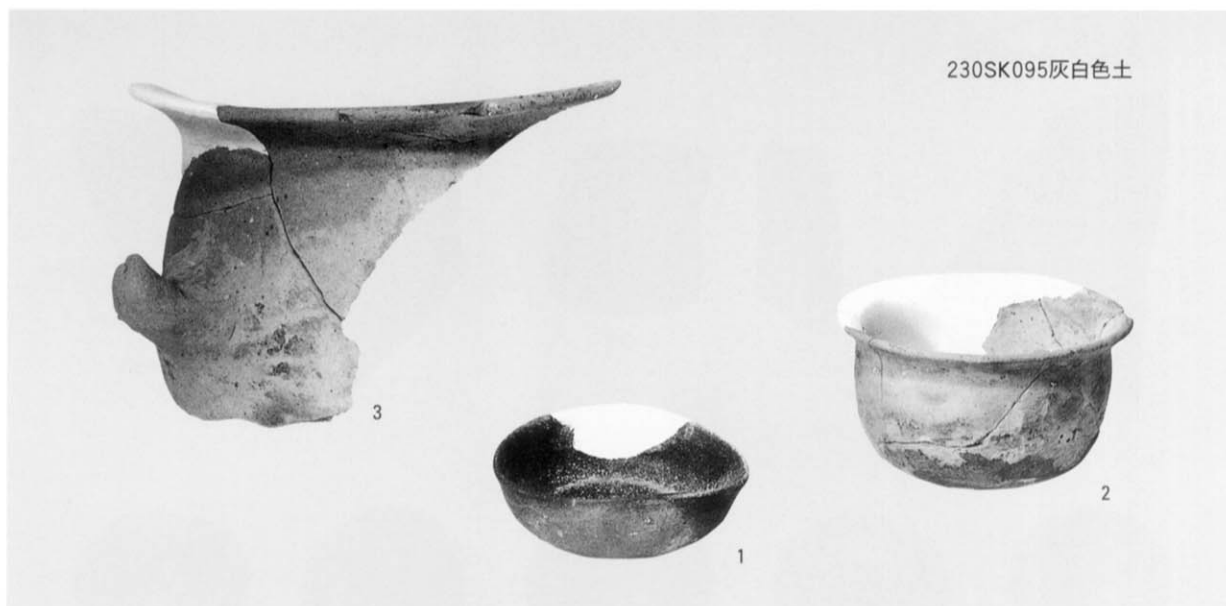


24



25

230SK040出土遺物



230SK095、230SX007・048、調査区内出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうほうあと 25									
書名	大宰府条坊跡 25									
副書名	第230次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	第75集									
編著者	北平朗久・下川可容子									
編集機関	太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所									
所在地	太宰府市教育委員会 〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1-1-1 TEL092-921-2121 玉川文化財研究所 〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9 TEL045-321-5565									
発行年月日	2004（平成16）年3月26日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
だざいふじょうほうあと 大宰府条坊跡 第230次	右郭11条6坊	だざいふし 太宰府市 通古賀4丁目 67番	402214	210044	+56020	-45390	20031007	20031215	207.5	共同住宅建設
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構			主要遺物			特記事項	
大宰府条坊跡 第230次	大宰府条坊	古墳後期 奈良・平安	道路・溝・掘立柱建物・横列 井戸・土坑・集石状遺構 小穴群・たまり状遺構			須恵器・土師器・黒色土器 瓦器・国産陶器・貿易陶磁器 瓦類・金属製品・石製品			条路および 坊路側溝検出	

太宰府市の文化財第75集

大宰府条坊跡 25

－第230次調査－

平成16年3月

発行 太宰府市教育委員会
〒818-0198 太宰府市観世音寺1-1-1
編集協力 玉川文化財研究所
〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川1-8-9
印刷 株式会社アルファ
〒250-0001 神奈川県小田原市扇町5-25-23